一般財団法人日本アジア振興財団（ＪＡＰＦ）

2019 年夏期インターンシップ論文集

期間：ベトナム・カンボジア 2019 年 8 月 18 日（日）～8 月 29 日（木）
　　カンボジア 2019 年 9 月 1 日（日）～9 月 8 日（日）

対象国：ベトナム社会主義共和国・カンボジア王国

参加人数：86 名
　　男女内訳：男 18 名、女 68 名
　　国籍：日本 85 名、中国 1 名

参加大学：愛知大学、茨城大学、岩手大学、宇都宮大学、大分大学、大阪大学、岡山大学、金沢大学、関西外国語大学、関西大学、北九州市立大学、九州産業大学、九州大学、京都教育大学、京都市立芸術大学、慶應義塾大学、高知大学、神戸女子大学、神戸大学、埼玉大学、島根県立大学、下関市立大学、城西大学、上智大学、首都大学東京、成城大学、筑紫女学園大学、都留文科大学、同志社大学、獨協大学、名古屋市立大学、奈良女子大学、南山大学、広島修道大学、福岡女子学院大学、武庫川女子大学、室蘭工業大学、明治大学、山口県立大学、横浜市立大学、早稲田大学

帰国後の活動：

・関西　修了式
日時：2019 年 9 月 27 日(金)14：00～15：00
場所：在大阪カンボジア王国名誉領事館

・関西　事後研修
日時：2019 年 9 月 27 日(金)15：00～19：00
場所：　梅田貸会議室「茶屋町あすいろ」

・関東　修了式、事後研修
日時：2019 年 9 月 17 日(火)14：00～18：00
場所：JICA 地球ひろば

・九州　修了式、事後研修
日時：2019 年 9 月 19 日(木)14：00～18：00
場所：　天神貸会議室「プリンス会議室」

・中部　修了式、事後研修
日時：2019 年 9 月 28 日(土)14：00～18：00
場所：　JICA 中部なごや地球ひろば

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation
発行：一般財団法人　日本アジア振興財団学生委員会

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【知った責任】

早稲田大学　法学部　1 年生

この研修で自分は何を学んだのか、そしてこれから何をしたいのかについて日本に帰国してから改めて考えてみると、達成感や満足感というよりも自分の無力さを痛感した。カンボジアで毎晩ディスカッションをしていたときや研修先を見学していたときには、カンボジアに自分がいてそこに住む人々と交流して、自分にも何かできるような気がした。ディスカッションでは日本は物質的に恵まれすぎているとか、海外のことに無関心だとか、そんなことがよく話し合われていたけれど、帰ってきたら好きなものを食べられて言葉が通じる快適な空間にすぐに馴染んでしまう。そんな中で、どうしたらカンボジアについての学びをこれからの日本での学生生活で活かすことができるのだろうか。

本当の支援とは何か、研修中に様々な視点から考えた。そもそも支援という言葉には力の差が内包されていて、強い国が弱い国を助けてあげるというニュアンスを感じる。実際に資金や技術を提供して「助けて」いることに違いないのだが、カンボジアに訪れてみて多少なりとも現地の人たちと関わりを持つと支援という言葉の裏にある上下関係に違和感を覚えてしまう。政府であれ NGO であれ、国際的な「支援」の裏には当然莫大な資金と様々な思惑がある。では、資金も技術もなく、見返りを求めない学生の私にはどんな「支援」ができるのだろうか。

帰国後、飛ぶように過ぎた１２日間を改めて振り返ってみて、純粋にカンボジアにとっての最適解を考えられる時間は学生の間のみなのではないかと思う。立場と肩書きがつけば、国益や利益、見返りを考えることなしにカンボジアのためだけを思うことはもうできないかもしれない。とはいえ学生の私が今すぐできることといえば、今回の経験をできるだけのたくさんの人と共有することくらいしかないだろう。私一人が経験を話したからってカンボジアの何が変わるのかと言われれば、何も変わらないかもしれない。そんなの綺麗事だと周りから言われたとしても、提供できる資金も伝えられる技術もない私に綺麗事以外に何かできることがあるのだろうか。

経験を共有することの意義は「今」のカンボジアについての情報の更新にある。今回の研修を終えて、メディアの情報は意図的に切り取られていることを痛感した。テレビの前の視聴者や書籍の読者が感傷的になるように作り上げられている。カンボジアに住んでいる人は全員貧困で苦しんでいて、感染病が蔓延していて、というような視聴率や書籍の売り上げのために都合よく作り上げられたイメージは虚像といっても過言ではない。実際に現地を訪れて直接話を聞いた私だからこそできることは、自分の周りの人たちが持っているであろうその虚像を壊してまわることだ。カンボジアがどんなところなのか、私たちは何を考えていかなければならないのか、その新しい視点を持って周りを inspire することなら私にもできる。

これから社会に出る学生の私たちだからこそ、今のうちに存分に「綺麗事」をしておかないといけない。将来、立場や肩書きを持って世界と関わっていくときにパブリックな視点を常に頭の片隅に置いておくためには、今考えなければならない。考えたことを実行できる力がついたときに行動に移せるように、「考える」という行動を今取ることに価値がある。そうして私は知った責任を果たしていこうと思う。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【過去と今】

関西外国語大学 短期大学部 1 年生

私は二カ国研修に参加して、ベトナム、カンボジアの歴史と今の現状や抱えている問題を知ることができた。それと同時に、私たちに今できることはあるのかを考えるきっかけになった。

ベトナムで一番印象に残っている研修先は、戦争証跡博物館だ。その中でも枯葉剤の影響で今も苦しんでいる人々の姿にとても胸が痛んだ。それと同時に、私には出来ることが無いのかもしれないととても無力に思えた。博物館の展示物、奇形児のブースを見ていて歩いて行くと実際に枯葉剤の影響で目を失った人、足を失った人、手が短い人がいた。それぞれ何か体に支障があるのに彼らは仕事をしていたり、ピアノを弾いていた。私は、目を失っているのにピアノを弾いている人を見て本当に言葉にできないくらいに心が苦しくなり、なんとも言えない感情になった。思い込みかもしれないが、私が彼を見た瞬間に彼が「上を向いて歩こう」を演奏した。その瞬間に私は涙が溢れそうになった。彼らに同情するのも違うことだと思うしどうしたらいいかがわからなくなった。何故、本人が一番辛いはずなのに「上を向いて歩こう」を弾いてるのかと疑問に思った。彼らを見て失礼だと思うが、本当に生きていて幸せなのかと思った。でも、後々きちんと考えてみると幸せかどうかは自分自身が決める事なのだと思った。幸せとは、考えたらきりが無い。

カンボジアで一番印象に残っている研修先は、ゴミ山だ。私は、ゴミ山のことはテレビで見たことがあったのでとても興味があった。実際にどんな人がそこにいるのかどんなゴミがあるのか想像がつかなかったので、訪れてみて凄く衝撃を受けた。そこには、大人から子供までいた。それと多くの鳥と犬もいた。そして、カンボジア中から集められたゴミがあった。そのせいで、今までに嗅いだことが無いとてつもない臭いがした。でも、現地の人はマスクもしないでゴミを集めていた。その時に、慣れはとても怖いと思った。その臭いやゴミは環境にも悪いし、人体にも悪い。なのに、ゴミ山が今もまだある理由は何か。それを、メンバーとディスカッションをした。その結論は、政府がゴミ処理のためお金をかけなくていいため、スカベンジャーのため、都市部のためと私が思っているよりもゴミ山がある事で苦痛になる人が少なかった。むしろ、ゴミ山があって、嫌な思いをする人は誰なのかと疑問に思った。でもやっぱり、将来ゴミ山がある事によってカンボジアは苦労すると思うので今すぐに解決するべきだと思う。

ベトナム、カンボジアには過去も今も解決しなければならない問題が沢山ある。その問題を、私たち一人一人が考え行動をすることによって何か少しでも変わるといいと思う。まずは、たくさんの人に現状を知ってもらうことから始めたいと思う。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【カンボジアの思い】

神戸女子大学　健康福祉学部　3 年生

カンボジア・ベトナムでの 12 日間の研修を終えて、全国の色々な大学・学部の学生が集まり、一つの事柄に対しても様々な視点からの意見を聞くことができ、私の視点が変わった。

まず、カンボジアと聞いて、どんな国を想像しますか？私も渡航前は、〝貧しい〟というイメージしかなかった。カンボジアについて、目についたのは、高層ビル。発展途上国とはいえ、想像をはるかに超えた世界が広がっていた。もちろん、よく目にするような舗装されていない道路もあったが、テレビで見るような世界だけではなかった。そこで感じたのは、メディアという存在は「ドラマチック」に放送するということである。可哀そう・貧しいという悲観的な姿だけを取り上げて、放送している。その結果として、日本人は皆、そのイメージしかなく、現在のカンボジアの姿を知らない。メディアが悲観的な姿しか放送しない理由として、ドネーションをもらい続けるためというのも一つの理由である。国自体が貧しいため他国からの援助がなければ成り立たない部分もあるのが事実である。そのための方法として貧しい場面を取り上げて放送している。私は、自分自身がその状態にあったため、身をもって体験した。

キリングフィールド・トゥールスレン収容所では、生々しい虐殺・拷問の痕跡を見た。トゥールスレン収容所では、ひどい拷問が行われており、拷問に使用された道具や血の跡、亡くなった人たちの顔写真が多く展示されていた。そこでは、何の罪もない人たちが殺されていった。キリングフィールドに運ばれて殺されるのにもかかわらず、なぜ、拷問が必要だったのかと疑問に思った。拷問の対象は主に 20 歳で嘘をつくからということであったが、拷問をして、もし本当のことを話したとしても殺されていた。この人たちの思いを引き継ぐのはこの場所に行った私たちではないのかと、行ったことだけで終わらせてはならない。

また、一番衝撃を受けたのは、キリングフィールドにあった大きな木である。一見何の変哲もない木であるが、たくさんのミサンガがかかっていた。この木は赤ちゃんを殺すために使用した木であり、両足を持って頭を打ち付けて殺していた木である。当時は脳みそや血がたくさんついていたそうであるが、私が見学に行ったときはその跡は見てとることが出来なかった。このような殺し方をするにあたって、兵士も決して喜んでしていたのでなく、しなければならない状況に追い込まれ、自分の命もかかっていたため仕方なくしていたのではないかと感じた。ポルポトの教育では、自分の意見を言うということさえも教育されていなかったため、そのような思考がなかったのではないのか。

カンボジアに行ったことで、日本では経験できない貴重な勉強ができたとともに、カンボジアに対する、自身の視点の持ち方が変わった。カンボジアの人達は、本当に優しくて

目が合っただけでもニコッとしてくれる心の優しい人たちで、カンボジアでの歴史に目を背けず、向き合っている姿を見て、貧しいだけではない、可能性のある国であると感じた。これから私は、日本で発信していく立場にあり、自分の中だけでなく、伝達していかなければならない役目を果たさなければならない。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【本当の支援とは】

北九州市立大学　文学部　3 年生

「本当の支援とは何か」―思えば、この問いは常に頭にあったように思う。初め、このツアーには、大学の講義で学んだ東南アジアの姿を自分の目で確かめたいという気持ちから参加した。しかし、両国の実際の姿や抱える問題を目の当たりにするたび、そしてディスカッションを通して様々な意見に触れるたびに、本当の支援とは何かという問いは私の中で大きく膨らんでいった。ところで、私はこのツアーに参加する前まで、支援とは主に資金や物資を与えることだと思っていた。小学校の時に「カンボジアの子どもたちに文房具を送ろう」という企画に参加した経験、メディアによって流されるカンボジアの貧困などの「悲劇的」な情報などを思えば、それは当たり前のことのように思われた。しかし、プノンペンの都市化された街並み、CIECF の方々がお話して下さった学校乱立の話と教育のソフトウェアの部分が足りないという話、そして JETRO の方々がお話しして下さった「教育問題は経済発展においても多大な悪影響を与えている」ということ、今あるもので満足しているカンボジアの人々の笑顔―それらを見ると、私の「支援」に対する考えの甘さ、そして「支援する側」の傲慢さとエゴを自覚し、恥を覚えた。その時から、支援におけるパブリックの理解の重要性を感じ始めた。

本当の支援とは何かという問いに対しての完璧な答えは、おそらく出すことが困難なのではないかと思う。しかしその上で、私は「本当の支援とは、支援する側のエゴではなく、『支援される側が本当に求めているものは何か』を考えて、それに即した支援を積極的にすること」であると主張したい。単に資金や物資を送ればいいという私の以前の発想は、相手を知ろうという気持ちに欠け、「支援というものは大抵こういうものだろう」という考えから出たものであった。しかし、現地でお話を聞かせて下さった方々は全て、カンボジアという国を知ろうとし、国のために考えて、考え抜いた先の支援の形を取っているように感じた。そういうものは、本当の支援と呼べるのではないだろうか。

とはいえ、時にはその考えた末に出た「カンボジアが本当に求めている支援」と実際にカンボジアが求めている支援は異なっていることもあるだろう。その対策として要請主義―つまりカンボジアが求めてきた時だけ支援すればそのようなズレは少なくなるだろう。しかし、ゴミ山の問題はどうだろうか。ゴミ山の問題を解決するためにはごみ処理施設の建設、住民へのゴミ山の存在の周知と危険性の説明、スカベンジャーの問題…これら多くの問題を解決しなくてはならない。そして解決するためには莫大な資金と労力が必要となる。経済発展に全力を注いでいる時に、環境問題の支援要請をどの程度できるのだろうか。更に、ゴミ山の存在が知られていないことは、問題の表面化を遅らせないだろうか。このように大きな危険性を秘めているにも関わらず、表になかなか上がってこない問題に対しては、やはり第三者としての、「相手のことを知り、相手のために考える積極的な支援者」

の目が必要なのではないかと考える。

このように、このツアーからは様々な気づきを得ることができ、とても楽しく、学びの多い 12 日間であった。最後に、このようなこのツアーを企画・運営に携わって下さった関係者の皆様、現地の皆様、この度は貴重な経験をさせて頂き本当に有難うございました。皆様の思いを託された一人という自覚を持ちながら、今後も学び、考え、そして積極的に行動していきたいと思います。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【知った者の責任】

同志社大学　政策学部　2 年生

このツアーで私は数多くのことを学んだ。どれも普通に学校の授業を受けているだけではわからないことばかりだ。それを知った私は何か行動を起こす必要がある。こんな日本の一大学生でしかない私にできることというと自分が見たもの聞いたものを共有することだと思う。研修先の人たちが伝えたかったことをツアーに参加した自分自身が責任をもって持ち帰り発信していかなくてはならない。新たに知っただけでなく、事実としてだけでなく改めて感情を動かされたようなことも含め以下では述べる。

ベトナムに関しては、ドクさんの言葉が印象に残っている。「ベトナムは世界で唯一アメリカに戦争で勝った国だからこれからもまだまだ経済発展していくことができる。」と彼は自信をもって私たちに言ってくださった。漠然とアメリカは強いという私の中でのイメージが頭の中で覆されたような気がした。クチトンネルでも独自の戦法や米軍が残した爆弾を自分たち仕様に作り替えて使っていたなどと自分たちの技術を誇りとしているのがうかがえた。

カンボジアに関してはまずポル・ポト関連のことで、世界史の教科書からだけでは決して知ることのできない現実がそこにはあった。虐殺された人々の多さ、家族は根まで皆殺し、知識人がいなくなったことで発展が遅れたこと、少年兵であったアキラーさんのポル・ポトは良い人というリアルな気持ち。一番衝撃的だったのは、未だに政府や軍隊、警察、それこそ普通の農村にも元ポル・ポト派の関係者がいることでそのような内容の会話はタブーとされる暗黙の了解があることだ。あのような悲劇を二度と繰り返さないためにも風化させてはならないはずが、まず目的が分かっていない子供兵がいたり、秘密を握るポル・ポト直近の人たちが口を開かないまま死んでいくということがネックになっている。観光省のカンボジア紹介ビデオにも収容所やキリングフィールドは取り上げられておらずガイドブックでも大きくは紹介されない。

もう一つはカンボジア人が立ち上げた NGO がたくさんあったことだ。これも私の漠然としたイメージで支援国の NGO が被支援国に支援するという構図ばかりを考えていた。しかし今回伺った研修先の多くで、カンボジア人が自ら問題意識をもって NGO を立ち上げたというケースが多かった。ところがそれは政府を信用していないということの裏返しにも捉えられる。国防や内務(警察)に予算がメインで使われていたり、ごみ処理業者のガヤの賄賂の話などこの国はガバナンス自体に重大な問題がある。観光産業中心の国であることからも何か他人頼みであることが感じられる。そんな国の中で生まれた貴重な問題意識やそれを解決していこうという意思を大切にしていってほしいと思った。

このほかにも多くのことを見聞きし話し合ったこの１２日間はとても濃いものだった。様々な問題を抱えるこの国の人々の笑顔には何か強さのようなものを感じる。観光省の方

が言っていたカンボジアの観光資源がそこに暮らす人々であるというのもまさにその通りだ。この国が持つ魅力を私は責任をもってこれから世界中に伝えていこうと思う。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【私は、どう生きていくのだろうか】

南山大学　人文学部　3 年生

このツアーを通じて私は、自分の生き方や考え方の軸について考えた。そしてそれを考えさせられたのは、このツアーで接する人々が、皆それぞれの軸や価値観を持っていることを感じたからである。メンバーの、実習先での質問やディスカッションでの発言にも、向こうでお話を頂いた方々の言葉にも、その人なりの興味関心や理想が感じられた。そして自分には、そういったものが無いように感じた。

実習先での質問や発言は、さまざまな角度や熱量を持ってなされていると感じた。集まったメンバーは学部も学年もバラバラであり、多くはそこに関連する見方で発言していたと感じる。ツアー以前に支援を経験している人もいれば、大学で学ぶ中で一つの分野に問題意識を持って参加している人がいたりして、そうしたバックグラウンドに基づいてなされる発言を聞けることはとても楽しく、ツアーに参加してよかったと思えた。しかし一方で、そうした関心への確固たる軸のない自分との隔たりを感じることもあった。

実習先でお話をいただいた方々はツアーメンバー以上にしっかりした信念や価値観を持っているように感じた。日本人の方にお話を聞く機会が多かったが、カンボジアに人生を捧げようとしている人たちは、当然のように自分なりの哲学を持っているように感じた。生まれ育ったのとは違う世界に身を投げ入れて生きていこうとする原点には、何かしらの問題意識か理想像があるのだと感じた

そうして多くの人たちに価値観の原点や考えの軸を感じる中で、自分の中にはそうしたものがないのだと再確認した。少なくとも今の自分は何かを生み出すに足る原動力を持ち合わせていないと思う。しかしこのツアーを通じて、自分の強みも発見できたと思う。それは、「こうでなければいけない」「人々のためにこうであるべきだ」という意識が薄いことによって、ロジカルな考え方ができることである。そしてこれは、原動力を持つ人々が世界を良くしようとする際に、批判的な視点で彼らの動きを最適化するなど、補助的な役立て方ができると思う。

私は正直に述べれば、国際協力にほぼ興味のない状態でツアーに参加した。そしてツアーを終えた今、興味は増したが焦りなどはいまだに無い。「僕たちは世界を変えることができない」というが、むしろ「僕たちは世界を変え続けている」という方がしっくりくる。ただしその「僕ら」とは世界中のすべての人々であり、一つの正義に基づいて変えることは不可能なのである。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【私が考える支援】

高知大学　人文社会科学部　1 年生

私は急速に発展し続けているアジアの現状を自分の目で見たいと思いとポルポト政権後のカンボジアでの教育・医療などがどのように発展しているのかを知りたい思いがあり、今回この２カ国スタディツアーに参加した。訪問した施設の人や現地の人の話を聞く中で、自分が考えていた支援はお金・モノ・施設を与えるだけで目先のことしか考えていなかった。今回のツアーに参加して自分が考える支援について２つ挙げられる。

まず１つ目は DAMOCA 高齢者施設(ホーチミン)での医療・福祉分野に関わる支援である。現在、アジアは急速に発展し続けている、一方、高齢化がアジア各国で進んでいる。ベトナムでは高齢化の進展に伴い、社会保護施設や DAMOCA 高齢者施設のような民間の有料老人ホームがある。施設を訪れて感じたことは、日本の老人ホームのような設備は十分に整っておらず、また、介護をする人の中に若い世代の人がいなかったことを感じた。ベトナムでは介護に関する専門的な技術・知識を持った人材がほとんどいないため、民間の施設の中には、お年寄りを助けるという覚悟を持ってボランティアで働いている人がいることが分かった。そこで私が考える支援は、日本の介護に関する専門的な技術や知識を生かし、ベトナムにおける介護人材の育成を日本のNPOやNGO団体と連携して支援することである。その中で、これまでの日本の介護に関する知識や技術をそのまま与えるのではなく、ベトナムの文化や社会状況を考慮した上で、長期的に協力し合うことが必要であると思う。

２つ目に教育に関わる支援である。1975 年から 1979 年にかけてポル・ポト率いるクメール・ルージュがカンボジアを支配し、百万人以上の犠牲者を出した。主に教職員や医師などの知識人、また、その家族までもが犠牲となった歴史がある。ポルポト政権下では、学校教育が廃止されたため学校の校舎は破壊され、軍の基地や刑務所などとして使用された。内戦終結後、校舎が建設されるが、その数は足りず、日本の NPO や NGO 団体などの支援により校舎が建てられた。しかし、学校建設を行ったというだけで、その後の学校運営や教員の確保など情報提供が行われていなかったことが問題であった。都市部と比べて農村部では、学校運営・教員不足・教育の質など格差が生じている。生じたすべての問題を同時に支援し、解決することは難しいが、１つずつ段階的に行っていく必要があると思う。

支援する側は、支援を求めている相手に対して何が必要であるのかと考え、お金・モノ・施設を与えて終わるのではなく(自己満足)、その先、支援を受けた相手が自立するチカラを持ってもらうことが、私が考える支援だと思った。

今回、２カ国のツアーで色々な場所を訪問することができ、そこで学んだことを同じ世代の人達とディスカッショを通し、それぞれが持っている考えを聞くことができて、そのすべてが私にとって刺激となった。刺激となったことを自分の中に閉じ込めるのではなく、発信していこう。また、ベトナムやカンボジアだけでなく他の国々の世界を、もっと見て、

考えていこうと思う。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【決意文】

都留文科大学　文学部　1 年生

私はこの研修での学びを通して、カンボジア教育の歴史と現在起こっている課題が印象深かった。ポルポトの大虐殺によって、知識層が一掃されてしまったカンボジアにとって、教育現場の発展は困難を極めるものだった。まず、政府は教員不足を解消するために高校卒業者に教員資格を与えているというのは、衝撃的だった。「質より量をとるこのやり方は、当時の状況を考えると英断であった」と JICA のある職員の方は答えていた。しかし、現在に至るまでその政策に何の改善も加えていないため教育費なども蔑ろにされている。教師の給料は低く、都市部で副業をしながらの勤務を希望する教師も多いそうだ。これが理由で、農村の教師不足は著しい。政府が 3 年間は農村で働くように整備したが、教師が農村での任期を短くしてもらうために官僚への贈賄という問題が起こっているのが現状だ。また、一人に対して約 300 円程度の補助金しかないため、ただでさえ生徒数が少ない農村にある学校は維持費が足りていない。事実、日本人の支援によって建てられた小学校の多くが、管理が難しいという理由で廃校していると聞いた。そのほか、医師の育成や障がいに対する偏見、個々人の健康管理まで根底にあるのは教育なのだとその影響力を実感した。同時に、教育のもつ力の使うべき方向を誤れば、ポルポト時代の少年兵のように洗脳してしまうことも可能なのだと恐ろしくも感じた。

また、実際に現地で現地に住む人たちから話を聞くことで、自分が途上国に対して、いかに潜在的なイメージに囚われていたかを痛感した。この潜在的なイメージは、今まで生きてきたなかで受けた様々なメディアによって無意識に形作られたものかもしれない。例を挙げるなら、テレビや SNS の広告では恨めしそうにこちらを見据えている写真で溢れている。その他にも、私が以前参加したことのある勉強会では、ゴミ山ではトラクターの下敷きになって死んでしまう子どもがいるという伝え方だった。しかし、実際には子どもたちのゴミ山でのごみ拾いは禁止されていて、トラクターが入る際にはゴミ山にいる全員の立ち退きが命じられるという。こういった食い違いが起こってしまうのは、語り部が情報の更新をしていないせいでもあるが、自分の知識不足も一つの要因であると反省している。きちんと自分の手で情報を集めることの重要性を認識した。実際、私は今まで、途上国への支援といえば、フェアトレードや小学校建設といった安直な考えしか持っていなかった。きちんとした情報収集を行わない上に、奉仕者として上から目線で物事を考えてしまっていたのだと気づかされた。これからは「本当の支援とは何か」というディスカッションをしたときのように、何事においても批判的思考を用いたり、言葉の本質を熟考し定義づけたりするように心がけていきたい。そして、今私が考えうる、自分にできる最大の支援は“この研修での学びをできる限り多くの人に伝えること”だ。今までの私ならそんなことをしたところで途上国に何の利益にもないとみなしていただろう行動だ。確かに、

私には世界を変えることはできない。しかし、私でも世界を変えるきっかけになれることを知れたのはこの研修最大の意義である。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【知識を持ち、疑い、考え続ける】

同志社大学　経済学部　１年生

私がこのスタディツアーに参加したのは、途上国であるカンボジアに対する支援の方法に興味があったからだ。しかし、１２日間の研修でカンボジアを勝手に支援先としてのみの視点でみていた自分に気づかされた。しかし、同時に発展していく都市部と地方の格差についても実感している。

ツアーの前半、私たちは支援を受けつつも発展するカンボジアを目にした。今まで知らなかったカンボジアの魅力を打ち出している観光省。ポルポト時代に破壊された教育の基礎を築く CIESF。インフラ整備や地雷処理を支える JICA。医療の改善を図る Sunrise Japan Hospital。カンボジアは４０年前の虐殺で失われた土台を作り直しながら、プノンペンの街は電飾が光り、大きなビルの建つ都市になっていた。その中でも問題が残る。ゴミ山ではゴミから発生するガスや悪臭といった劣悪な環境のなかで生計を立てるスカベンジャーがいる。農村では最近になってやっと電気が通り、生水には鉄分が多く含まれたまま。投資の対象となった都市と、教育もまだ十分ではない地方の格差は非常に大きい。しかし、地方の人々が不幸かというとそうではない。

私はカンボジアの様々な形の生活を目にしたが、それぞれの生活者にはそれぞれの幸せがあると知った。そして、先進国の支援の中には押し付けの支援になっているものがあることも思い知らされた。それはカンボジアの人々が考える幸せや豊かさを無視して、先進国の豊かさを基準にして支援しようとしているからだ。ツアー前には考えもしなかったこの視点に気づくことができたのは大きな収穫だった。

私にとって収穫になったのはそれだけではない。ディスカッションで参加者と意見を共有できたことは非常に良い経験になった。私は１年生として参加したが、他の参加者は２年生以上が多く、持っている知識も経験も圧倒的に多かった。そのような専門も将来の道も異なる先輩方の意見を聞き、自分の考えも述べながら全員で問いの答えをまとめていくことは難しくもあったが、視野を広げ知識を深められる貴重な時間になった。ディスカッションでは、ポルポトの歴史をトゥールスレン収容所やキリングフィールドのような施設として、または教育の上で残していくべきかや、自国支援と他国支援のどちらが重要か、ゴミ山は誰のためにあるのかなど、毎日様々なテーマについて話し合った。しかし、どのテーマもはっきりと答えを出せるものではなかった。１つではない答えを模索する中で、カンボジアの人々と日本の私たちの考える幸せや豊かさとは。戦争はなくならないのか。様々な問いにぶつかりながら各班、各個人がそれぞれの考えに行き着いた。私も知識不足を補ってもらいながら自分なりに考え抜いて自信を持てた。

このツアーに参加し、大学も専門も学年も異なる人たちと共に学び話すことで得たのは、

知識を持ち、常に疑いの目で見て、考え続けることだった。1 年生として遅れを感じることもあったが、ツアーでの学びはこれからの長い大学生活で役立つだろう。この先も多くの知識を得ながら、常に疑い、考え続ける人でありたい。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【研修から得たもの】

宇都宮大学　国際学部　1 年生

私は、数年前から漠然と思っていたカンボジアに行きたいという思いを叶えるために、このツアーへの参加を決めた。厳密に言えば、カンボジアに行きたいというよりも、発展途上国の現状を自分の目で見たいという方が適切だろう。なぜなら、「途上国＝貧しい」という構図に疑念を持っていた私は、それが本当なのか自分の目で確かめて、自分の頭で考えたいと思っていたからだ。また、紙の上に描かれた歴史に興味を向けられなかったので、自分の心と身体で、直接歴史を感じることができれば、歴史について興味を持ち、自分の知識になるかもしれないと思ったからである。

実際に研修が始まり、様々な研修先を回って、当時の状況を聞いたり、他の参加者の考えに触れたりすることで、歴史を身近に感じることができたし、自分の考えを広げることができたと思う。今まで、学校の授業で学んできた紙の上の歴史ではなく、目の前にある歴史に圧倒され、時には余りの悲惨さに心が痛んだが、歴史を肌で感じるという、研修前に立てた目標は達成できたように思う。また、多様な人たちと交流することは、私が自分の人生の中で常に考えていることである。私は、人間は自分の経験からでしか語ることができないと思っている。「経験」は、自分が実際に行って得た直接的経験と、他者が行ってきた経験を聞くことで得られる間接的経験の 2 つがあると考える。時間的にも経済的にも直接的経験には限界があるため、間接的経験がとても重要であると考える。そのため、今回の研修では、研修先の事業内容はもちろん、その事業を立ち上げた人たちの考え方や生き方に触れられたのが、一番自分のためになったと感じた。班ごとでのディスカッションは、大学での授業でもやっておらず、とても新鮮だったし、１つの題材であっても人によって視点が異なり、異なる考えを持った人たちが議論することで、また新たな考えが生まれたりする空間が、とても刺激になったし、良かったと思う。

実際にベトナムとカンボジアに行ってみて思ったのは、自分が想像していたところとはだいぶ違っていたことだった。もっと衛生的ではないと思っていたし、暮らしている人たちの雰囲気であったり、街の景色がとても穏やかなことに驚いた。カンボジアに行く前に思っていた「途上国＝貧しい」という構図への疑念は、見事に覆された。観光業に頼っていることや環境面については、まだまだ課題は山積しているが、カンボジアの一番の重要な資源である人々は幸せそうで、その姿からは心の豊かさを感じた。やはり、「貧しい」ということばは、先進国のエゴによって生み出されたものであると感じる。「貧しい」が持つ意味を、そのことばが受け手に与える影響を、私たちは改めて考えていかなければならない。

今回の研修での時間は、自分の長い人生の中のほんの一瞬にすぎないかもしれない。しかし、その時間の中で学んだことは、少なからず自分の考えに深みを持たせ、自分の視野

の広がりに貢献かもしれない。ここでの学びを次の学びにつなげ、さらに考え続けることで、自分の人生を、自分の考え方を豊かにしていきたい。そして、誰かに影響を与えられるような人間になりたい。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【自分たちに必要なこと】

室蘭工業大学　工学部　2 年生

このツアーに参加したきっかけは、東南アジア、特にベトナムに興味があったからだ。今回のツアーで得た経験や知識は計り知れないほど多く、大学では経験できないディスカッションによる物事の多面的な見方、先入観で物事を捉えないことを学んだと考える。

実際、幼い頃にベトナムに住んでいたこともあり、ベトナムにはあまりマイナスなイメージはなかったが、カンボジアに関しては、貧困、ポルポト政権というネガティブなイメージを持っていた。しかし、現地に行くと、日本との違いはあるものの、各研修先に行ったとき、いかに先入観で物事を見ていたかを思い知り、反省したと同時にカンボジアの魅力を十分に感じた。そして、これらの実際に肌で感じたことを踏まえ、本当の支援とは何か、ツアーに参加した自分たちの責務を考えなければならない。自分たちの責務に関しては、このように学んだことをアウトプットしていくことと考える。

本当の支援に関しては、ディスカッションのテーマにもなっており、日本からの支援がカンボジアの求めている支援に合致していない、つまりニーズに合っていないという意見が出た。カンボジアでは、プリウスや HONDA 社のバイクをとても多く見かけた。しかし、日本では各会社でより良いものを作るため、研究をしているが、カンボジアは、ポルポト政権の影響で知識人が殺され、教育の質が低下し、研究や教育機関が発達していない。日本のものをそのまま伝えるのではなく、日本のノウハウをどう伝えるかがカンボジアだけでなく、全世界に共通した課題であると感じた。研修先を回っていくうちに日本は支援をしているが、それは自己満足的な支援であり、本当の支援ではないのではないかと思うようになった。カンボジアの課題は教育の質にもあると考える。教育が充実していれば、健康でいることができ、ゴミ山問題の解決も技術革新も可能である。今のカンボジアは、医療、教育、産業分野に関して、歴史を軸としているため、質より量をとる傾向があり、量より質にかえることも本当の支援と考える。日本も都市部と農村部の間で格差がみられるので、カンボジアのみならず世界中と「支援」ではなく「協力」していくことが必要であると考える。

今回のツアーはとても濃密で、様々なことを考えさせられた。工学系の自分は、ほぼ毎日のディスカッションにより、文系学部の意見を聞くことができ、とても勉強になったと同時に自分の世界が広がったと考える。また、実際に渡航し、このツアーでしか訪れられないところにも行かせてもらえたことにより、学ぶことができ、価値観の違い、日本での当たり前が当たり前でないことに気づくことができ良かったと考える。企業を訪れた際に日本人の起業家が「本質的な失敗は行動しないこと」とおっしゃっていてとても心に残った。この言葉を原動力として、自分なりにこのツアーで経験したことを活かし、間接的でもいいので、本当の支援をしていきたい。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【今後カンボジアに求められるものとは】

九州大学　農学部　2 年生

今、カンボジアやベトナムなど東南アジア諸国は著しく経済成長をしてきているが、それに伴って今の利益を考える政策や事業でなく、今後出てくるであろう課題を見通した事業をしていくべきではないだろうか。今のカンボジアとベトナムの経済状況や社会体制は整っておらず、確かに先進国を手本に目先の経済成長やインフラ整備、産業の活性化を優先して行うべきであろう。そうすることで先進国が抱えるのと同じ問題を抱えるのはしょうがないかもしれない。しかし、今まだ成長途中だからこそ今の先進国が陥っている問題と同じ問題にぶつからないような今後持続的な発展ができるような新たな仕組みを取り入れていくことが可能なのではないのだろうか。

例えば今のカンボジアではごみの処理ができておらずごみ処理をできないという問題が生じている。これには日本のごみ焼却施設を建てることが国にとっては割とすぐにごみ問題を解決する手法かもしれない。しかしここで日本のようにごみの焼却施設を取り入れてしまったら、将来分別にかかるコスト面などからリサイクルなどより燃やすことが優先的になっていき、結局は埋め立て地不足などの日本と同じ問題にぶつかってしまうだろう。この場合、デポジット制を取り入れることで持続可能な土地利用できるようになるし、単に焼却施設を建てるのでなく建設に最初莫大なコストはかかるが焼却熱をエネルギー交換できる施設を建てるなど将来価値を考えると今後の課題は減っていくのではないだろうか。

さらに、インフラ整備やリゾート地の建設などは人々の生活を支えることになり観光業の発展などたくさんの利益をもたらし、カンボジア経済の発展に貢献していっている。しかし観光に関しても持続的に将来を見越した取り組みをしていかなければそこでしか体験できない自然や、そこでしか味わえない人々の生活などの文化がなくなってしまう。そうすることでほかの観光地との差がないことにより観光としての土地の価値が下がってしまうことにもなりかねない。特にまだ整備が整っている途中であるカンボジアだからこそほかの観光地との差がつけられるのではないかと思う。

外資系の企業がたくさん進出してきて景観の変化や観光の内容に変化が訪れてきている今こそどうするのが将来価値を高めて今の利益とうまく折り合いをつけられるかが重要になっていくと思う。つまり、今後カンボジアに求められるものとは先を見越した持続的な開発と今だけの利益にしかならないものをうまく区別して先を見越した取り組みをしていくことだと思う。そしそうすることで今の先進国にはない新しい持続可能な発展の仕組みが期待できるのではないか。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【ツアーで得た学び】

北九州市立大学　文学部　2 年生

私は比較文化学科の学生として授業で世界の文化について学ぶことが多い。授業で特に興味を持った分野が東南アジアの文化だった。このツアーではベトナム・カンボジアの様々な分野における文化に触れられるのではないかと思い、参加した。

帰ってきた今、ツアーに対する率直な感想は「行ってよかった」である。ここまで真剣にあるテーマについて人と議論したり、カンボジアやベトナムの人たちが今よりは良い生活を送るために私にできることは何なのか考えたり、本当の支援とは何か考えたり、ただの大好きな友達ではなく、考えを聞きたいと思える、尊敬できる友達の大切さを学べたのは、私にとって今回が初めてであった。本当にたくさんの貴重でかけがえのないものを得れた 12 日間だった。

私が最も心に残った研修先は、CCH 孤児院である。元々子供が好きなため子供たちとの交流は楽しみにしていたが、思っていた以上にいい子たちで大切な思い出になった。一方で、楽しいだけではなく、違和感を感じる部分もあった。私は、子供は無邪気でわがままな存在だと思っていた。日本で交流する子供はそういう子が多いからだ。しかし、CCH 孤児院の子供たちは皆いい子すぎた。私が子供を団扇であおごうとすると制されて逆に団扇を奪ってあおごうとしてくれるし、ご飯を食べ終わると私の分の食器も洗ってくれた。最もインパクトが強かったのは、友達がある子供に働くの好き？と聞いたら、その子が笑顔で「うん」と答えたことだ。この子と同年代の日本の子供には、そもそも働くという概念はないだろう。かつてはストリートチルドレンだったりしたという背景が絡んでいるのかと考えると、やるせない気持ちでいっぱいになった。しかも、現在カンボジアには孤児院が増えているという。同じような子供たちがたくさんいると思うと、この子たちのために何かをしたいという思いがとても強くなった。20 年間特に夢を抱いたことがなかった私にとって、抽象的ではあるが初めでできた将来の夢だ。カンボジアの子供たちは今の生活で十分に幸せだと思っているかもしれない。しかし、日本人の私は、やっぱりどうしてもカンボジアの子供たちの生活にはもっと改善すべき点がたくさんあると思ってしまう。もし、カンボジアの子供たちに今の生活が苦しいと思っている子がいるのなら、私はその子の生活を助けたい。最終ディスカッションで話し合ったことを忘れず、子供にとって必要なものを与えたり教えたりできる支援をしたい。この想いを抱くことができたということが、今回ツアーに参加して私が得た最も重要な学びであったと思う。

ツアー中に一番思ったことは、「日本での私の生活がいかに恵まれているのか」ということだ。今後も日本で生きていくにあたって、ベトナム・カンボジアで学んだこと、考えたことを決して忘れないようにしたい。そして、今回の学びを、ツアーに参加していない人にも広めていきたい。それが、今の私にとっての責務ではないかと思う。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【今回のツアーを通しての気づき】

山口県立大学　看護栄養学部　2 年生

今回の参加は、ただ東南アジアに行ってみたいという軽い気持ちで決めてしまっていた。ベトナムとカンボジアに行くと家族や友達に伝えると、「大丈夫なん？そんな場所に行って。」「なんでそんなところに行くん？」と、発展途上国は危険で不潔であるという固定概念からたくさんの人に心配された。正直自分も、参加前は発展途上国という言葉で頭がいっぱいだった。しかし、そこには自分の知らない世界が広がっていた。

ゴミ山では信じられないほどの景色で、衝撃的な異臭や子供たちの姿は今でも鮮明に覚えている。農村での暮らしやトンレサップ湖での水上生活など、日本の生活が当たり前だった自分にはその姿に呆然とし言葉が出なかった。一方で、ドンコイ通りや AEON モール、高いビルや電光掲示板など、発展途上国とは思えない煌びやかな姿もあり、ベトナムやカンボジアのイメージからかけ離れていた。そして、バスの中で外の景色を眺めていると、カンボジア人と目が合い、手を振ると振り返してくれたり、ニコッと笑いかけてくれ私を癒してくれた。これらの姿は、実際に行って初めて感じられること、わかることであり、ベトナムやカンボジアが貧しい国であるという認識自体、日本人の価値観の押し付けで間違っていたと考える。また、ツアー中に行われたディスカッションからの学びも多い。今まで支援はよいもので、人のためになるとだけしか考えていなかった。本当の支援とは何か、ただの自己満にならないためにはどうすればいいのか、発展＝幸せではないのではないか、相手側が求めていることと必要なことの違いなど、今まで考えたこともないことのディスカッションから、将来看護師を目指している自分は、援助を行うことに満足してはならないことを学んだ。相手に自分の価値観を押し付けにならないよう、相手を一番に考え援助を行い､援助された側がどのように受け取るのかが重要である気づくことができた。支援が相手の自立を妨げることになるため、JICA での「魚を与えるのではなく、釣り方を教える」という言葉を心に置いておくことが重要だと考える。SunriseJapanHospital では、「医療」の輸出産業化を目指しており、海外だからできる成功モデルを実施し、行き詰った日本の医療状況を打破したいという言葉があり、とても面白いなと感じた。日本の医療技術は最先端であるとばかり思っていた自分は知らないことだらけで勉強不足だと感じた。ただ看護技術を学んでいるだけだはダメだと痛感した。

見るもの 1 つ 1 つが新鮮であり学びが多いツアーとなった。今回の参加で学んだことを、これからの自分にどのように生かすか、また、他の人にどのように伝えていくかが大切だと考える。長いようで短い 12 日間はとても濃い毎日だった。普段の大学生活を過ごしているだけでは出会わなかった参加者のメンバーや、引率、ガイドさん、このツアーを企画してくださった皆さんに感謝している。このツアーで貴重な経験、大切な仲間ができて本当に参加して良かったと思う。ありがとうございました。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【本当の支援の在り方】

同志社大学　経済学部　2 年生

私は今回、このスタディーツアーに参加して「支援」に対する見方が大きく変わった。私は、カンボジアに行く前は、カンボジアに対して支援国という見方しかなかった。教育面でも、カンボジアに学校を建てようといったボランティア先の一つであった。今回このツアーに参加しようと思った理由でも､私は大学のゼミで開発経済を学ぼうと考えていて、発展途上国の現状を自分の目で見てみたいと思ったのが発端であり、カンボジアを発展途上国、つまり日本よりも遅れている国という見方をしていたのだ。しかし、実際にカンボジアに足を踏み入れてから、私の中でその概念は一変した。確かにインフラ整備が完全に整っていなかったり、ごみ山の問題、教育の問題を見てみるとこれから変えていかないといけない面はたくさんあるのだが、それ以上にカンボジアは一国として発展していくためにも、貧しさのレッテルをはがしていくべきだと考えたからだ。そのように考えた理由は二つある。

一つ目は Sui-joh での浅野さんのお話の中で､「貧困への依存」というお話を聞いたことである。カンボジアを良くするために立ち上げた NGO などの団体が、寄付をもらえなくて困っている。どうやって寄付を募るかについて考えている団体があると聞いた。それはカンボジアが貧しい、支援するべきことがあるという前提に成り立っているのあって、カンボジア自体もその貧困に依存しているのではないのかということだ。カンボジアは貧困国だ、支援国だ、そんなレッテルがいつまでも張られ続いていればカンボジアはいつまでたっても貧困国のままで、自立することはできない。だからこそ浅野さんは Sui-joh をカンボジアの貧困を売りにするのではなく、カンボジア発の世界と対等なブランドとして売り出していきたいという思いで経営している。私はその考えに強く共感できたし、そのような企業が増えれば増えるほど、カンボジアのイメージアップにつながるとも考えた。

二つ目は、農村での暮らしを見に行ったときのことである。確かに農村にいけばいくほど、道路が整備されていなかったり、トイレの設備がなっていなかったり、私たちにとっては不便だなと思うことは多々あった｡しかし､農村の人の目線で考えたらどうだろうか。高温多湿の気候から、農業でお米を作ることはできるし、家の周りにはさまざまな果実が年中収穫することができる。家では鶏や豚を飼育していて、食料に困ることはほぼないという。家も高床式で、材質は簡素ではあったが、カンボジアの気候を乗り切るには合っているのかもしれない。プラスチックが入ってくる前まではバナナの葉をお皿代わりにするなど、周囲に捨ててもすべて土に戻るものであったことから、ごみ問題は起きてはいなかった。先進国が良かれと思って支援していることが、逆に現地の人たちの生活を壊している可能性もありうるのだと知った。

私は大きな目で見れば｢支援しないことが本当の支援｣なのかもしれないとも考えたが、

実際にはまだまだしなければならない支援もある。本当の支援とは何か。様々な視点から、
そこに住む人を第一に考えた支援の在り方をこれからも考えていきたい。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【カンボジアからの学び】

同志社大学　法学部　2 年生

私は、今回のカンボジアスタディーツアーに参加して、カンボジアの自国支援と他国支援のバランスの難しさ、歴史を後世に伝えるべきか否か、歴史教育の欠如が起こす弊害はなにか、この三点について、ディスカッションの議論を交えながら考えさせられた。

SUI JO の浅野さんは「カンボジアは貧困をドラマチックに描くことで支援を求めている」「貧困への依存」とおっしゃられた。私は他国支援か自国支援かのディスカッションの時、まさにこのことについて思い悩んだ。カンボジアの現状では、確かに教師不足、教育カリキュラムの不足、医師不足、孤児問題、貧困問題、焼却炉がないなど様々な問題を抱えている。けれど、他国支援がどこまで必要なのかという線引きが、カンボジアの抱える多くの問題によって不透明になっているように思えた。カンボジアの問題は蓋開けたらきりがないように、支援もまたきりがないように思える。だから支援のバランスを欠くと、貧困への依存もなりかねないと思った。ディスカッションの時、他国支援と自国支援のメリットデメリットを挙げることにした。他国支援のメリットとして、まず、経済成長が早くなる。

第二に、大きな事業がしやすくなる。第三に支援国と支援される国の結びつきが強くなる。デメリットとして、第一に有効に支援金が使われているか不透明。第二に支援への依存が懸念される点。ここでカンボジアの問題と照らし合わせてみると、教育のカリキュラムの導入についての支援や Sunrise Hospital の医療制度の支援、焼却炉の問題などは他国支援に頼ってもよいと思っている。ノウハウがない部分や莫大な資金がかかる部分には他国からの支援は必要だ。しかし、健康保険制度の充実や孤児問題、貧困、障害者問題については自国が積極的に活動していくべきであって、支援に頼るのはかえって悪影響を生むのではないかと思われる。例えば、孤児院ビジネスがあるように他国が支援をすることでかえってそれを悪用して自国のビジネスにしようとする者が出てくる問題がある。それにカンボジアの問題は当事者がカンボジア人であり、問題が生まれる背景や問題点、カンボジア人の特徴はその国の人にしかわからない部分が多い。そこを他国によるカンボジアやカンボジア人への理解で介入して簡単に解決できる問題ではないと思うからだ。他国からの支援でその国の自立力が失われる、改善どころか逆に悪用されるケースを考えると、支援がどこまで必要でどこまで介入してよいのか、そのバランスが非常に難しいと思った。自国支援の例として CHA を挙げた。CHA のようなカンボジア国民でカンボジアの国内の問題と向き合おうと活動がもっと必要だと思った。しかし、CHA のようにグッズの売り上げだけで果たしてどこまで賄えるのか、小規模の範囲ではその団体だけ自立できても、大規模の範囲では国の自立にまでつながるかは難しそうなところであった。他国支援と自国支援のバランスとともに、自国支援の限界も感じた。

ディスカッションを通じて感じたことがもう一つある。それは、歴史教育は必要か否かという問題だ。私たちの班は必要だと答えた。私は現在の政治とポルポトの政権の政治の学習を踏まえて、私のカンボジアの印象は「歴史に学んでいない」だ。ロン・ノル政権でアメリカの傀儡政権となり、ポルポト政権では独裁を許し、ヘンサムリン政権政権ではベトナムの傀儡政権となり、現在は独裁政権である。やはり教育の充実と政権は比例しているように思った。中学卒業が多いこの国で、歴史教育を学ぶのは高校生からで人々はポルポトの政権時代のことを話したがらない。この事実が今の独裁政権に大きく影響しているように思われる。人々が歴史から学ぼうとしない限り、歴史は繰り返される。なぜ、どういう背景で、どういう流れで政権が変わっていったのを考えることは今の政治をみるうえで欠かせない教育だと感じさせられた。

また歴史教育の欠如は、傀儡政権時代のことであるが、背後に大国の利害関係が絡んでいるということを見落しがちになるのではないか。例えば、ロン・ノル政権時代の誕生とそれによる内戦である。事の発端は、シハヌーク国王の国際的に中立な立場をとる政治や、ホーチミンルートを見てみぬふりをしていた態度にアメリカが快く思わなかったため、アメリカの CIA にそそのかされて右派親米政権のロン・ノルがクーデターを起こした。アメリカが介入したことについて決定的な確証はないが、歴史を振り返ると、ベトナム戦争をしていたアメリカにとってカンボジアのクーデターはアメリカ軍に有利に働いていると思われる。もともと平和だったカンボジアにとって、このクーデターは意味があったのだろうか。私は単にアメリカに利用されたにすぎず、このことがきっかけとなってカンボジア国内にカンプチア民族統一戦線とロン・ノル政権で内戦が起こり、共産主義に傾くきっかけを引き起こしたように思う。ロン・ノル政権誕生は、その時の情勢だけに流されて、その背景にある他国との利害関係を見抜けずに、国民が望んでいない方向に導いてしまったのではないだろうか。この場面において歴史教育の関連性はというと、現在の他国支援による中国の介入は非常に影響力を持っているが、その中で、また傀儡政権に似たような支援国の利害関係が見抜けずに不本意な方向に政策が進んでしまわないかないかが私の中での懸念ポイントになった。歴史を知らなければ国民が望まない方向へ、他国から簡単に利用されるのではないだろうか。

今回のスタディーツアーでベトナム、カンボジアの学びを深められたとともに、ディスカッションを通じて物事を多面的に捉える重要性を学んだ。なにかしらの答えはあるとおもっていたけれど、物事はそんな単純ではなく多方面から物事を考えて、バランス感覚を大事することが大切だということに気づいた。そして何より現地の空気に肌で触れ、自分が想像していたベトナム･カンボジアのイメージと実際の姿にギャップを感じたとともに、自分の想像は偏見でしかなかったという愚かさに気づかされた。

【私たちにもできること】

北九州市立大学　外国語学部　2 年生

私は今回このツアーに参加して、ベトナムの歴史やカンボジアの現状について深く学ぶことができた。そのなかで信じがたい出来事や考えさせられる問題が多く出てきて、今までの自分の考えがいかに甘かったかを思い知らされた。

ベトナムでは、戦争証跡博物館でベトナム戦争についての資料や写真を見学した。学校で学んだときは、正直歴史のなかのいち出来事として覚えていたが、実際に自分の目で写真などを見ることで大きな衝撃を受けた。罪のない子どもたちや女性の無残な姿、枯葉剤による影響、見ていて辛くなるものばかりだった。しかしベトナムはこういった歴史を理解し二度と繰り返さないように、前を向いているように感じた。

カンボジアでは､様々な場所を訪れ､カンボジアが現在抱えている問題や現状を学んだ。トゥールスレン収容所やキリングフィールドで、ポルポトが行った大虐殺の詳細を知り、言葉がでなかった。これによって行われたことが現在も深刻な問題として残っていることに、それほど昔の出来事ではないということを実感し、忘れてはならないと強く思った。特に、教育面に大きな影響を及ぼしていると感じた。ポルポトに対する反乱を恐れて知識人を徹底的に殺害したことで、教師不足の問題が起こっている。幼稚園や小学校が足りておらず、教育を受けられない子供たちが多くいる。また、親も教育の大切さを理解していなかったり、理解していても家計のため学校に行かせられなかったり進級できなかったりする。いまでも識字率はさほど高くないという。そういった子供たちや親を救うために活動している CYK に研修に行き、お話を聞くことができた。夢は子供たちみんなに教育を受けさせること、子供たちに夢をのせている、といったお話は大変印象深いものだった。私も、多くの子供たちが必要な教育機会を得られたり、母親も現金収入を得たりと、カンボジアの生活が向上することを心から応援したいと思った。

私がカンボジアに行く前に抱いていたイメージは、実際に行くことで大きく変わった。都市部はすごく発展していて賑やかで、人々は笑顔があふれていた。携帯の普及率も非常に高く、お店の多さにも驚いた。だが一方で、都市部と農村の経済格差や、ガタガタの道路の整備、ごみ山の存在や、先にも述べた教育問題など、解決すべき問題はやまほどあると感じた。カンボジアの人々がいま本当に求めているのは何なのか。「支援」とは何なのか。今回のツアーで何度も考え、仲間とも話し合った。支援をする先のゴールは、支援をやめること。先進国からの支援がなくても大丈夫なカンボジアにすること。そのために、私たちにできることもあると学んだ。それはカンボジアのリアルを伝えることだ。イメージに捉われ、リアルなカンボジアを知らない人も多いだろう。そんな人たちに、私が今回見て聞いて感じたことを発信していきたい。そしてこれからも、引き続き関心を持ち、考えて

いこうと思う。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【様々な視点で物事を見ることの大切さ】

九州産業大学　理工学部　2 年生

私は、今回の 2019 年夏期インターンシップ（2 ヵ国）ツアーに参加し、ベトナム・カンボジアの 2 ヵ国を様々な視点で見ることができた。12 日間という短い期間では、到底“クニ”というモノのすべてを知ることはできない。だが、18 ヵ所の研修先に赴き、教育・文化・医療・社会・農業・経済・平和学習分野の 7 つの分野を学んだ。そのうえで、“様々な視点で物事を見ることが大切だ“と考えた。その理由が二つある。

一つ目の理由は、ベトナムやカンボジアには数多くの分野でそのそれぞれに問題があるからだ。Sunrise Japan Hospital や CHA で医療や障害者施設などの問題も大事だと思ったが、私のなかで一番深刻だと思ったのは”ゴミ山問題”だ。実際に現地に行ってみて、バスを降りてから襲ってくる強烈な匂いや足の踏み場を探すのがやっとのくらいなゴミの量。しかし、その大量のゴミを処理するための施設が整っておらず、埋め立てられている状態だ。もし、現在日本に突如ゴミ山が現れたら日本政府はゴミ山の問題を即座に解決しようとするだろうし、解決できないことはないだろう。しかしカンボジアでは、ゴミ処理の施設をつくろうにも費用や時間などの問題が生じる。また、そのままにしておくのも環境汚染や土地の減少などの問題が生じる。その一方で、そのゴミ山から生活資金を得ている人たちもいて、ゴミ山がなくなれば困る人たちもいる。何かを解決するには何かを犠牲してしまったり、一方を解決すればもう一方の被害が増大してしまったり、問題がまた新しい問題を生み出してしまう。だから、問題を多面的かつ統合的に見ていかなければならない。

二つ目の理由は、ベトナムやカンボジアのような発展途上国に対する日本のような先進国の支援のカタチを考えたからだ。私は今まで、資金や物資を調達することが支援だと思っていた。しかし、たくさんの研修先を訪れたことや皆でディスカッションをして、その支援する国に対して一番大切なことは何なのかを考えさせられた。その国の”いま”を考えることも大切だがその国の”さき”をも考えていかなければならない。私は長い討論のうえ、支援というものを“クニ”という単位で考えた時に、その国が自立できるように支え、手助けすることが一番の支援ではないかと考えた。

私は、ツアーの 7 つの分野をそれぞれ個々のものだと考えていたが、今回のツアーでたくさんの研修先に実際に訪れてみて、7 つの分野それぞれがクニというものを介して関わり合っていると思った。このような考え方は、私たちの身近なことにもいえるのかもしれない。私はこれから、様々な視点で物事を見ていけるように努めたい。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【ベトナム・カンボジアのこれから】

城西大学　現代政策学部　1 年生

私は、今回の研修で初めてベトナムとカンボジアを訪れました。様々な観点やテーマから研修先を訪問し、ガイドの方や研修先の担当者の方をはじめたくさんの人からのお話を伺うことができました。また、研修先で五感をフル活用して訪問しなければ感じられないことを吸収することができました。そこで私が感じたのが教育改革の必要性です。

まず、改革の１つとして平和教育の導入が必要だと考えました。戦争証跡博物館やトゥールスレン収容所、そしてアキラー地雷博物館では日本にはないであろう被害を受けた方やものの写真、絵画、実物の武器などを包み隠さず展示しているところから戦争の怖さをより強く感じました。しかし、現地の人たちは現地の人たちはこういった戦争の脅威を映しているものに触れることはほとんどないそうです。私たちが小さい頃から当然のように学習してきた平和教育の活動すら充実していないのです。カンボジアでは特に、戦争を取り上げた教育は行われていません。その理由として考えられるのは、ポルポト政権の時のことを思い出したくないという思いが国民の中に強く存在しているということであると言われています。また、アキラーさんは当時のことを話して自分の考えを述べてしまうと罰せられるかもしれない、殺されるかもしれないと話していました。だから、今すぐにそういった問題を解決することは難しいのかもしれません。でも、私たち外国人の立場なら伝えることができると思います。私たちのような現地で学んだ人たちが学んだことを現地の子どもたちに発信していくことが大切だと感じました。そうすることで将来的にその子どもたちが語りついでいき平和に対する意識が国全体で高まると思います。

改革の２つ目が、経済格差を是正した学校づくりです。都市部では発展が進み豊かな生活をしている人が多いです。しかし、車で数分走ると景色が変わり農村部に入っていきます。そこでは、貧しい生活を送っている人が多く、学校に行きたい人もお金のために働かなければならない現状がありました。そのため、知識や技術が身に付かず発展していこうにも前に進まないというのが現地の声でした。そこに隠れている一番大きな問題は、政府による奨学金支援が十分ではないことであると思います。政府からは数百円しか奨学金が出ないため学校に行くための資金は苦しいままで行けたとしても兄弟姉妹の中で年齢の若い子たちしか行けず、上の子たちは働きに出なければならないという話を農村の中学校で聞きました。それに伴い、夢や希望を持つことすらできない子たちがいるという話を聞き、私たちの当たり前が世界では通用しないということに驚きましたし大きな衝撃でした。現状を変えるには私たちが教育の重要性を訴えていくことが今できることだと思います。また外資系企業が教育面に積極的に投資し、雇用の面でも積極的に受け皿にならなければならないと思います。進出する企業が地域貢献活動として奨学金制度の整備に力を入れることで経済発展の効果がより平等になると思います。したがって、教育格差の是正へ向けプ

ラスに働くと思います。

私は、研修中に今やらなければならない国際支援について考えていました。そこで一番大切だと思っていたのが支援にゴールを決めることです。つまり、どこかのタイミングで担い手を外国人から現地の人にバトンタッチするということです。だから、私が挙げた教育改革もいずれは現地主導で行う方向で考えるべきだと感じました。そうしなければ、外国の影響を受けすぎてしまい発展が止まる恐れがあるからです。そういったことも念頭にいれて私たちは今何ができるか考えていく必要があります。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【知ること・考えることの大切さ】

成城大学　社会イノベーション学部　2 年生

私は今まで当たり前のように日本は豊かな国であり、カンボジアは貧しい国だと考えていた。私にとってカンボジアは支援先としてよく名前が挙がり、多くの人がボランティアに行く国というイメージだったからだ。だから農村やゴミ山で暮らしている人たちは学校にも行けず、十分なお金も稼げずにかわいそう、だと思ってしまっていた。しかしその考えは間違っていたと KURATA ペッパーの倉田さんのお話を聞いて気づくことができた。日本人とカンボジア人では幸せの価値観が異なり、自分の幸せの価値観に合わない人たちをかわいそうと思うのは自分勝手な考えであると。また倉田さんの「やりたくないことをやってお金を稼がないと生きていけない日本の方が実はカンボジアより貧しいのではないか」という言葉がとても印象に残っている。最初は理解ができなかったがカンボジアの人たちの溢れる笑顔を見ているうちに、きっと日本は経済的な豊かさはあっても、心の豊かさが足りていないということを言いたかったのだろうと感じ、心の豊かなカンボジアを羨ましいとさえ思うようになった。

このように私は今回のスタディツアーに参加して知ること、そして考えることの大切さを学んだ。研修先を訪れながら多くの事柄を知り、普段なら絶対考えないであろうことをたくさん考え、その中でインターネットで調べるだけでなく、実際に足を運んでみなければ分からないことだらけであると強く感じた。戦争についてここまで向き合ったのも初めてであり、戦争証跡博物館で展示されていたリアルな写真やキリングフィールドに安置されている遺骨を見て胸が苦しくなって目を背けたくなることも多くあったが、改めて戦争の悲惨さを知ることができた。また戦争はデメリットしか生まないと考えていたが、一方メリットもあるというのは衝撃的であり、それに関してまだ理解が足りていないところがあるのでさらに学びを深めていきたいと思った。そして毎晩行ったディスカッションでは様々な考えに触れることができとても刺激的だったが、自分の意見を積極的に言えなかったのは本当に悔しかった。勉強不足ということもあるが、何より自分の意見に自信がなかった。自分を変えたいというのがこのツアーに参加した理由のひとつだったがゆえに、帰国後やるせない気持ちになっていた時に Sui-Joh の浅野さんが「本質的な失敗は行動しないことである」とおっしゃっていたのを思い出し、そこからは少しポジティブに考えられるようになった。この悔しさをバネに今後もたくさんのことに挑戦していきたい、もっと自分に自信を持ちたい、行動しない言い訳を探そうとしない人になりたいと思う。今回得た学びや感じたことを次に繋げていくために、まずは行動することから始めていきたい。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【濃い 12 日間】

茨城大学　人文社会科学部　3 年生

「本当の幸せとは、何なのだろう。」「よりよい支援とは？」

このような思いを抱えていたことが、私がこのインターンシップ・スタディーツアーに参加を決めた一番の理由だった。様々な研修先を訪れ、仲間とたくさんディスカッションした日々はとても刺激的で、考えることがたくさんあった。

ベトナムでは、戦争証跡博物館やクチトンネルを訪れてベトナム戦争の歴史について学び、戦争について考えた。今からたった 40 数年前にあまりにも悲惨な戦争が起きていたことに改めて驚くとともに、世界にはまだまだ戦争の色が強く残る地域が存在することを実感した。特に、枯葉剤の影響を受けた人々の写真は衝撃的で、枯葉剤を使用したアメリカの罪は重いと感じた。また、施設によって受ける印象がかなり異なった（博物館が戦争の悲惨さを前面に押し出していたのに対し、クチトンネルはある意味アトラクション化・観光地化されているように感じた）ことは、戦争を一言で片づけずに深く考える機会となった。

もう起こってしまった戦争は、必ず次世代に伝えていかなければいけないと思う。二度と同じ過ちを繰り返さないために。これは、ベトナム戦争のみならず全ての戦争（もちろん日本も）に対して言えることだ。日本も、もちろんベトナムも、これから「戦争を知らない世代が知らない世代に伝える時代」に突入していく。知らない世代が知らない世代に引き継いでいくというのは、おそらくとても難しいことだろう。伝え方にゆがみを生じさせないためには、様々な角度からの多くの事実（自国の立場だけでなく、相手国の立場や戦争を取り巻く背景も）を公正な視点に立って伝えていくことが必要ではないか。重要なのは、責任の押しつけ先を探すことではなく、過去の教訓から学び、二度と同じ過ちを繰り返さないことだ。

カンボジアでは、ポル・ポト政権による虐殺の歴史や、今現在のカンボジアの現状について多分野から包括的に学んだ。ポル・ポト政権の崩壊から 40 年たった今でも、カンボジアにはポル・ポトが残した負の遺産がいたるところに散らばっていた。例えば、内戦中には教師や医者を含む知識人が多く虐殺されてしまったため、今現在でも教育が十分にいきわたっていなかったり、医療の発展が遅れていたり…。

衝撃的だったことは、「今のカンボジアの子どもはポル・ポトの歴史をあまり知らない」という事実だ。現在、義務教育では教えていないのだという。色々な方からお話を伺ううちに見えてきたのは、カンボジア国内には今も加害者と被害者が混在しているという複雑な事情だった。

私は、このツアーで学んだこと、得たことを決して無駄にはしないとここに誓う。「本当の幸せ」や「よりよい支援」にたぶん正解はないけれど、12 日間の濃い学びを通して、自

分なりに考えを深めることができたと感じている。それから、このツアーに参加した全ての仲間に、心からの尊敬と感謝を。皆と過ごした時間が、本当に本当に楽しかった。今後ともどうぞよろしくね。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【世界の共通言語は英語ではなく笑顔だ】

福岡女学院大学　人間関係学部　3 年生

私は中学生の頃、島田紳助さんが行列のできる法律相談所をされていた時の企画で初めてカンボジアという国を知った。その企画は、「カンボジアに学校を作ろう」というもので芸能人の皆様が実際にカンボジアに出向き、現地の人と交流をしながら学校や遊具を建設するという内容で、その時に見たカンボジアは私の当たり前の生活とは全く違う貧しく、苦しいものと感じた。それは当時の私にはあまりにも衝撃的だったが、その反面子供達の強く生きる姿に勇気付けられ、いつしか「カンボジアへ行き、現状を自分の目で確認したい」と思う気持ちが生まれ、カンボジア視察が私の夢になった。今回やっとの思いでカンボジア行きを決め、実際に見たカンボジアは私の今までのイメージとは異なるもので様々な点で驚かされた。

カンボジアは貧しく生活困難で問題の多い国だというイメージが私自身強かったし、大多数の日本人も同じことを思っているだろう。それは日本の教育現場やメディアが孤児やゴミ山、地雷や内戦といったメガティブな部分ばかりを大きく取り上げているからだと感じる。しかし私が視察をして見たカンボジアは明るく、笑顔で溢れるとてもいい国だった。確かにごみ山で生活を強いられている人や大事な親戚を戦争で亡くした人、主要地域から少し離れた農村地域では電気が一年前に通ったばかりで水道の水も衛生的に不安な部分があったり、道路の整備が追いついていなかったりと問題が多々あると感じたのも事実である。しかしそれ以上にカンボジアの人柄の良さは素晴らしいものである。カンボジアでビジネスを行っている日本人経営者、Suijoh の浅野さんと KURATA ペッパーの倉田さんが、カンボジアの良さはカンボジアの人の優しさと純粋さであると言っていたが、本当にその通りだと研修の日を増すごとに感じた。お土産やさんやレストランに行くととびきりの笑顔で出迎えてくれたり、孤児院や農村で出会った子供達は無邪気で可愛くて人なつっこくて、私はたくさんの幸せをカンボジアの人から分けてもらった。日本人は幸せのハードルが高く、趣味や娯楽をしなければ、つまらない、不幸せだと感じてしまう。それ故に自分に余裕がなく、同じ人間に対して敵意をむき出しがちである。しかし、カンボジアの人々は「今生きていること」自体が幸せであり、どんな環境下であろうとそれは変わらないのではないかと様々な研修先を訪れて思った。仲間意識が強く、何か困っている様子が見受けられたらすぐに協力して助け合ったり、ご近所同士の仲がよく、気軽に挨拶を交わしていたり。そういった人と人との心の繋がりの深さがカンボジアの温かい国民性を作り上げているのだと思うし、これが本来人間が共生する中で当たり前の形であると私は考える。

この 12 日間は人生史上もっとも意味のある時間だったし、生涯忘れることはないだろう。私一人で出来ることはきっと微々たるものだけれど、この研修で出来た沢山の最高の

仲間と大事なことに気づかせてくれたカンボジアに何か恩返しがしたい。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【なぜ戦争はなくならないのか】

慶應義塾大学　商学部　3 年生

今回、このベトナム・カンボジアの二カ国研修に参加して様々な分野について触れ、学習し、広い範囲で物事を考える機会を得ることができた。その中でも私が、ツアー中に特によく考えたことは、戦争や虐殺についてである。このツアーでは、ベトナムで戦争証跡博物館とクチトンネル、カンボジアでトゥールスレン収容所とキリングフィールドに訪れて、この二カ国で起こった出来事について真正面から向き合い、自分の中で整理しようとした。しかしどうしても疑問に残ったことは、「なぜ戦争はなくならないのか」ということである。この「戦争」とは、広義の意味として内戦やテロも含むものとした上で、現在では国家間での武力衝突はほとんどなくなったものの、内戦やテロはいまだになくなる様子が見えない。

学校などで歴史を勉強していく上で、「なぜ歴史を勉強するのか」という質問がよく挙がると思うが、それに対して先生は「同じ過ちを 2 度と繰り返さないため」と答えることがよくある。私自身もその答えで納得していたところがあったが、改めて今までの歴史や現在の状況を顧みると、歴史は同じ過ちの連続でしかないと感じる。第一次、第二次世界大戦やナチスドイツやポルポト政権による大虐殺などといった惨劇はその例であろう。本当に歴史は人類を正しく導けるのか。そもそも何が正しいのか。戦争とは本当に悪いものであるのか。このようなことを今回のツアーで考えてきた。

人間は深く考えることができ、同じ失敗を繰り返さないようにすることはできるはずだが、それと同時に人間はとてつもなく強欲で、利益を追い求めるために同じ惨劇を繰り返してしまう愚かな生き物だとも思える。おそらく戦争がなくならない理由として、戦争をするメリットがデメリットを上回ってしまうのだと考える。戦争の歴史が語られる上でデメリットはよく受け継がれていくものだが、果たして戦争をするメリットとは何であろうか。このことについては、ツアー中のディスカッションでグループのメンバーと話し合うことができた。その中で挙げられたこととしては、軍需産業の景気が良くなることや科学や医療技術の発展、国内改革の進展などである。確かに、日本でも朝鮮戦争勃発に際して軍需産業は大儲けをした。そして私たちの生活と関わりがあるコンピューターや原子力発電（原発については賛否が分かれるが）は戦争によって大幅な技術革新があった。また、ポルポト政権による大虐殺も潜在的反対勢力の排除をし理想の国家を築く上では、必要なことであったかもしれない。このように誰かが得をする以上、戦争は一生なくならないかもしれない（現に私たちも、戦争による技術革新等で利益を享受している）。しかし、人間の一般的な倫理観に基づいて考えるならば、人は殺し合わずにいることが最も平和であると私は考える。たとえ戦争をするメリットがデメリットよりも大きかったとしてもだ。それを歴史が 1 人でも多くに伝えられるのならば、歴史を学ぶ意義は達成されていると思

う。

今回のツアーでは、戦争にまつわる様々な場所を訪れることができ、あのような惨劇は2度と繰り返すべきでないと再確認することができた。人類は歴史から学び、よりよい未来を作ることができるのかということについてはまだ確信を得ることはできないが、少しずつ平和な世界に向けて小さな一歩を積み重ねていると信じたい。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【豊かさとは】

京都大学　法学部　4 年生

私は今回のスタディツアーに参加することで豊かさとは何かについて再び問い直す機会を得た。

豊かさとは何だろうか。こう質問された時に多くの日本人は物質的な豊かさを真っ先に思い浮かべるのではないだろうか。これまでの私はお金など資産があってこそ豊かであると考えていた。精神的な豊かさというのも重要だろうが、それも結局は物質的な豊かさに支えられたものであって、貧乏な人や国は豊かとは言えないと思っていた。それ故私は豊かになるために就職活動の際には人よりも多くのお金を稼げるという条件を重視した。

ベトナムとカンボジアは想像以上に発展していた。都市部の中心地だけであれば日本と同じくらいの繁栄ぶりだった。街並みは綺麗に整備され自動車も多く走っていた。しかし繁華街から少し外れると道路がコンクリートで整備もされていない土の道のままで建物もぼろぼろでこれぞ発展途上国といった様子だった。路傍に屯する人を見ると汚い服を着ていたり裸足でいたりした。一部の富裕層をのぞいて金銭的には豊かでない人がまだまだ多いという印象だった。それにも拘らず金をほとんど持っていない人も含めてほとんどの国民の表情はとても明るかった。より富んでいる母国の日本よりも、より貧しいこの発展途上国の方がより豊かな生活を送っているように見え衝撃を受けた。

訪問先の中で最も印象的だったところはゴミ山だ。カンボジアではゴミの分別がなされておらずすべてのゴミが埋め立て処理されている。ゴミの中にはプラスチックや紙など売れるものも含まれているためスカベンジャーと呼ばれる人々がゴミを集めて売って生計を立てている。その中には孤児もいてひどい悪臭がしている中をマスクもつけず靴も履かずにゴミを集めている。ほんの数分も滞在したくないと思うような悪臭がするひどい環境だった。しかしそこにいる人々の表情もとても明るかった。休憩中の人たちが小屋の中で楽しそうに会話をしているのを見た。子供たちは拾ってきたであろう自転車に乗りながら遊んでいた。ゴミ山を視察しているなかでこちらの視線に気付いた人たちはみな私達に笑顔を向けてくれた。人々の表情は決して自分の置かれている環境を悲観している様子ではなかった。

両国の人々は物質的にはほとんど豊かではなかったのであろうが精神的には日本人以上に豊かな生活を送っているようだった。しかし自分よりもものにあふれた生活をする人を目にしてもそれでも今の生活を豊かだと感じられるのだろうか。無知ゆえの豊かさではないのかとひねくれた考えをしてしまう。それでも両国の人々は汚く貧しい生活を送ってはいたがとても豊かな生活を送っているようで羨ましく思った。豊かさには金銭的な充足は有るに越したことはないがそれ以上に大切なものがあると思った。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【笑顔ではかる豊かさ】

宇都宮大学　国際学部　1 年生

カンボジアは貧困の国だとさげすんでいた私が愚かだったのかもしれない。実際は、私の想像を覆し、町中の誰もが笑顔で生き生きと生活する心暖かい国だった。対し、帰国し感じたのは日本人の覇気の無さだ。Sui-Joh の浅野さんが、「お金が無くても幸せなカンボジアは豊かなのか。お金の為に働く日本人は貧しいのか。」と話してくれたことがリンクした。本当の豊かさとは何だろうと考えた時、出国前の私には考えられない『迷い』に至ってしまった。カンボジアは貧しいのだろうか…。豊かさはお金の有無で決まるものでは無いし、権力の強さで変化するものでもない。よく国の豊かさを GDP で比較するが、その一つのものさしだけでは国の豊かさは判断できないし、測り知れないと強く感じた。

カンボジアの農村では、「私達は自給自足が出来ていて、勉強が要らないから学校教育は必要ない」という。本当にそうだろうか。教育はどの子供も受けるべきだと私は考える。なぜなら、知識は彼らに、選択肢を与え自立を促すことができるからだ。SJH は魚を与えるより魚の釣り方を教える政策をし、相手が本当に必要としているものを与え、最終目標はカンボジアが自立することにある。『自立』これが今一番求められている支援なのだ。しかし、カンボジアを含め途上国が貧困から抜け出すのに『教育が必須である』ことを伝える難しさも感じた。

私はこの 12 日間でとても大切な友達に巡り合えた。彼らがいたからこそ記憶に残る有意義な時間となった。自分には無かった考えをディスカッションの度に得ることができ、日々刺激を受け続けた。ある友達から、「なぜ貴方は少し手を施せば幸せになる身近な日本人よりも、自分になんら関係の無いように思える遠い途上国の子供達を先に助けたいのか。」と聞かれた。考えたこともない質問にその場では硬直してしまった。しかし、今なら答えることができる。貧しさを国で分けてはならない。ある国の子供ではなく一人の子供として見た時に、最低ラインにいる子供から私は助けると。この問いかけはとても印象深く、多方面にそして掘り下げて考えることを気付かせてくれた。今後、私の考えることへの価値観が変わるだろう。意見をぶつけてくれた友に感謝したい。

ベトナムとカンボジアを訪れて、十分な衣食住と教育を受けられずに過酷な労働を強いられている子供達を目の当たりにしたが、彼らは決して不幸なわけではなかった。私が仲間と出会い毎日が幸せであったように、彼らの笑顔はとても豊かだった。これは実際の彼らに会えたから分かったこと。固定観念を払拭することのできた貴重な日々であった。

私の旅の目的であったゴミ山で働く子供たち。彼らが、已むを得ずゴミ山で生計を立てているのなら救いたい。教育を受け、平等に選択する自由を与えてあげたい。自分に可能性があることに気付かせてあげたい。一人でも多くの子供たちが、夢を語れるように。

♪この世界の共通言語は英語じゃなくて笑顔だと思う／あなたがいつも笑えていますように心から幸せでありますように…　カンボジアの子供たちから勇気をもらったこの歌

が旅で出会ったみんなの笑顔を蘇らせる。ありがとう。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【戦争を無くすには】

関西大学 政策創造学部 3 年生

中学二年生の時、塾の先生が授業そっちのけでカンボジアで起きている悲しい現状について涙を流しながら語っていた。その記憶を今までずっと抱えながら生きてきたけれど、自分が主体的に行動した事は一度もなかった。理不尽な死が生まれる環境を、社会を憎んで怒ってばかりいた。言葉ではいくらでも言える。けれど私の言葉にはいつも必要とされる重みがなく、自分の意思表示をする度に虚無感ばかり募っていた。それは実際に自分の目で何も確かめた事がない人のあまっちょろい考えだったからにすぎないからだ。今回このツアーの参加が決まった瞬間から、やっと自分が自分の主役になれた気がした。焦りや行き場のない感情などの重いと感じていたものが、だんだんと莫大な知的好奇心へと変わっていった。私はこの目で、肌で、耳で、私の全てで知りたい事を知る事ができたのだ。

実際このツアーで得たものや知った事は大きい。ただ知れば知るほど疑問が湧き出てくるし、底抜け沼にはまった気分を味わった。歴史はそう簡単に素顔をみせてくれなかった。しかし私なりに答えを出せた事がある。難民、貧困、飢餓、子供兵なども生む大きな要因である戦争を無くすにはどうすればいいかという議題についてだ。それを以下に示す。

まず、戦争が起こる理由は人間の心の弱さが大きな原因である。やめたいことをしてしまうのが人間の弱さ、悲しさなのだ。人間のパワーは集まると大きな権力すらひっくり返す事ができる。なのになぜ戦争をやめようという一声に多くが集まらなかったのだろうか。ルールや命令、洗脳などは表面上の理由なのであって、核となる一個人としての自分の意思はどこにあったのだろう。心がないならなぜ仲間を助け合うのだろう。なぜ死んでると分かっている人に人口呼吸をするのだろう。戦争証跡博物館で展示された多くの写真を見てそう感じた。冷たい言い方かもしれないけれど過去は過去。私達は過去を変えたいから考えているのではない。今私達が考えるべきことはここで問題となってる human spirit の″本質的な弱さ″の部分だ。その心理的な痛い所を突き詰めて考えていかないとまた同じ事が繰り返されかねないし、過去は変革のための材料にすぎないということを感じた。

トゥールスレン刑務所でも感じた事だが、一般的に歴史といわれるものから出来事や変革やそれを起こした人物などを私たちは知る事ができる。しかしそれぞれの人物がいったい何を考えていたのか、どんな葛藤やショックがあったのかという生の感情について知る事は私たちはできない。それを理解できれば少なくとも今よりは歴史への納得感が高まるだろう。

今回のツアーではリアルをもろに見て歴史を感じる事ができたし本気で平和とは何かを考えたいと思った。みんなで。そしてその平和を作り上げていくのは私たちであること。いついかなる時も当事者性さえもってればセンセーションを巻き起こせる事を私は信じている。

【「本当の支援」とは何か】

神戸大学　国際人間科学部　1 年生

今回のベトナム・カンボジアスタディーツアーに参加した 12 日間を通じ、最も考えさせられたのは「日本の支援の在り方」についてだ。実際に現地の状況を見て、多くの方からお話を伺い、仲間とディスカッションする中で感じた問題点は、特に 2 つある。

１つ目は、日本における発展途上国への偏見に関してだ。私はこの度、初めてベトナムとカンボジアを訪れたが、ツアーに参加するまでは「ベトナムやカンボジアは発展途上国で、多くの人が貧困に喘いでいる」と考えていた。しかし実際に訪問してみると、中国の外資導入や高層ビルの建設ラッシュなど、ベトナム・カンボジア両国が経済的な成長過程にあるということが至る所で感じられた。また経済格差は存在するものの、高級住宅街や外車などの所有者も一定数存在し、必ずしも全国民が貧しい生活を強いられている訳ではないと分かった。一方で、日本ではメディア等を利用し、貧困国への支援を呼びかける活動が活発である。Sui-Joh の浅野佑介氏はそうした状況に対して疑問を投げかけられていた。支援団体の中には「貧困」に依存して活動を成立させているものもあるという。もちろん、ベトナムやカンボジアのみならず、発展途上国と呼ばれる地域には絶対貧困下で生活している人々が依然多く存在し、支援が求められているのも事実だ。しかしこれからは被支援国の将来的な自立を見据え、被支援国の需要を満たした支援の形を模索するべきであると痛感した。

2 つ目は、自国の発展も見据えた、発展途上国と対等な立場での支援が日本に浸透していないという点だ。先にも述べたように、今後の支援の在り方として、被支援国の自立や需要を重視するという点は欠かせない。加えてビジネスとパブリックを両立させた支援の在り方も模索するべきだという。JICA 事務所でお話を伺った篠原雄之氏によると、パブリックをビジネスに引き込む力を身に付けてこそ、自らの成長や発展を望める支援ができるのだそうだ。中国の徹底した投資型の支援に対し危惧や懸念の声も挙がっているが、日本も参考にできる点は数多くあるとのことだった。私たちにとって、支援の在るべき姿を再考することは必須である。また、SDG s や先日開催された TICAD での「自由で開かれたインド太平洋戦略」といった目標・取り組みを有効に活用し、それらを抽象論で終わらせず具体的な行動に移していく足がかりにする必要があると感じた。

12 日間のベトナム及びカンボジアでの滞在を通じ、「本当の支援とは何か」という問題に私たちは向き合った。この問いに対し、一つの答えはないだろうし、どの答えが正解かは決められないだろう。だからこそ私たちは、本当の支援について考え続ける必要があり、大学や社会で行動に移していく責任を負うのだと思う。

最後に、今回のツアーに参加したことは、私にとって今後の学びや進路、キャリアを考える上で重要な機会となった。このような貴重な機会を設けてくださった関係者の皆様へ

の感謝の気持ちを忘れず、これからの学びに活かしていきたいと思っている。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【研修を終えて】

筑紫女学園大学　文学部　3 年生

今回の二カ国研修を終えて、私は今までのベトナム・カンボジアに対する考えがものすごく変わった。カンボジアは、貧しくて未だに食にも厳しく貧困が酷く戦争の影響が残っているものだと思っていた。しかし、実際に行ってみると他の国と変わりなく建物も立っていて自立しているように感じた。

カンボジアで最も印象に残っているのは、SunriseJapanHospital と孤児院にいったことだ。SunriseJapanHospital では、思ってた以上に病院内がきれいで設備も整っていて日本の病院とさほど変わらなかったことにびっくりした。実際には、行き詰まりつつある日本の医療規模の拡大など互いに得する関係が成り立っているのがすごく印象的だった。だが、問題は人材不足だったり地方などの病院では闇医者もいたり解決することはまだたくさんあるのだと分かった。これから医療ビジネスが発展していく中で制度をより充実させ貧しい人たちに提供するサービスの補償が徐々に出来ていくのが重要ではないかと思う。

孤児院では、何かしらの問題を抱えてる子供達が多いと思っていたため雰囲気は暗く人見知りな子が多いイメージだった。しかし、実際には子供達はみんな明るく積極的に近づいて来てくれてびっくりした。孤児院の子供達の中には英語や日本語が分かる子もいたり手先が器用な子がいたりと学習能力がとても高いなと感じた。子供達の印象が良かった一方で、トイレはとても汚く流すこともできず、遊ぶ遊具もない、お皿は外の水で洗うなど施設の設備はあまり整ってないように感じた。子供達が成長する場所であるために、もっと環境をよくするべきだと思った。

二つのことを最も印象だったものとしてあげたがほかにも考えさせられたことは多い。経済発展を遂げる中でカンボジアは貧困というイメージにすがりついて海外支援に甘えてばかりである。支援が無くとも自立できるように、制度や人材育成をもっと活発的行うべきではないかと思う。私達もその国が良くなるために表面上だけの支援ではなくその国のことをちゃんと知った上で必要な事をするのが重要だと思う。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【スタディーツアーで感じたこと】

筑紫女学園大学　文学部　3 年生

今回、カンボジアに訪れてツアーならではの貴重な体験ができた。孤児院や農村の人たちは幸せではないと思い込んでいたが､訪れてみて彼らに対しての印象が大きく変わった。環境面ではトイレが汚かったり、遊び道具が設備していなかったりしていたが、みんなが明るくて笑顔で楽しく踊っていたり、英語を話していたり、食べ終わった後のお皿を自分たちで洗っていたりしていて、日本よりも教育面に対して発達しているのではないかと思った。そしてクルーズに乗っているとき、家族団らんで楽しく作業をしていらり、エアコンのない部屋でハンモックで寝ている人をみて経済的に豊かではなくても幸せではないとは限らないということがわかった。彼らにとってはそれが『幸せ』であり､『幸せ』というものは決められているのではなく、人それぞれである。訪れる前はいい生活ができ、お金がなければ幸せではないと思っていたがカンボジアに訪れてみてお金がなくてもいい生活ができなくても必要最低限ご飯を食べることができ、家族仲良く毎日笑顔で過ごすことも幸せなんだなと思った。

ポルポト政権によって、知識人が殺され、現在のカンボジアは、医療面では医者が不足していたり、教育面では、音楽、体育、美術がないことや教師が足りていないことを知った。農村の中学生に訪れたとき生徒の人たちが日本の曲を披露してくれた。彼女たちが歌ってくれた「世界に一つだけの花」と「福笑い」か忘れられない。日本でその 2 曲を聴いても何も感じることがなかったが、あの場所、彼女たちが歌ったからこそ心に刺さった。そして援助してあげたいという気持ちになった。

今回このツアーに参加したからこそ考えることや感じるものがあった。『幸せ』についても日本では絶対考えることはなかっただろう。当たり前だと思っていたことが当たり前ではなかったことやなによりも日本という国がどれだけいい国だということを再確認することができた。そしてカンボジアに対するイメージや自分の価値観というものが大きく変わった。ありがとうございました。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【自分を見直す機会】

都留文科大学　文学部　１年生

今回 JAPF のベトナム･カンボジア二か国スタディツアーに参加して特に考えたことは、自分の価値観の押し付けについて、また批判的思考についてである。

研修先の多くで、日本人のカンボジアに対するイメージと現地の状況が大きく異なることを知った。私の想像以上に発展していたカンボジアは、発展途上国と呼ばれていることを忘れさせるような景色を見せてくれた。そのうえで倉田さんのお話を聞き、貧困とは何かについて考えさせられた。ツアー参加前の私は、カンボジアの人々は貧しく、それは不幸であり、より発展することで幸せになるのだと安直に考えていた。しかし実際に彼らは自分たちの生活に満足しているのかもしれないし、お金を稼ぐことができずとも自給自足の生活に大きな満足感があり私よりも大きな幸福を感じている可能性は十二分にあるのである。ツアーに参加する以前の私は考えが及んでおらず、その可能性に気づいたときには今まで自分の価値観でしか物事を考えてこられなかったことがとても恥ずかしかった。そして同時に私たちは自分の価値観をまったく変えることはできないと感じた。

倉田さんのお話で出てきた例としてアリとキリギリスの話があった。せかせか計画的に働くアリも、自分の好きなように自由に生きるキリギリスのどちらも良く、尊重されるべきであるというお話であった。しかし私は結局アリのような生き方が正しいという考えが頭の片隅に永遠に残っている。それは今まで私が受けてきた教育や周りの環境に大きく左右されているのだと思う。今までの経験をふまえ、私は簡単に自分の価値観を変えることはできないと感じた。私が常識だと考えていたことを考え直すのはとても難しく、一生のうちに変化させることができるのかと疑問に思う。そのため自身の価値観を変えることはできないと把握した上で、新しい価値観を理解することが重要であると考える。自分の発想を新しくするには長い時間がかかるだろう。しかし多面的に物事をとらえるために、様々な価値観を理解し納得することで自身の思考の幅を広げることができるようになると思う。それぞれの視点に立つことで少数派にも目を向け、多くの人の幸せ、望みとは何かについて多角的な意見をもつことができ、そうすることで議論の新たな発展につながると改めて考えることができた。

また批判的思考の難しさと重要さを痛感したツアーであった。ツアー初期にはどの研修先でも新しいお話を聞いて納得することしかできず、その研修先に対する問題意識が欠落していた。物事を多面的にみることができれば、一面的なメリットだけでなく、別の視点からのデメリットへ問題意識を持つことで考えをより深められると思う。しかしディスカッションを通して、物事に対して問題提起をあまりしないという弱点があると気づかせられた。ツアー終盤に、批判的思考に挑戦し、そうすることで議論が活発化する経験を得た。まだ考えの及ばない部分が多いが、批判的思考をする大きな第一歩を踏み出すことができ

たと思う。

今回のツアーに参加したことで、様々な知識を得て、多角的な意見に触れ、自分自身の考え方に対して疑問をもつことができた。この経験と、人との出会いは私の人生の大きな財産となった。この財産を廃れさせないように、今後の学生生活で多くの挑戦をしていきたい。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【２ヶ国ツアーを通して感じたこと】

明治大学　法学部　３年生

今回のツアーに参加したことは、間違いなく自分の財産であり、一生忘れることのできない経験を沢山することができた。その中でもツアーで深く感じたことが４つある。

１つ目は、「戦争の恐ろしさ」である。ベトナムの戦争証跡博物館では、何台もの戦闘機や戦車を見ることができた。特に、戦闘機の窓から外へ出ている、大型の銃の前に立った時の恐怖は、一生忘れることができない感覚だった。また、クチトンネルでは、クチの人々の強さや知恵を感じることができた。クチの農民は、昼間敵が来るときは反撃し、夜は畑を耕しながら、アメリカ軍の攻撃から平和を守るために戦っていたという。私は、このようなクチの人々の真面目さや、優しさが大国アメリカへの勝利に繋がったと考える。そして、これらの施設の共通点として、戦争で起きた悲劇をありのままに見せているという点が挙げられる。私は、日本の原爆ドームなども行ったことが無く、戦争がどのようなものなのか、どれだけ恐ろしいものなのかを想像することしかできず、戦争に対する認識がとても曖昧であった。しかし、このツアーで沢山の写真や、展示品、銃を撃つ体験や、戦地を見たことによって、改めて、戦争は負の連鎖しか生まない絶対に起こしてはならないことなのだと確認することができた。若者である私たちが二度とあのような悲劇は起こしてはならないと認識すること、そしてそれを発信していくことが、戦争がなくなることへの近道になるのではないかと思った。

２つ目は、「人々にとって幸せとは何か」という疑問である。このツアーを通して出した私の答えは、「笑顔でいること」である。私が想像していたカンボジアは、貧しくて暗いといったネガティブなイメージだったが、実際は全く違っていた。孤児院や農村、町でみかけた人々は皆、笑顔であふれていた。もちろん貧しい地域もまだ沢山あるけれど、貧しい＝不幸と想像していた私にとって、このイメージが変わったのはとても大きな収穫であった。ポル・ポト時代の辛く苦しい過去を乗り越え、笑顔で毎日を強く生きているカンボジアの人々は、とても幸せそうで、自分も常に笑顔でありたいと心の底から思った。

３つ目は、「本当の支援とは」というテーマである。今回のツアーではこの問いについてたくさん考えることが出来た。自分には何が出来るのか、何をすれば支援となるのか、支援は定義付けできるのか、など仲間とのディスカッションで自分なりの答えを見つけることが出来たと思う。まず、支援には、様々な形があるということ。支援というと金銭に関係するものを思い浮かべるが、技術や教育などあらゆる分野で支援することができる。一方的な金銭の援助は支援とは言い難く、本当の支援とは、相手の国のニーズに合った支援なのではないだろうか。例えば、先生が足りていないカンボジアの教育面を支援することが挙げられる。相手のニーズに合わせて支援をすることで双方に利益をもたらす、この流れ自体が本当の支援ではないかと考える。

４つ目は「仲間との繋がり」である。このツアーでは、沢山の仲間と出会うことができ、自分の視野がとても広がった。大学も学部も違う新しく出会う人と 12 日間一緒に過ごすことは、後にも先にもできない貴重な体験だったと思う。

以上の 4 点は、日本では考えることも感じることもできなかったことであり、このツアーだからこそ経験することができたのだと思う。また、今回の２ヶ国ツアーで感じたこと、学んだことを忘れず、沢山の人に伝えていくことも私たちができる小さな支援であると思うので、できる限り活動をしていきたいと考えている。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【大学生である私がツアーを通して見えたもの】

同志社大学　経済学部　3 年生

今回、私自身が、このツアーに参加してみて一番感じたこととは何かを、帰国して考えてみた。今回は、それを２つにまとめて書いていくとする。

１つ目としては、このツアーの参加する前は、テレビ等のメディアで報道されているように、ベトナム・カンボジアは、絵に描いたような発展途上国で、道路等のインフラ整備もままならないような状態で、人々も貧困を喘いでいるような状況を想像していた。では、実際にはどうであったかというと、環境面で言えば、前述したような状況は見受けられなかったと言えば、必ずしもそうではないが、精神面でいうと、私が想像していた貧しさというものは存在していなかったと感じる。インフラ等の物質的豊かさは、確かに日本や他の先進国には劣ることは仕方がないにしても、精神的豊かさは、ベトナム人や、カンボジア人の方が持ち合わせているとツアー中も感じていたし、帰国してからより一層強く感じた。

では、私が感じたこの精神的豊かさを持ち合わせているベトナム人・カンボジア人とそれを持ち合わせていない日本人では、何が異なるのであろうかと考えた時、私は、１日の過ごしかたの違いにあると感じた。日本であると、社会人ならその日１日にこなさないといけない仕事がある程度決まっていて、それに追われている。学生であっても、授業や部活に追われる日々を過ごしているのが現状である。つまり、１日が始まる前に、やらなければならないことが決まってしまっているのである。ところが、ベトナム人やカンボジア人は、そうではなく、その日１日が始まって過ごしながらやることを決めているように感じた。日本人のように惰性で日々を生きている感じではなく、その日を自分なりに生きているように見受けられた。どうその日１日を過ごすかの価値尺度が、根本的に違うのであると感じた。疲れ果てた顔で、街を歩く日本人と比べて、ベトナム・カンボジアで過ごす現地人は、心に余裕があると感じた。このツアーに参加中、様々な研修先や街に訪れたけれど、どこにおいても上記のことを一番感じたことである。

２つ目としては、このツアーに同行したメンバーに出会えたことである。大学もバラバラで、ましてや、出身地も異なる大学生が、偶然集まった中で、ツアー終了後も SNS 等で繋がり続けられ、会いたいと思える仲間に出会えたことがこのツアーで得られたものの中で、経験と同じくらい良かったと言える。育ってきた環境や、好きなこと、やりたいことが異なる人達との、意見交換を行うことで、自分に今までなかった考え方を得られたり、感じることのなかった感情得ることで、とてもいい刺激となったことは言うまでもないし、今後必ずどこかで生きてくるものであると感じる。そして、このツアーをうまくいくように運営してくれた引率の健太郎さんや、葵さんにはこの場を借りて感謝の意を伝えたいと思う。以上で、私の論文を終えたいと思う。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【本当の豊かさとは何か】

同志社大学　政策学部　1 年生

私は今回、ベトナムとカンボジアを訪問して二ヵ国の都市環境や人々の生活を間近で見たことにより、「本当の豊かさとは何か」そして我々が住む日本は本当に豊かなのか、について考えた。そして、日本は本当の意味での豊かさとはかけ離れているのではないか、という結論に至った。

一般に「豊かさ」とは金銭的な面や、街のインフラストラクチャー整備の面などが想像されている。確かにこれらの基準はその国の豊かさを測るうえで重要な項目だろう。しかし、今回のツアーで感じたことは、現地の人々の人間性を見ることによってその国の「豊かさ」が分かるということである。

まず二ヵ国を訪れた際に、最初に衝撃を受けたのは都心部と郊外の様々な面における格差である。生活水準の格差は特に顕著に表れており、まるで別の国を見ているようだった。また、都心部で生活する貧困層の人々は物乞いをし、生活に困窮していた。しかし、彼らの表情を見て驚いた。彼らは生活に困窮しているにもかかわらず、常に笑顔を見せており、彼ら自身の生活に満足しているようにも思えた。また、CHA を訪れた際には、障がいを持った方々が暗い表情を見せることなく、我々に笑顔で接してくださった。このように、標準的な生活をできていない人ですら幸せそうに暮らしている様子を拝見して、彼らに共通することは「心が豊かである」ということだと思った。金銭的、物質的には日本と比べて遥かに劣っているが、孤児院や CHA などにいらっしゃった人々のポジティブな生き方やその笑顔は、そういった基準では測れないなと感じた。国の豊かさは各国がそれぞれ決めることであり、第三者が介入して判断するべきではないなと思った。

それと関連して、我々のような先進国が行っている支援は本当に役に立っているのかについて疑問に思った。先進国は、途上国に対して物資の支援、金銭の支援、精神的な支援を行ってきている。しかし、彼らは本当にそれらを求めているのだろうか。支援側が一方的な支援を行うことで満足しているような気がする。大事なことは、将来的に途上国の人々が自立して支援なしでも自国を発展させることができるようにすることだと思う。このようにイメージとしては、そっと手を添えてあげるだけの支援が本来の姿だと考える。

今回のツアーに参加するまでは、ベトナムやカンボジアの生活は非常に粗末で街全体も暗い雰囲気なのかと思っていたが実際は真逆に近いもので、決して裕福な生活をしていない人でもその生活に満足し、豊かさを感じていることが分かった。そしてこれらを踏まえて、先進国は支援の形を変えていく必要があると考える。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【カンボジアに必要な支援とは】

同志社大学　経済学部　3 年生

私は、このカンボジアスタディーツアーを経験して、今までカンボジアに対して抱いていたイメージが変化した。カンボジアは、メディアなどでは貧困やポルポト関係の内戦の事ばかりが報道されるが、実際のカンボジアは、たしかにキリングフィールドやトゥールスレン収容所・ゴミ山に見られるように、負の側面もあるが、高度な教育を行う大学やイオンモールがあって発展しており、また「オークン」と挨拶すると誰でもニコッと笑って挨拶を返してくれるほど国民性も穏やかで、決して貧しいだけのイメージで語られるべき国ではないと感じた。

しかし、カンボジアにはもちろん支援が必要な部分もたくさんある。まずは交通インフラの整備である。プノンペンやシェムリアップの都市部ではアスファルト舗装されていたが、少し移動すると土が剥き出しの道がほとんどで、このままでは効率的な物流が阻害されていると感じた。そしてゴミ処理場の建設の支援も必要である。私はこのツアーでシェムリアップのゴミ山を訪問したが、そのあまりに非日常的な光景に衝撃を受けた。あたりには悪臭が漂っていて、健康を害するようなゴミも散乱していた。しかし、そこでゴミを拾って生計を立てて生活している家族もおり、深刻な問題だと感じた。ゴミ山があることによる環境問題は深刻であり、ゴミ処理場を建設しないとこの構造的な問題は解決しないと感じた。また、教育分野での支援も大切である。教育の充実は国の発展の根幹であるが、今カンボジアではポルポト時代の影響で、教師の数が足りていない現状がある。CIESF の方も言っていたが、まずはキチンとした教育を提供できる教師を育成することが大切だ。

ここで大事なのは日本などの先進国からの支援が一方的な支援にならないようにすることである。教師が足りていないのに学校だけ過剰に立てるような、ニーズに合わない支援は求められていない。支援する国は相手のニーズを考え、そのニーズを満たす支援をしなければならない。持続可能で双方が満足する支援が求められているのである。そしてカンボジアに先進国の価値観を押し付け流こともあってはならない。あくまでもカンボジアが将来的に、経済的に自立して支援のいらない国にすることが、支援の最終目標であるということを忘れてはならない。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【自分が本当に目指したい支援の形】

南山大学　法学部　1 年生

このツアーに参加して、私の中の支援へのイメージが変わった。私はこれまで、何か社会で起きている課題の解決のために行動することは全て、ヒト・モノ・カネを与えることだと思っていたし、それが支援の典型イメージだと思う。しかし、このツアーを通して課題解決の方法はそれだけではないと気付かされた。

最初に私の持っていた支援へのイメージを変えたのは、Sunrise Japan Hospital での研修だった。この病院をつくるきっかけは、カンボジアでは十分な医療体制が整っていないこと、それに加えて日本の医療が行き詰まっていることであった。カンボジアに日本の上質な医療を輸出することで、カンボジアの医療の質の向上と日本の医療周辺産業のビジネスチャンスの創出が可能になる。支援する側にもされる側にもどちらにも利益があることで、持続可能な事業となっていた。また、輸出した技術を次第にカンボジア人が受け継いでいくことで課題の解決にもつながる。支援した先にある自分たちの状態や現地の結果について現実的に考えることの重要性を感じることができた。さらに、課題の根本的な原因である、医療のロールモデルがいないという問題にも、研修として日本の医療現場に送るということで対処がされていた。表面でみえる課題だけではなく、根本の原因を解決することで､最終的に支援の必要ない状態に導くことができるのだということに気付かされた。同じことは CYK での研修でも感じた。子どもに幼児教育を受けさせるために親の収入を安定させること､給食代を払えない親には仕事を与えてその給料から払ってもらうことなど、課題に対する原因を持続可能な形で解決することに注力することは、実現可能性を上げる上で大切なことだと思った。

また、やってはならない支援の形についても学ぶことができた。それは Sui-Joh の代表の浅野さんが警戒していた貧困へ依存する形だ。貧困への依存とは、課題を解決するために始めた事業なのに、課題が解決すると事業が続けられなくなり、課題を残そうとしてしまうことだ。この状態に陥ると、本来の目的を見失い、課題の解決が出来なくなってしまう。課題ではなく、理想に注目し、それを追い続けることが支援において大切であると気づくことができた。

私は将来、社会課題の解決に貢献できるような職業に就きたいと思っている。これまでは、ヒト・モノ・カネを与えることがその唯一の方法だと考えていたが、それだけでは持続可能な支援にはならず自分の首を締めることになり、根本的な解決にはならないと気づいた。これからは、持続可能で根本の原因に着目した支援の形を模索していきたい。それが、私の果たしたい課題を解決することを本当に実現するための方法だと、ツアーを通して気づくことができた。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【私がみたカンボジア】

首都大学東京　都市教養学部　4 年生

私は、日本人ならではの凝り固まった考え方を解したいと思い、このツアーへの参加を決めた。高校時代に訪れたベトナムが懐かしく、再度、その空気感を味わいたいという思いもあった。そのため、将来の進路選択のために「平和・戦争」について学びたいとか、ディスカッションで思考を深めたいという意欲が強かったわけでは無かったし、沢山の友人を作りたい！というわけでも無かった。しかし、結果としては、日本各地から集った、背景の異なる学生達と深い話もしながら、多様な広い世界をこのタイミングで知れたことは、今後の私の価値観に大きな影響を与えたと思う。

ベトナムの研修先は、以前にも訪れたことがあったので、主にカンボジアについて触れることにすると、「カンボジアは危うい国だ」というのが、私の研修を終えての感想である。「笑顔の国」とか「成長が見込まれている国」ではなく、実に地盤が不安定で心配になる面が多かったように思う。

それを最も感じたのは、ゴミ山である。フンセン首相は、教師・資金不足の現状をどのように受け止めているのか、私費で選挙対策として各地に学校を建てまくり、支持を集め、独裁政権を築いた一方で、ゴミ処理にかけるお金はないという。「他国が支援してほしい」という言葉が観光省の職員から出る。私は、この事実に愕然とした。

また、CHA では、「自国支援はカンボジア国民のニーズを正確に捉えられるから良い！」と持て囃される一方で、私は、商品と購入者のニーズのズレを、CHA 側はどこまで把握しているのか、そして 65 歳の方や 10 年以上施設にいる方もいて、障害を持つ方々にとって、CHA が居心地の良すぎる場所になっているのではないかと疑問に思った。

また、現在のカンボジアは、主に中国からの外資による発展が猛進している。医療格差もある。ポルポトにより、文化人を初めとし、国民の 1/3 を失い、現在もなお、かつての敵と味方が共生している環境の中で、独裁が敷かれて、他国の影響を受けやすくなった。私は、形は変われど、「歴史は繰り返されてしまうのではないか」という危機感を持った。その理由としては、国民が「否定する・疑う」という教育を受けていないことが挙げられる。何より早く、教育の整備が求められるが、それが実現し、国を担う人材が育つには 10 年単位の時間が必要だろう。

しかし、それでも、子供たちには無限の可能性を感じた。元々、手先が器用で能力も意欲も高い子供たちが、今や皆スマホを手にしており、世界の文化も言語もエンタメすらも、身近になっている。「How old are you?」に対して「じゅうに」と日本語で答えた弟思いの彼らが、そのままの純真さで夢を見る大人になれるようにと願っている。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【本当の支援とは】

広島修道大学 人文学部 1 年生

今回ベトナム・カンボジアスタディーツアーに参加して、支援の在り方について考えた。最後のディスカッションの時に、「本当の支援とは何か」について話し合った。その際、私は完璧な支援はどこにもなく、支援する側と支援される側のニーズによって、支援という形が成り立つと考えた。支援する側がいくらその人にとって、その国にとって必要だと思っていても、支援される側が必要としていなかったら、それはただのおせっかいとなるし、最悪の場合、状況が悪くなることも考えられる。ツアーの中でも、カンボジアには校舎より教員が足りてないのに、校舎を日本を初めとする国のボランティアによって次々と建てられているという実態があることを知った。これは、支援する側が、相手の国は今何を必要としているのかを把握していないことから起きる。お互いのニーズを満たすためには、念入りな調査を行ったり、その国の文化や、背景をしっかりと理解することが重要になると思った。その上で、支援という行動は、それによって救われている人がいるという事実がある以上、必要な支援だったと言える。1 つの形の支援では救えきれない人達も、違う形で支援をしたら救われることもあるだろう。多くの施設を見て回ったが、どの理念も、どの支援の在り方もそれぞれ背景を知ったら必要とされている支援を提供していると思った。

支援の在り方の中で、どこまでが支援すべきところで、どこから支援の手を離すべきかという問題があった。ディスカッションする中で、「支援する、される側の両方のメリットがないと続けられない」という意見があり、多くの人たちがこの意見に賛同していたと思う。特に、支援する側のメリットとして、ビジネス的なものをあげているところが多かったが、私はそれに加えて、支援する側は、支援することで精神的な満足感を覚えることなどのメリットもあると感じた。心理学の報酬実験では、自分のした行動に対して、金銭的な報酬があることによって、本人のやる気が落ちるというものがあった。その研究の中では、逆に、精神的満足感を得ようとする方がやる気が上がるとされていた。私はあらゆる支援は、支援する人々が無意識のうちに精神的満足感を得ようとして行動しているのではないか、と考えていたため、支援がビジネスの中で成り立つようになると、支援する人達の意欲が削がれてしまう可能性があると考えた。もちろん、金銭的な報酬によってやる気を出す人もいると思うため、一概には言えないが、ホスピタリティーが重要となる支援では、支援者の精神的満足感をより満たそうとする方が成り立ちやすいのではないかと考えた。今回のツアーで言えば、スイジョウの理念は、支援というよりビジネス的な在り方を大切にしていた一方、CHA ではビジネスより支援という考えを押し出していた。ビジネスでは金銭的な報酬、支援では精神的な満足感という報酬がそれぞれ得られるということだと関連付けて思った。

私がスタディーツアーを終えて、心の底から感じたことが 1 つある。それはそれぞれの国はそれぞれの美しさがあり、その美しさは、やはり時代の流れと国の発展と共に失ってしまうのだろう。支援の在り方に賛否はあるが、どんな形であれ、それぞれの国の良さを失わさせず、それぞれの国に合った支援をして欲しいと切に思った。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【ポル＝ポトの目指していたものとは】

同志社大学　経済学部　1 年生

私が今回、高校時代に世界史で学んだベトナム戦争とカンボジア内戦について詳しく知りたいと思い、このツアーに参加した。ツアーに参加する以前の私はポル＝ポトについて自身に反抗する危険性のある知識層を殺戮した原子共産主義であり、サイコパスの類だと思っていた。しかし本ツアーを通じてポル＝ポトについて新たな側面を知ったので以下に報告したい。

今回見学したカンボジア内戦に関する研修先として、トゥールスレン収容所、キリングフィールド、アキラー地雷博物館を見学した。トゥールスレンでは、処刑される前に撮影された写真に大人でだけでなく子供の写真が多数あり、クメール・ルージュがどれほどの国民を惨殺したかということを改めて思い知った。キリングフィールドでは犠牲者の遺骨を実際に目にして哀悼の意を捧げると共に、原子共産主義を唱え、知識層、富裕層の粛清を唱えながらもヘン＝サムリン政権樹立後は国の象徴たるシハヌーク国王と協力して抵抗をつづけたポル＝ポトの一貫性の無さを感じた。そしてポル＝ポトは誰のための政治をしたかったのかを疑問に思った。しかし、アキラー地雷博物館を訪れて私のポル＝ポトへのイメージは激変し、その疑問に対して自分なりの答えを見つけることができた。アキラーさんは 5 歳の時に両親を殺され、10 歳からは少年兵としてポル＝ポト軍に従軍したということを伺った。実際ポル＝ポトに会ったことがあるアキラーさんへ「ポル＝ポトはどんな人でしたか？」という質問があったとき、私は如何にポル＝ポトが残虐で非人道的であったかを語るものだと思っていた。しかしアキラーさんが語ったのは、実際会ったポル＝ポトは優しかったこと、ポル＝ポトは 6 割が善い人で 4 割が悪い人だということだった。この言葉に私は衝撃を受けた。

当時のカンボジアは、ベトナム戦争によって東南アジアに共産主義が台頭することを恐れたアメリカによるロン＝ノル政権樹立により、ベトコンへの補給ルートを断つためにカンボジアへの大規模な爆撃が許可され、農業は大きな被害を被った。唯一の生命線であった農業を失ったカンボジアには、当時 800 万人の人口を養えるような力は無かっただろう。ポル＝ポトはカンボジア人が自給自足の暮らしを続けていくためには人口を減らすことが必要だと感じていたのではないだろうか。確かに資本主義社会によって人類は発展してきたが、それと同時に生まれた格差と競争によって大きな犠牲が生まれたのは事実である。平等な農村社会の樹立ができれば、人々は争うこともなく、安定した生活を送ることができるのではないかという考えはある程度の合理性があるとも言える。そういう意味ではヒトラーやスターリンと同様に、ポル＝ポトも彼なりの理想とする社会があったのだと理解することができた。

今回のツアーによって、世界で起こっている様々な事象を見るとき、その国だけの背景

を見るのではなく、他の国との関係にもっと注目しなければならないと感じた。これは当たり前のことのように思えるかもしれないが、カンボジア内戦についてもアメリカ、ロシア、中国と想像以上に各国の関係が影響していることを知った。これからはニュースを見たときもっと自分の持っている海外の情勢についての知識を繋げて考えていこうと思う。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【Experience is what the life is all about】

関西大学　外国語学部　3 年生

Experience is what the life is all about。 経験が人生のすべてである。世界は自分が思っているよりずっと広く、深く、様々な人と出会い、様々なことを知ることで自分の人生は豊かになる。この JAPF のツアーも、新しい発見、出会いを求めて参加した。そして私は想像以上の喜びと苦しみにあふれたとても濃密な 12 日間を過ごした。

ベトナム戦争やポルポト政権に関する学習。教科書に書かれた歴史をとびこえて、悲惨な歴史を五感で学び、そこに生きた一人一人の人生に思いをはせた。しかし、そこで働いていた若者の気持ちや、ポルポトという人物像など、吸収した情報の中には、私の価値観では消化しきれないものもあった。JICA では篠原さんという方のお話を聞いた。国際支援に見え隠れする国家の戦略、ビジネスの側面に初めて気づいた。ああ、こういう人には一生勝てないと思うほどの膨大な知識量と頭の回転の速さに衝撃を受けた。その他にもたくさんの研修先を訪れた中で私の心に強く残ったのは孤児院だ。

目が合ったらにこっとしてくれて、一人の子がいればその子を輪の中に入れてあげる。ご飯をもらうときはきちんと列に並び、遊ばず食事をしたら自分たちで食器を洗う。そこにいたのは想像の何十倍も人懐っこく、自立した大人な子どもたちだった。汗びっちょりになっても、つないだ手を放さずずっとじゃれてきてくれた。しかし、お別れの時になると、涙ひとつ流さず、バイバイと手を振ってくれた。この子たちにとっては、こういう別れは日常茶飯事なのかと想像させた。バイバイといった後も出口までぴったりとひっついてくる姿に、本当は寂しいんだろうに、それを出さない大人さに胸が痛くなった。子どもらしく素直に甘えさせてあげたいと思った。泣きわめいて駄々をこねれば抱き上げてくれる、寂しい時は気が済むまでそばにいてくれる、死ぬまで自分のことを一番に考えてくれる“親”という存在がいることがどれほど恵まれているのかを知った。私がこの子たちにその“無償の愛”を与えてあげられたらと悔しさで涙が止まらなかった。私たちのほうがもらったものが大きいのに、子たちは日本語でありがとうといってくれた。そして、英語で See you again と言ってくれた。次に会える保証のないその言葉はあまりに儚いものだった。

考えてみれば、経験は人生のすべてだと気づけたのは、そう思わせてくれる経験ができる環境があったからだった。興味のあることをやらせてくれて、いつでも応援しながら待っていてくれる家族がいたからだった。世界を知れば知るほど、世界にはまだまだ知らないことがあると思い知らされ、自分の小ささ、未熟さを痛感する。しかし、そんな悩みを持てるのはとても贅沢なのだ。Sui-Joh の浅野さんがこんなことをおっしゃった。“お金は後から稼げる。でも経験は後からは変えない。学生の今だからこそ聞けることがたくさんある。”今、こうして学べる状況があり、応援してくれる家族、一緒に学んでくれる仲間が

いることに感謝し、学んだものとしての責任を背負い、これからも様々なことを学び、伝え、考え続けなければいけない。このツアーの経験は私の中で間違いなく大きな財産となったし、新たな経験への扉にもなった。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【ツアーで学んだこと】

島根県立大学　総合政策学部　4 年生

12 日間のツアーを通し多くのことを感じ、学び、充実した時間を過ごすことができた。まず、現地の状況や歴史について身をもって知った。私はこのツアーに参加するまでは、ポルポトの歴史について知識が浅く、ありがちな「発展途上」というイメージしかもっていなかった。ベトナムの戦争証跡博物館、クチトンネル、カンボジアのトゥールスレン収容所、キリングフィールド、地雷博物館といった場所で、ベトナム戦争やカンボジアの内戦について学び、衝撃的な内容も多くを受けた。日本にいると、戦争のことについて考える機会も少なく、無関心になってしまっていた自分が恥ずかしいと思った。外国の戦争の歴史について学ぶことで、自分の生まれ育った国についてもっと知り、考えるべきだと思うことができた。また、ポルポト時代は昔の話というイメージを勝手に持っていたが、最近の出来事であり、さまざまな研修先で話を聞かせていただいていると、「ポルポト時代の影響」で起きている問題が多いと感じた。たとえば、現在のカンボジアの教員不足や教育のレベルの問題などは知識のある人が処分されたことが影響していた。

また、農村の浄化かれていない水やごみ山で散乱したごみに群がる人々と都心部での交通量や建設途中の高層ビルなど、格差を感じた。日本にいると、たいていの人は学校に行き、家で生活しているため、ほとんど感じたことはなかったため、ショックを受けたと同時に、現地で必要とされている支援をしていくべきだと考えた。最後のディスカッションにテーマ「本当の支援とは」で考えた持続可能、一方的、双方向に利益を得られる支援が求められているのかと考えた。

このツアーでは、参加者から学ぶことも多かった。学部や学科、年齢も違う人たちと毎日ディスカッションを通して、いろんな角度からの意見や知識などを共有した。私は、国際系についてあまり詳しくなかったため、毎回いろんなことを教えてもらえ、勉強になった。みんなが課題に取り組む真剣な姿勢を見て刺激を受け、これからも頑張ろうと思えた。

私は、現在大学 4 年で来年から就職するが、就職してからもこの経験を活かしていきたい。いろんな場所に行き、その場所に行かないとわからないことや感じられないことをもっと体験したい。また、そこで学んだことを伝えていけるような人でありたい。常に学びの姿勢を持った人間でいられるよう、これからも努力していきたい。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【研修を終えて】

京都教育大学　教育学部　2 年生

私はこの 12 日間の研修を終えて、自分の中身がないことに痛感した。毎晩夜遅くまで行ったディスカッションで感じたのだ。“ごみ山をこの先どうするべきなのか”“起業してください”という問いに私は自分の意見をすぐに出せない。これはこのツアーに参加する以前から、自分の意見があるのかないのか分からないし、その状態で外に発信することが難しく感じていた。この自分の弱いところをこのツアーで赤裸々にされた。自分とみんなを比べるのは嫌いだが、みんなはひとつの課題に対して的確に素早く自分の意見を述べていた。それらの意見に私は確かにそうだと思い、自分の意見を持つ前に、他人の意見が自分の意見になる。これが私のいいところなのか悪いところなのかは取りようだが、何かの課題や問題に対して、自分の意見を明確に持つ大切さを学ぶことが出来た。

私史上、一番濃い 12 日間だった。毎日異なる研修先に訪れ、今まで学んだことのない、関わったことのない世界に足を踏み入れる感覚が続いた。カンボジアのために、カンボジアのすばらしさをみんなに知らせるために、カンボジアという国で多くの日本人が働いていた。その中で、Sui-Joh の社長さんの話が印象に残っている。その理由は３つある。一つ目として、説明してくださるときに使っていたスライドの作り方が好きだなと感じた。カンボジアの基本情報を言うときには、“カンボジアの自己紹介”と記していたのが例としてある。二つ目は、“カンボジアは貧困に依存している“、”マスメディアはカンボジアは不幸でかわいそうだのようにドラマティックに脚色している“などの言葉のインパクトだ。私たちは受け身だから、このような違った角度からの捉え方になかなか気づかない。しかし、Sui-Joh はこれに気づいて、その上ハッピーに発信しようと繋げて成り立っている。何事も捉え方によって次の行動を変えることが出来ると思った。また、行動し続け、ひとまずやってみると、行動している人と繋がれ、ポジティブな会話が生まれ、失敗してもそれは経験になる、がんばっていれば必ず良いことがある、やりたいと思ったらやるべき！という流れが好きだ。観光省に訪れた際に、学生が通訳する姿を見た。そのインパクトが想像以上で使える英語を身に付けたいとその時に強く思った。それからこの話を聞いたため、留学にも興味がわいたし、自分で英語を学ぼうと思えた。Sui-Joh の船、船があれば世界中どこへでも行けるという言葉も好きで、家に飾っている Sui-Joh のポーチを見るたび、なんとなく落ち着く感覚になる。これから何かやりたいと思ったら、Sui-Joh で聞いた話を思い出して、ポジティブに頑張りたい。

家に帰ってきてから、研修で学んだことを写真を見せながら話をした。トゥールスレン収容所やキリングフィールド、枯葉剤の話をすると、私たちと同じ、心が苦しい気持ちになっていた。カンボジアに行ったことのない妹は、やはり貧しいやかわいそうというイメージがあったみたいだった。しかし、孤児院の子どもの姿、カンボジアで生活している人

の姿を見せると、「心があったかい顔してるな」とつぶやいていた。私はこの言葉を聞いた時、私たちが 12 日間学んで一番強く感じたことを行ってない人にも感じさせることが出来て、本当にうれしかった。行って良かったと思った。

過去のつらい事実、今ある現実を肌で感じることができたからこそ、ベトナム、カンボジアという国の本当のすばらしさに気づくことが出来たように思う。もう一度行きたい国だ。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【日本で考えたこと】

同志社大学　商学部　1 年生

カンボジアは、貧しく、疫病が蔓延し、地雷での被害者が多いというイメージだった。また、ポルポト政権について学んできたつもりだったが、その時代が現在にこれほどまでに影響を及ぼしていることは知らなかった。このツアーで、カンボジアの歴史を多く学び、それに関係する企業や団体に訪問させてきただき、カンボジアについてよく学ぶことができたと思う。しかし、このツアーで最も学んだことは、日本人が想像しているようなカンボジアは、カンボジアではないということだ。ポルポトの傷を抱えながらも、温かく、幸せそうに毎日を送っているカンボジア人が多くいる。そこに、日本が考える貧困らしさというものは微塵にも感じられない。貧困をイメージづけることで支援をより多く受けることができるのかもしれない。だけどそれはもったいないと思った。貧困のイメージのないカンボジアを認知してもらえるにはどうしたらいいのだろうかと考える必要があると思う。

私はこのツアーに参加自分の甘さを痛感した。それと同時に、勉強できていることが幸せといっていた教師や両親の言葉をやっと理解できたと思う。

カンボジアはポルポト時代の影響で子どもたちだけではなく、大人たちにも教育が行き届いていないということを学んだ。また、学べる環境が整っている場合でも経済的な理由等から学校にいけない子どもが多く、中退者も多いと聞いた。それでも、働きながら学校に通ったり、独学で日本語や英語の勉強をしたり。みんな、日本企業で働きたい、ホテルに就職したいなど、夢を持って必死で学んでいるように見えた。そこで、自分について振り返ってみた。なぜ大学に通い、スタディーツアーに参加したのか。決まった夢もなく、両親がお金を工面してくれている。この夏休み、何を勉強してきたか。バイトをしてるといえど、それは自分の娯楽のため。考えれば考えるほど、自分はいかに恵まれた環境で暮らし、自分の甘さに気づかされる。もし、教育を受けることができない子はまずいない、また、インターネットが普及し、自分の力で学校では教えてくれないことも学べる。そんな環境にカンボジアの子どもたちと私が置かれた場合、どちらのほうがより吸収し、成長できるのか。答えは一目瞭然である。

このツアーで、いろいろな人の考えや経験に触れることができた。考えの裏には膨大な知識があって、それを掛け合わせながら発言しているのが分かった。今の私には知識がない。しかし、考えることが出来るだけじゃいけない、しっかりと知識を使わなければならないと感じた。そこでこれからは、私が学びたいこと、考えてみたいこと、めんどくさがらずに時間を言い訳にせずに全部やってみようと思う。このツアーでの経験を活かし、どう行動するのかしっかりと考えていきたい。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【出会いとかかわりから生まれるもの】

名古屋市立大学　経済学部　1 年生

今回のツアーでは、現地の空気に直に触れ実際の施設や現物を見ることで、インターネットや文献上では得られないものを多く学んだが、一番刺激を受けたのはともに過ごした仲間や現地の人々とのかかわりからであったように思う。

初めに、研修先での意見交換やグループディスカッションを通して、発信することの重要性と、多様な価値観に触れることの面白さを感じた。メンバーと話す中で、全国各地の様々な大学・学科からということもあってか、多様な視座からの意見に触れられた。大学でそれぞれ異なる専門を学んでいるからこそ、一つの同じ事柄を見ても重要視する問題点が異なっていて、中には自分の全く思い至らなかったものもあり、大いに刺激を受けた。また同様に、自分の意見も他者にとっては新鮮なものであることもあり、それを発信することで、議論を進めさらに自分の考えを深められる楽しさを体感した。発信することで初めて自分がどの視点から物事を見ているのかがわかり、他者とも互いに影響しあえることを学んだ。

次に、現地の人々やツアーガイドの方と接し、人に対する前向きで温かい接し方と、日々の生き方に強く魅力を感じた。レストラン等接客の場面だけに限らず、道ですれ違う人、お話を伺いに行った施設の方々、孤児院・農村の子どもたち、性別年齢を問わず、一様に笑顔が魅力的でエネルギーを、心の豊かさを感じた。これが望ましいことなのかはわからないが、日本ほどモノに溢れているわけではなく、様々な行動が生活に直結しているからこそ、慈悲深く寛容で、日々を活き活きと過ごしていて輝かしく感じるのかと思わされた。また、現地の大学や孤児院、農村での交流で、その勤勉さと能力習得の速さは目を見張り、はるかに潤沢した機会を得ることができる状況下にいるにもかかわらず、それを無駄にして惰性に過ごしていた自分を恥じた。私は長期的・計画的に物事を進めていくことが多く、それ故に現在を蔑ろにしすぎたり、自己を存分に表現できなかったりするが、一日一日を大切に生きることの魅力を大いに感じた。

ツアー期間中、様々な社会課題や途上国と先進国の関係について考えたが、私が支援や世界の不平等是正に向けて重要視すべきだと感じたのは、何より‘コミュニケーション’を多くの人ととること、である。一人として同じであることのない、それぞれの背景を持つ人と人とが対話することで、自分の視座を確立することができ、異文化の理解とエスノセントリズムからの脱却、自立と地球規模の機会均等に向けた臨床的な支援も可能になる。12 日間のツアーで、そう信じることができた。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【ツアーに参加して学んだこと】

島根県立大学　総合政策学部　4 年生

私がこのスタディーツアーに参加した理由は、ベトナムやカンボジアといった東南アジアの現状を自分の目で確かめて、様々な角度から自分の知らなかったことを学んで吸収したいと思ったからである。このスタディーツアーでは、今まで教科書や映像でしか学べなかったことを肌で感じたり、毎日ディスカッションをし、いろんな人の意見を聞いて刺激し合ったりした。このことで物事を一つの方面から考えるのではなくて柔軟に多面的に物事を考えることの大切さを学んだ。特に私がこのツアーで感じたこと・考えたことを３つにまとめる。

まず一つは「支援」についてである。私は、支援とは弱者に対して「助ける」という考えからできるものであると考えていた。しかしそれは違った。一方的に、こうしてあげたい！こうしたら喜んでもらえる！といった主観的な考え方ではいけない。なぜなら、自己満足で終わって長続きしないからである。育った環境も価値観も文化・歴史が違うことを理解して、相手に押し付ける支援にならないことが大切である。私たちにとっての「当たり前」は世界共通ではない。だから、まずは相手を知ることが重要だと学んだ。お互いのニーズが一致していて、尚且つ多双方向からの満足が得られる支援がこれから必要だ。その双方向の行き先が多ければ多いほど、利益の享受者が増えて社会全体で支え合うことができる。世界はフェアでなければならない。支援を通して、長期的にお互いが HAPPY になれることが、一番目指すべき支援の目標であると学んだ。

次に「マスメディアとどう向き合うのか」についてである。私がツアー前、カンボジアについて思っていたのは、「地雷」「子供の貧困」「貧しい」というマイナスイメージである。しかし、現地に行き、子供たちのキラキラとした笑顔や、住民たちがいつでも微笑んでくれ、生き生きとしている姿を目の当たりにしたことで、カンボジアで暮らしている人々は果たして貧しいのだろうか、と感じた。そこで暮らす人々が本当に貧しいと思っているかどうかは私たちにはわからない。最低限の生活であっても笑い合って助け合う現地の人々を見て精神的豊かさを実感した。「幸せ」や「豊かさ」の指標は人それぞれであって、自分たちで押し付け判断するものではない。私たちは、マスメディアによって途上国がドラマティックに仕立て上げられて、ちゃんと知る前から「貧しそう」「危険」などという印象を持ってしまいがちである。マスメディアは事実を伝えるべきだが、それが偏ってしまったり、印象操作をしてしまったりすることがある。それを、判断するためにも現地に足を運ぶことや、柔軟に考える力が必要だと感じた。そして、そのようなマイナスなイメージを改善することが大切だ。これは日本も同様である。日本では、少子高齢社会など様々な問題を抱えている。その社会問題に対して、メディアの意見を鵜呑みにするのではなく、違った視点から物事を捉えたり、テレビや新聞では伝えられていないが、ソーシャルネット

ワークで発信される少数派意見等を大切にしたりする、メディアリテラシーの力が必要であると私は考える。

最後は、「私が感じたカンボジアの課題」についてである。カンボジアでは、地雷の被害にあった人に対して差別があったり、冷ややかな目で見られていたりするというお話を聞いた。そのような差別をなくすためにも、なぜ地雷があって、何が起こっていたのか？といった歴史を知る必要がある。今、ポルポトの歴史は教育で教えられていない。しかし、負の歴史を学ぶことは将来のカンボジアにとって必要である。同じ民族が派閥の違いで敵対し合うことが、いかに生産性がなく愚かであったのか、歴史は変えることはできないけれども、同じ過ちを繰り返さない教訓になると私は考える。国内に被害者と加害者が存在しているという特殊な環境であることが一番難しい点だが、将来的に見たときに後世にポルポトの歴史を伝えることの方がメリットは大きい。

ベトナムやカンボジアで過ごした 12 日間は、とても有意義で濃い学びができた日々だった。私は来年から社会人になるが、今回のツアーで学んだことは大きな自分の財産となって、これからにいきていくだろう。また、この学んだことを家族や友人など次の人に繋ぎ、それがベトナムやカンボジアを知って興味を持ってもらうきっかけになって欲しい。そして、いろんな世界を知りたい！という好奇心はこれからも自分の中で大切にしていきたい。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【観光学からみたカンボジア】

獨協大学　外国語学部　１年生

私が今回のツアーを通して特に関心を持ったことは、カンボジアのツーリズムの現状と観光政策についてだ。カンボジアは「発展途上である」ことにより、観光産業による発展の可能性を多く秘めた国である。筆者が本文を通じて述べたい事は３つある。

１つ目は現在の観光大国カンボジアを生んだツーリズムの現状だ。カンボジアの現在の観光産業は、主にダークツーリズムとボランティアツーリズムに支えられているといえる。我々はツアーの中でトゥールスレン収容所やキリングフィールド、孤児院を訪れたが、すべての場所で世界中から訪れる観光客の姿が見られた[1]。これは「負の遺産」があり、「貧困」の国家イメージがあるからこそ成り立つツーリズムであると言える。

その一方で、現在カンボジアではゴルフ場建設やリゾート開発が進められている。「発展途上である」ということはマイナスイメージを持つ。しかし、それと同時に「発展の過程にある」ことでカンボジアでは、先進国にはない急速に発展するパワーを垣間見ることができるのだ。カンボジアはこの一見対立する２つのイメージを上手く観光資源化している。

２つ目はカンボジアの観光政策についてだ。まず、観光省ではアンコール遺跡群の第３回路にて、安全上・景観上の理由から一度に１００人までと入場制限を設けている。これは遺跡をそのままの形でより長く利用するための重要な政策である。次にレストランやホテルではヨーロッパ人・南米人・アジア人など観光客を文化によって部類分けし、店ごとにターゲットを絞っている。実際我々が宿泊したホテルでは、ほとんどが日本人か中国人のみであった。ホテルの説明書きに日本語と中国語が記載されていることも多くあった上、いくつかの場所では日本の電圧でコンセントを利用できるようになっていた。特定の地域の観光客に特化することで、観光客がより快適に旅を楽しむことができるようになっている。またそれは、観光客が他の観光客の「異文化感」から逃れ「カンボジアの異文化感」のみに浸かる上でも重要な観光政策である。

上記の２項目では、カンボジアの観光の現状と、観光政策について述べた。最後に、観光は一般市民である我々の行動によって起こされる。すなわち最も国家間の政治的背景に左右されずに資本を動かす産業の一つであるのだ。これは「観光」と「経済発展」の密接な関わりを意味する。観光は、今まさに経済発展をする、先進国にはない観光資源を持った第三世界の国々にとって、可能性を秘めた産業分野である。筆者は、今後カンボジアをはじめとする沢山の発展途上国が、観光により更なる発展を遂げることを願ってやまない。

---

[1] この場合、トゥールスレン収容所・キリングフィールド訪問はダークツーリズム、孤児院訪問はボランティアツーリズムに部類分けしたものとする。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【個性のサラダボウルに混ざった 12 日間】

岩手大学　人文社会科学部　1 年生

JAPF は私にとって初めての海外体験だったが、初めての海外体験がこのツアーで本当に良かったと思う。様々な不安を抱えて参加したが、いざ始まってみると濃密な 12 日間はあっという間に終わってしまった。学んだことや感じた思いは数えきれないが、今回はその中でも特に印象的な 2 つのことに焦点を当てる。

1 つ目は、自分の「知識」が「経験」になる感動を味わったことだ。カンボジアの貧困や、社会問題や、内戦のことは事前学習である程度調べ、本も読んで勉強したつもりだった。それを通じて私がカンボジアに抱いていたイメージは「可哀想」や「後進国」といったマイナスのイメージだった。しかし、文字や絵でみたカンボジアと、自分の目で見るカンボジアは全く違っていた。例えば、カンボジアには貧困が全くないわけでは無いけれど、だからといって不幸なわけではなかった。カンボジア内戦は日本人が思う以上にシリアスで、現代の社会問題に深く関係していた。カンボジアの人たちは目が合うと微笑んでくれて、とても暖かかった。カンボジアは「可哀想」な国ではなかった。私のペラペラな知識はこのような圧倒的な情報量で上書きされ、経験として深く記憶に刻まれた。「現地に行かなければわからないことがある」という言葉は真実だと思ったし、実際に見て、聞いて感じた思いこそが自分だけの武器になるとも感じた。

2 つ目は、様々な人との出会いがあったことだ。日本全国から学部も学年も性別も違うメンバーが集まり、自分にはなかった考えをくれた。同じ施設を見ても、その人の育った環境や、専攻している学問によって目の付け所は全く違う。学部も学年もバラバラなメンバーが意見をぶつけ合った毎日のディスカッションは、私にとってこのツアーで最も価値ある時間のひとつだった。ベトナムでもカンボジアでも、自分が知らなかった事実を沢山見て、聞いた。その衝撃をこんなにも多様なメンバーと共有して考えることができて本当によかった。

このツアーの 1 番の財産は、小さな大学の中では知ることができなかった、広い広い世界を知ることができたことだ。自分の考えを言葉にして、わかりやすく相手に伝えることができる人。飛び抜けた発想力と発信力で、人を引きつけることができる人。自分の専門分野に関して強い熱意を持っている人。コミュニケーション能力が高い人。そんな人が同年代に沢山いることを知って、自分の言動や行動がそれに及ばないことがとても悔しくて、全部吸収しようと躍起になった。毎日自分の脳みそをフル回転させている日々は熱狂的で、とても楽しかった。1 年生の時点でこの世界を知ったことで、これからの私は大きく成長出来ると思う。自分の目標に向かって迷いなく走っていくことができる力をくれたこの 12 日間と、一緒に過ごしたメンバーに心の底から感謝。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【風に立つライオン】

京都女子大学　発達教育学部　3 年生

私が国際協力に興味を持った原点は、1 本の映画である。その映画のタイトルは“風に立つライオン”である。日本に帰ってきてから、今までの風景や日常が変わって見える。本当の支援とは何か、自分にできることは何だろうか。私は風に立つライオンのように、真剣に人生や生きることと向き合えるのだろうか。

ツアー全体を通して教育の重要性を感じた。トゥールスレン収容所やキリングフィールドに行って、なぜこのような状況に至るまで突き進んでしまったのだろうと疑問に感じ、この悲惨な歴史を受け止めきれない自分がいた。人は環境によって変わってしまうものだと思う。自分が正しいと思っていることは正しいとも限らない。教育によって物事の善悪が考えられ、人格が形成されていく。そういった意味でも学校が成す役割は大きいのだなと考えた。ポルポトの時代を学んでいくにつれて彼が極悪人で、その周りにいた幹部は何てひどい人なのだろうと考え始めていた。人は一人では生きてゆけない。社会的な生き物として、ここまで進化してきた。生きるためには共同体、集団に属する必要がある。それ自体は間違いではないし、良いも悪いもないと思う。しかし、国家とか宗教とか思想などといった共同体に属したとき、人は個をなくしかける。自発的なのに自覚がなく人は凶悪犯にまでもなってしまう。歴史を知ること。今の自分自身を自覚すること。後ろめたさを引きずること。自分の加害性を忘れないことが大切なのではないかと考えた。

私は偽善者、意識高い系と揶揄されながらここまできた。そして、自分は恵まれてきて育ってきたから貧しい人たちに何かしたいという思いで動いてきた。しかし、実際に行ってみると与えるよりも与えられているものの方が大きかった。いかに自分が上から目線だったのかを知った。CHA では障害をもった人が自立して生活を送ることができるように支援をしていた。きっとテレビや本でこの施設を知っていたら、かわいそうな人たちでも頑張っているのだなとしか考えなかっただろう。しかし、実際に人対人で関わった時に、家族のような温かさに心が癒された。人の温かさや瞳の美しさ、物がありすぎて見えにくくなっていた目には見えないけど大切なものをたくさんもらった。

本当の支援とは支援する、されるという壁ではなく共に成長していくものだと考える。そして、自分にできることとはどんな環境にいる子にも教育を受けれるような社会をつくること。理想像を明確にして動き出すこと。このスタディーツアーで感じたことは日に日に自分の中で違う形となって生き続けている。もしかすると薄れていくかもしれない。しかし、あの時あの場所で笑いあった時間は決してなくならない。私は無力で風に立つライオンのようにはまだなれない。しかし、考え行動し続けたい。そして“頑張れ”と自分を鼓舞し続けようと思う。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【直に見たベトナムカンボジアの姿】

大阪大学　外国語学部　1 年生

普段の生活では見ることのできない世界を自分の目で直にみたいと思い参加しましたが、実際にその場にたつと想像以上の情報量と新鮮な経験の連続で、毎日とても充実していました。

ベトナムでは、戦争証跡博物館でみたベトナム戦争時の写真が印象的でした。200 万人の犠牲者が出たという数字は知っていましたが、実際に農村の人々が銃を向けられている写真や女性や子供も殺されている写真をみると、一人一人の死が鮮明に思われてこのような死が 200 万人もあったと考えると非現実的に思われて重い出来事だと感じました。

カンボジアでは、トゥールスレン収容所が印象に残りました。ポルポト政権下で知識人が弾圧された時のごうもんしせつだと聞いていましたが、天井に残る血の跡を見て一気に現実味が増しました。また、なくなった人々の写真をみると、若者や子供女性も沢山含まれていてとても辛いなと思いました。ほんの数十年前に近くのくにで沢山の若者が辛いか思いをしながらなくなっていたと考えると今の時代に生きている意味とどのように生きていくべきか改めて考えるべきだと感じました。

農村で子供たちと交流できたことも貴重な経験になりました。子供たちと遊ぶ前に農村の近くの学校でお話を伺うと、105 人が卒業してまだ高校にかよいつづけているこは 35 人だと知りました。私はとても少ないなと感じましたが先生はこんなにたくさんのこが通っていることはとても嬉しく十分幸せなことだとおっしゃっていたのがとても印象に残りました。小学校中学年ぐらいの子達とサッカーをして遊びました。みんなが笑っていて本当に楽しい時間を過ごすことができました。辛い歴史を繰り返さないように尻労学校にかよい教育を受けて、情報を理解するための力をしっかりみにつけてほしいと切実に思いました。これからも笑顔で暮らせるような国であって欲しいです。

今回ツアーに参加したことで、3 つのことを学ぶことができました。

まず、旗からみると貧しい可哀想な生活に見えても現地の人々は其れを当たり前として生活しているため上から目線の支援はとても失礼なのだと感じました。

次に想像以上に戦争や内戦の影響が残っているということです。政治面や経済面や教育面に課題が多くあると知りこれから発展していくなかで日本も本当に必要とされている支援を考えていけたらいいなと思いました。

最後に世界はあわただしく動いているということを実感しました。私も部屋にこもってばかりではなく、世界のニュースに目を向けて自分自身も将来役に立つようなスキルを身に付けたいと感じました。これから先世界中の同年代に遅れをとらないようまた困っているときに助けになれるように大学での学びを大切にしていきたいと感じました。

【支援のあり方】

横浜市立大学　国際総合科学部　2 年生

カンボジアと聞けば、多くの人が貧しい国と考えるだろう。実際に、日本はカンボジアに多額の支援をしているし、政府以外の機関も様々な分野で支援をしている。しかし、その支援に対してあまりよく思っていない日本人がいることは事実だ。国内の問題が山積みなのにどうして外国の援助にそれほどまでの大金をかけるのか。こういった意見を耳にすることは少なくない。そんなカンボジアの現状を自分の目で確かめたいと思い、このスタディーツアーに参加した。12 日間で最も強く感じたこと、それは支援のあり方だ。

まず、カンボジアの現状を知るためには歴史を遡って考える必要がある。およそ 40 年前というそう遠くない過去に悲惨な歴史、ポルポト政権による大虐殺を知っている日本人はどれほどいるのだろうか。私は知っているし、理解しているつもりであった。しかし、この歴史が現代にどれほど影響を与えているのか考えもしなかった。この歴史によってカンボジアは知識階級を失い、今にも続く教員不足や医者不足など多岐にわたる課題の原因になっている。実際にカンボジアで老人を見かけることはほとんどないし、40 歳以上の人には全員その時代の記憶があるということに衝撃を受けた。歴史と今は繋がっている。歴史を知ることと、きちんと今と結びつけて理解することは全く別物なのだ。平和分野、文化分野、医療分野、社会分野、産業分野、教育分野と本当に様々な視点からカンボジアを学んだが、どの分野においてもポルポト政権の歴史が絡んでいた。歴史を学ぶことの意義を改めて感じさせられた経験だった。

このような歴史を抱えている以上、カンボジアは確かに未だ発展途上であるが、これからもっと進歩していく国でもある。私が訪れたプノンペンやシェムリアップは高層ビルがあったり、大型ショッピングモールがあったり、高級車がたくさん走っていたり、一見しただけでは本当にこの国が諸外国から支援を受けているのかわからないほどの都市であった。けれども、農村部では貧しい暮らしをしている人もまだまだ多いし、都市部でももちろんそういう人々は生活している。教育が受けられない子どもがいる。多くの訪問先で、カンボジアは決して貧しい国ではないという言葉を聞いたけれど、経済格差が大きすぎると感じた。様々な課題があるカンボジアは、国内だけで解決するのは難しいから、現段階で日本をはじめとする国々が支援をしているということが分かった。最終日に参加者全員で「支援」について考えた際も、自立というキーワードが何度も言われていたように、カンボジアはまだ自立をしていない。だから支援が必要なのだ。

私は実際にカンボジアに訪れて、現実を見た立場として支援は必要だと思う。しかし、お金だけの支援ではあまりにも投げやりな支援だ。自ら動いて、カンボジアの人々が本当に必要としている支援をすることが最も理想的な支援なのではないだろうか。これは 12 日間を過ごして思ったことである。この学びを日本でももっと深めていきたい。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【カンボジアに対するイメージの押し付け】

北九州市立大学　文学部　2 年生

私は、今回このカンボジアスタディツアーに参加して、イメージや自分の価値観だけで物事を判断することはできない、だから自分の目で見ること、そして何かを感じることの大切さを学んだ。カンボジアに来て過ごした日々は驚きの毎日だった。それは、きっと自分の中にあるカンボジアという国のイメージと違っていたからである。様々な場所に訪れて、いろんな人の話を聞き、今までとは違う考え方や感じ方をすることができた。

私の中のカンボジアのイメージは、貧しい、危ない、怖い、などといったマイナスのイメージしかなかった。実際メディアで取り上げられるカンボジア自体もそのようだった。確かに現実は、様々な問題が山積みである。しかし、彼らはかわいそうではない。このことを研修先の CCH 孤児院に行った際に一番感じた。孤児院にいた子供たちの多くは両親がいなかったり、両親の顔さえ知らなかったり、刑務所に親がいたり、ゴミ山で明日の生活費を稼ぐ子だったりと、様々なバックグラウンドを持っている。しかし、彼らは最高の笑顔をふりまき、私たちに元気を与えてくれた。本当に幸せそうだった。孤児院の門をくぐった瞬間に駆け寄り手を引っ張り、笑顔を見せてくれた彼らのどこがかわいそうなのか。強く生きている子供たちを見て、今まで勝手にかわいそうだというイメージを植え付けていた自分に腹が立った。この孤児院では、子供たちの過去を知ることによって、自分の目で見ることによって、子供たちが強く生きているのに自分の物差しを基準に彼らがかわいそうだとか、豊かではないなどと判断することは出来ないことを学んだ。さらに、イメージとは違った驚いたことは他にもある。都市部の発展度合いの高さだ。日本に負けないくらいの高層ビルやショッピングモール、高級車、高級レストランや立派な学校、教育機関、医療技術・機器のそろった病院があった。私は、こんなものがカンボジアにあるとは思ってなかった。これもイメージで判断していたからだ。確かに貧富の差が問題になっているカンボジアは都市部から少し離れると、最低限度の生活を送れていない人々がいる。これは目を背けてはならない問題である。まだまだ解決しきった問題ではないが、昔よりは改善されてきていることは確かだ。無償化している教育機関があったり、ライフラインの広範囲確保の進展であったり、様々な国から援助を受けながらカンボジアは発展してきている。このことを世界中の人が知るべきで、現状に合わせた支援をして、いつかは独り立ちできるよう見守るべきだと思う。最後に、私はアキラー地雷博物館でのアキラーさんの「ポルポトさんは悪い人ではない」という言葉を聞いて、ポルポトに対するイメージが少し変わった。残虐な行為で人々を苦しめたことは事実だが、ポルポト自身の思いだけで起きた出来事なのではないのかもしれない。一方の見解から歴史を知るだけでは、歴史を学ぶことは出来ないのだと思った。

カンボジアで八日間過ごし、自分がいかに小さな世界で生きてきたかということや、知

識の無さ、自分の価値観の押し付けをしていたかがよく分かった。カンボジアの現状を目で見て様々なことを感じ帰国した今、私がすべきことは、感じただけで終わるのではなく、何か行動することだと思う。このことをしっかり胸に刻み、私にできることをしていければと思う。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【カンボジアと私たち】

同志社大学　経済学部　１年生

私はこのスタディーツアーに参加して、何気ない日常生活を送っているだけでは気付かないようなたくさんの発見をすることができた。私たちはどうしても、自分が生きている世界を基準に物事を考えてしまう。カンボジアの農村やゴミ山などを視察し、グループでディスカッションする中でそのことがはっきりと分かった。日本ではあたりまえのことがカンボジアではあたりまえでない。

そう考えるきっかけとなった理由の一つ目は、道路が舗装されていなくてぬかるんでいたり、トイレットペーパーは流してはいけなかったり、インフラが整っておらず、衛生状態が良いとは言えないことだ。そんな中を靴を履かずに歩くと、小さな傷口からも菌が入って大事に至ることもあるという。一番衝撃を受けたのはゴミ山で生活をしている人たちがいたことだ。そこに住んでいる人たちにとってそれはあたりまえかもしれない。ゴミの山は住む場所でないと考えるのは恵まれた日本人の考えることであり、また日本人が恵まれているというのも自分の周りのことしか知らない自分の身勝手な思い込みで、日本にも同様とまでは言わなくても似たような生活をしている人がいるのかもしれないということを考えると、普段考えていることは物事のほんの一部分しか見えていないと思った。
医療の面では、私たち日本人の多くは近くに病院があり保険も適用され、清潔で安全な医療を受けられるのがあたりまえになっている。しかしカンボジアではポルポト政権時代の大量虐殺で医者は知識層として殺されたため、十分な経験を積んだ医者が不足している。Sunrise Japan Hospital で、医者の数は日本と比べて 10 分の 1、看護師は日本の 5 分の 1 しかいないと聞いたとき衝撃を受けた。それには他国からの治療の支援だけでは解決にならず、根本的な解決には自国で医療をまかなうためのこれからの医者の育成が課題であると感じた。

また最後に、自身が埋めた地雷の撤去をしているアキラーさんに話をきく機会があった。アキラーさんは 5 歳のときからポルポト兵として育てられた。そして言われるがままに地雷を埋めたり戦ったりする。「自分が少年兵だったころどんな気持ちでしたか？」と質問すると、予想はしていたが「何もわからず楽しかったです。夜はショットガンが光ってきれいだし、軍服を着たらかっこよく見えます。」と話してくれた。そして「その当時はそうしないとご飯が食べられません。軍隊にいることが一番良かったです。」とも話してくれた。当時のアキラーさんたちにとっては軍隊で働くことがあたりまえであり、ここで私たちのあたりまえとアキラーさんはじめ当時のポルポト兵たちのあたりまえは全然違うのだとわかった。しかしそもそも、カンボジアに限ったことではないが、何もわからない幼い少年たちを戦争に使うことは決して許されることではないと思う。

今回のツアーで見つけた課題を、何とかしようと思うのは難しいことかもしれない。し

かし色々なところに存在する自分とは違ったあたりまえを受け入れていくことを学んだ。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【当たり前とは何か】

大分大学 工学部 4 年生

今回このツアーに参加して、 学んだことは大きく分けて 3 つある。 1 つ目は人に自分の意見を伝えることの難しさである。 研修先での質問やメンバーとのシェア会などこの研修は自分の意見を発信する機会が多くあった。 特にツアーの初めの方のシェア会ではメンバーに伝えたいことが多すぎて頭の中で考えがまとまらないまま意見を言ってしまい相手にもうまく伝わらないことが多々あった。 しかしシェア会を通じて相手の発表や伝え方を見ていくにつれて、 少しずつではあるが自分の意見の伝え方が分かるようになった。

2 つ目は失敗することの大切さである。 Sui-Jho の浅野さんから「失敗は人生のネタになる」と言われたことが自分の中でとても突き刺さった言葉である。 浅野さんは必ずしも順風満帆な人生を送っているわけでは無かったけれども、 話の内容や話すとき態度全てにおいて自信に満ち溢れていた。 実際に失敗が怖くないのかと質問したら、 浅野さんは失敗をとてもポジティブに捉えておりだからこそ前向きに行動できるし、 自然と自信もついてくるのだと思った。 また、 その日の夜のシェア会でメンバーにも失敗をすることが怖くないのかと聞くと、「失敗をするのは怖いがそれよりも失敗を恐れて行動しない方が嫌だ」という意見をもらった。この意見も踏まえて、失敗することが怖いものではなく、行動しないことが怖いものなのだと感じるようになった。

3 つ目はタイトルにもあるが、 当たり前のことが当たり前ではないということである。近年のカンボジアは観光客も増えてきてカンボジアの富裕層は日本の富裕層よりも資産を持っている。 しかし地方に目を向けてみると下水設備が整っていなかったり、 電気が普及されていなかったり、 子供たちは裸足で自転車をこいだり、 ゴミ山周辺を歩いていたり子供は学校に通うのも一苦労で中には教育費が払えずに学校へ行かず、 家の手伝いをしている子供たちもたくさんいて必ずしも満足できるような環境では無かった。 日本では富裕層でなくても一般的な教育は受けられ、 下水設備は整っており、 電気は身近にあふれている。 日本では当たり前のことがカンボジアでは当たり前ではない。 これは他の発展途上国にも言えることであり、 逆を言えば日本に住んでいる私たちはとても恵まれていると思う。 だからといってカンボジアの人たちが不幸なのかといったそれは全くの間違いであり、 私はむしろカンボジアの人の方が幸せそうにみえた。 子供たちはみんな笑顔がキラキラしていて町を歩けば町の人たちは目が合うと微笑んでくれる。 お店の距離も近くて店員同士で話をしたり、 警察官でさえ町の人と一緒に楽しそうに話している。日本ではじっと顔を見るだけで変人扱いされたり、 他人との距離がとても遠いと思う。この距離感もカンボジアに行く前までは当たり前と思っていたことだった。 カンボジアに行って良い面でも悪い面でも自分の当たり前について考えさせられた。

日本に帰ってからは、 当たり前の日々を当たり前のように過ごすのではなくこのカンボジアでの経験を最大限生かして学生生活を送っていきたい。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【物事を正しく見ること】

金沢大学　医薬保健学域　2 年生

私はこのツアーに参加するまでカンボジアという国に対して、アンコールワットがあって貧しい発展途上国というイメージをもっていた。おそらく日本のテレビ番組や街中で、NGO や様々な団体によって「カンボジアに小学校を建てよう」「病院をつくろう」という活動が繰り広げられているのをよく目にするからであろう。そのような支援の必要な国というイメージを持ったまま現地に到着し、バスの中からプノンペンの街の様子を観察していると高層ビルが建ち並び､東京よりも多いのではないかと思うほどの高級車が走っていた。人々も活気づいていて第一印象は貧困を肌で感じるものではなかった。街の中を歩いてみたり中心部から離れると、インフラが整備されていない、人々が汚れた服を着ているといった多くの人がイメージするカンボジアがみえてきたが彼らが貧困の中にいてかわいそうな、不幸な生活を送っているようには決して見えなかった。私たちは、日常の中から得られる限られた情報だけをもとに物事をイメージして、そしてそのイメージだけで貧困は幸せでない、豊かではないと思ってきたのだなと感じた。カンボジアに対しては、世界中の国や個人が支援をしていてそれによって自国だけでは完全にカバーすることの難しい教育や医療を支えることができている。しかし､Sui-Joh の浅野さんのお話の中で国自体が「貧困に依存してしまっている」とおっしゃっていて､「貧しい」という事実をフォーカスすることでさらに支援を得たいと考える人々も存在すると知った。そのような考えは、いつまでも支援を受け続けることにつながるため正しいことではない。また、支援をする側もどのような支援が求められているのか、その支援をすることで人々にとってどんなメリットがあるのかを可視化していくことが重要であり、実際に現地の現状を自分の目で確かめることがいかに大切かを学んだ。ただ、全員がカンボジアを訪れるわけにはいかないのが現状であるため、見た人は発信をしてそれを受け取る側はアンテナを張っていることが必要だと思う。もし、カンボジアに限らず発展途上国の支援に興味があるような全員が同じ意識を持つことができたのなら、現地にとって最適な支援を行うことができ双方にとってのメリットも大きいのだろうと考える。

今回の１カ国ツアーは、毎日数か所の研修先を訪れ、感想共有やディスカッションも積極的に行うようなプログラムが組まれていた。普段の大学生活でなかなか交流することのない様々な学部の学生と意見交換したのは非常に新鮮だった。同じ研修先に行ったのにもかかわらず、全く違う視点からの感想や質問があり、物事を多角的にとらえることの大切さを痛感した。これから自分の将来の夢をかなえるために残りの学生生活で専門の学びを深めていくのはもちろんだが、世界のこと、他分野のことにも広く目を向けできるだけ自分で確かめていきたいと強く思う。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【教育＝インフラ】

岡山大学　教育学部　3 年生

私は、2019 年夏季のカンボジアスタディツアーに参加して、「教育」について特にしっかりと考える事が出来た。その中で私が考えた事は、「教育はインフラだ」ということだ。インフラと聞くと、道路・鉄道・電線網などを連想する人が多いだろう。インフラの定義は、「生活や産業などの経済活動を営む上で必要不可欠な社会基盤」だ。研修中２つのタイミングでこのように感じた。

1 点目は、バイヨン中学校を訪れた時だ。バイヨン中学校では、就学率の向上に向けて様々な工夫を凝らしており、徐々に成果が出ているという状況だっだ。しかし、カンボジア全体で考えると、カンボジア王国は、９年間の義務教育を受けることが憲法に規定されているが、２０１１年の就学率は小学校で約６９％、中学校に至っては約１７％と極端に低くなっているのが現状である。就学率の低さがもたらすこととして以下の事が考えられる。それは、就学率が向上し、大学へ進学する人が増えなければ、教師や医師などの高度な知識を必要とする職業の人が増えず、学校・病院・産業などは成長しないということが考えられる。教育を受けずに大人になったとしても、知識がなく低賃金労働を強いられる。教育を受けないことが、1 人の人間の人生に大きく影響し、国の成長をも脅かすことになると感じた。だからこそ、教育は必要不可欠な社会基盤だと言えよう。

2 点目は、都市部と農村部の格差を目の当たりにした時だ。プノンペンでは、高級車が走り、煌びやかなビルが立ち並んでいる。それに対して、シェムリアップの農村部では粗末な家屋と舗装されていない道路が広がっていた。カンボジアは、7%前後の経済成長率を維持しているにも関わらず、1 人あたりの GDP は東南アジアでも低水準である。この原因として、カンボジア経済の農業依存度の高さが挙げられる。そのためにも、観光業・製造業などの産業の成長と外資系の企業の参入が求められてくるだろう。農業以外のいわゆる、第二次産業や第三次産業の割合を向上させ、1 人あたりの GDP を向上させることが急務と言えよう。そのためにも、英語や日本語をはじめとする言語能力や読み書き・計算などの基礎的な学習能力が必要不可欠だ。産業成長のファーストステップとしてしっかりとした教育が求められるはずだ。

以上の 2 点を目の当たりにした際、教育はインフラだと考えるようになった。しかし、現状として教育に国のお金が回っていない事が現状だ。教育は、「国家百年の計」と言われるように長期的な視点で考えなければならない問題だ。空港やレジャー施設の建設などの目先の利益にとらわれず、国の成長という長期的な目で物事を考えるべきだと感じた。

今後も、国ごとの認識の違いや特徴について学びを深めていきたい。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【JAPF カンボジア研修を終えて】

早稲田大学　政治経済学部　1 年生

研修を通して得た一番大きな気づきは、先進国で暮らしている自分が知るカンボジアの情報と実際のカンボジアには乖離がある、ということである。

特に、本から感じていた孤児院のイメージ、農村での生活の景色と比べ、交流を通して感じた彼らへのイメージは 180 度違っていた。イメージを変えた原因は、支えている人々の存在、暮らしている人々の笑顔を知ったことにあると思う。研修で訪れた孤児院、農村は、外からの支援によって、成り立っているものであった。笑顔がいかに多くの努力によって支えられているのかということも感じた。支援をされている方々から親の教育への関心の欠如によって退学してしまう生徒がいるという課題がある話を伺い、関心を持った。発展途上国への教育支援として、今まで考えていたものは学校設立や、教師の育成、労働環境の改善などであった。しかし、今回話を伺ったことで、親への教育啓蒙活動の必要性、また、その方法を学ぶことができた。

さらに、孤児院、農村での子どもとの交流で、驚いたことは、お互い言語が全く分からない状況で、楽しく遊ぶことができたことである。言葉での意思疎通ができないことに不安を持っていたら、笑顔で駆け寄ってダンスに連れ出してくれたり、折り紙を持ってきて一緒に折ってくれたり、ジェスチャーを交えながらマジックをしてくれて、温かい気持ちになった。身寄りがない、家が貧しいこと周りと違うだけで、何も悪くない子ども達を守るための継続的な支援の在り方を構築していく必要性を感じた。

伺った孤児院は、財政面による子ども受け入れ人数の限界という課題を抱えていた。また、カンボジア内の他の孤児院の中には、設立資金のみは海外から援助があるが、その単発的な支援の結果、運営資金難になっている施設があると知った。今までは、海外からの支援のメリットばかり考えていたが、いかに支援する国が自立していくべきなのかという部分まで考えられた支援がなされなければ、悪影響を与えることにもなりかねないというデメリットを知ることができた。しかしながら、「sunrise japan hospital」では、開業当初の日本人中心の病院経営からカンボジア人主導の経営に転換しつつあるという例も知ることができ、支援の形態の変容も学ぶことができた。

多くの情報の乖離を感じた研修の中で、想像よりも改善が必要であると感じた場所もあった。それは、ゴミ山である。ゴミのたまっていくスピードも量も想像をはるかに超えていた。バスに戻る道中、私達が靴を捨てて帰ることを分かって、多くの子ども達がついてきた。彼らは、生きるためにゴミ山での生活を強いられている、ということを身に染みて感じた。

その姿を見て、ゴミ山を無くすだけでは、課題は解決しない、ということの意味を知った。

ポルポト政権下、カンボジアの内戦下の歴史関連の研修で特に驚いたことは、アキラーさんの話である。アキラーさんは、まだカンボジアは自由な国ではなく、話すと自分の身に何が起こるか分からないという現実があるとおっしゃった。今まで、学んできた中で、カンボジアの中の争いは終わっていて新しい時代になっていると思っていた。しかし、実際は、歴史を伝えていくことができるほど長い年月は経っておらず、完全な真実を話している人はいないのである。カンボジアで歴史教育がなされていない理由、また、外国人がそのような国の歴史を学び、記録し、伝えていく意義を深く理解できた。そして、アキラ―さんのお話から、カンボジア、および、東南アジアの国々が発展途上である所以に外国の干渉が強く関わっていることに改めて気付いた。外国はその責任を取り続ける義務を背負っているはずである。この気づきをきっかけに、より先進国による支援の必要性を追求したいと考えた。

帰国後、周りから聞かれたことは、私が渡航前に思っていたイメージからでるような疑問であった。観光省が考える通り、ポルポトが支配していた暗いイメージを持っている人が多かった。もちろん、カンボジアは今住んでいる日本と比べると、衛生面、インフラ、経済格差、教育格差など多くの問題を抱えている。しかしながら、自分の足で訪れたカンボジアは、温かい人々、活気のある町、のどかな農村部、アンコールワットのように感動するほど美しい遺跡があって、魅力も多かった。自分が経験したカンボジアを多くの人に伝えていきたい。そして、より魅力的な国になるための支援の増長、発展途上国が抱える課題解決の必要性を感じた。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【カンボジアと日本】

名古屋市立大学　人文社会学部　1 年生

私は、今回のツアーが初めての海外だったので、自分の目標としてカンボジアを日本と比較して理解しようと思った。しかし、それでは正確では無いと感じた。もちろん一番わかりやすい基準ではあるが、実際にカンボジアで過ごしていると、日本を基準にすることが良いことなのかと疑問に思ったのである。ＧＲ1 のまとめのシェア会でも議題になった「当たり前」の感覚は日本に住むか、カンボジアに住むか、はたまた別の第三の国に住むかで全く異なるだろう。つまり、何かを知りたいのなら、国などの大きいくくりではなく、個々を見なければならないということである。

まず、カンボジアといえばというほど何度もツアー中に出てきた、カンボジアーの悲劇の一つであるポル・ポトについて、学校では教えないということ。日本に置き換えれば第二次世界大戦（WWⅡ）での被爆が一番悲惨な歴史だろう。私は、日本は後世に伝えるために歴史で教えて、カンボジアは過去の闇を隠したいのだと思っていた。しかし農村でチア・ノル氏の話を聞くと、日本は自らを被害者だと考えるから歴史の教科書に載せることができ、カンボジアが教えないのは新たな憎しみを生まないためでもあるとわかった。
ここで私が思ったのは、個人の意志、特に若者の意志を尊重すべきだということだ。カンボジアはポル・ポト政権を教えない、で止まるのではなく、知りたいと思う人には知る機会を与えなければならない。過去の過ちは、現在に活かしてこそ意味があるのだから。また、同じくWWⅡに関して、日本では原爆ドームの保護が一人の少女の言葉によって決断されたという話を聞いたことがある。大人がやらなければいけないとは分かっていても辛くて逃げそうな時にこそ、若者の声がフラッグシップになったりするのだ。しかし、それも若者が過去や原因を知っているという前提の元に成り立つ。だからこそ、トゥールスレン収容所から生還したお二人のように、少しずつでも発信していかなければならないし、知りたい人の意思表示がしやすい環境があるべきだと考える。個人の行動が重要なのだ。

次に、子どもの幸せについてである。今回は二カ所でカンボジアの子どもと触れ合った。そこにいる子どもたちはみな明るく、笑顔だった。日本で孤児や親となかなか遊べない子どもたちと聞くと、あまり恵まれてないと感じてしまうが、カンボジアでは一概にそうではなかった。むしろ孤児院などにいる方が勉強できたり、安定して食にありつけたりするので幸せだともいえる。幸せや恩を感じたからこそ大人になってまた戻ってくるのだろう。それぞれの家庭の事情がどうであれ誰でも受け入れてくれる場所だからこそ、子どもたちも全力で楽しむことができるのだと思う。孤児だから可愛がられていないだとか、農村では貧しい生活を送っているだとかいう思い込みを無くして、個人に向き合えば、むしろ私の方がさみしい生活を過ごしているような気持ちになる。日本で考えた幸せは、子どもたちにとっては物足りないだろう。現代の日本のような人との直接的な触れ合いが少ない暮

らしも貧しさの一部であるということを、カンボジアで子どもたちひとりひとりと触れ合って知った。

今回のツアーの行程の中でも、はじめは参加者の学年や年齢を教え合っていなかったのだが、それも個人として向き合うのに必要なことだと感じた。先輩だから敬語を使う必要があるわけではない関係性が新鮮で面白かった。もちろんそれ以上にシェア会での話し合いで、先輩だから良い意見を持つのでは無くその人の感性が素晴らしいのだと感じることができた。大学のゼミなどの経験もその人が興味を持ったから詳しくなって、ただ学年が上だからすごいというわけではないと改めて思った。カンボジアでもトゥクトゥクの運転手やマーケットの店員はしつこくてうるさい人ではなく、日本語を覚えたすごい人である。第一印象ではなく、よく見て聞いて相手を知らなければいけないのだ。適当に大きなくくりでは捉えずにその人として付き合って人となりを知るべきだと考える。日本だから、カンボジアだからで止まらずに、なぜそうなったのか、誰がそうしたのか、そしてどう思っているのかを細かく知っていこうとすることが、物事を知るのに重要な心持ちだと知ることができた。今後海外に行くときも今回のツアーで得た知識や感覚を活用して、世界を知りたい。このツアーに参加できたことは、私にとって唯一無二の経験である。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【この世界の共通言語】

同志社大学　グローバル地域文化学部　1 年生

私はこのツアーに実際に参加し、これまでのカンボジアのイメージや考えを大きく覆されることがいくつもあった。それをいくつか述べていこうと思う。

まず、歴史的な面である。1975 年から、この国はポルポト率いるクメールルージュにより、壊滅的な被害を受けた。宗教は廃止され、知識人は殺害され、この国はそれまで積み上げてきたものの多くを失った。つまり、０からのスタートを切ってからカンボジアは、現在でもまだ数十年しか経っていない。よってまだ多くの人が貧困のさなかで暮らしていると思っていたわけだが、実際はそうではなかった。カンボジアは他国の支援もあって迅速な復旧を遂げていた。インフラやゴミの問題は依然として多くあるものの、都市部は発展しており、農村部との格差が開いていた。こうしてカンボジアの発展を目の当たりにしたと同時に、キリングフィールドやトゥールスレン収容所、地雷博物館などを訪れることで、悲劇が本当に最近のことであったのだということを実感させられた。特に幼少期にポルポト政権にとらえられ、少年兵として長い間戦争を行ったアキ・ラーさんの話はとても生々しく心に響いた。しかし、最近の悲劇であっただけに加害、被害の関係が明るみに出る現在では、多くのカンボジア人はこの悲劇をあまり思い出したくない様だった。観光庁もダークツーリズムを大々的に宣伝新たなしておらず、明るいイメージに刷新して観光客を誘致したいようだった。だがそれも観光産業に依存して国を再建している現在のカンボジアにとって、仕方のないことなのかもしれない

次に、カンボジアの人々についてである。第一に、日本人が想像より多くいたことに驚いた。若者が多く、将来性のあるカンボジアをマーケットにして活動を行うのは確かに理になっているようだ。そして、現地の人々である。都市部はそうでもないにせよ、農村部で貧困のさなかにいる人々は、生きることに精いっぱいで苦しんでいる、というイメージを持っていたが、訪れてみると彼らはみな友好的で、楽しそうに暮らしていた。何故なのだろうと考えたところ、日本が支援を行っており、親日国であるということも優しく接してくれた原因のひとつかもしれないが、この国の歴史が関係しているのではないかと考えた。権力者に虐げられ、みんなで協力して復興していかなければ、というところで団結力が生まれたのではないだろうか。お金に支配され、欲望に飲み込まれる者を見ていると、改めて富が豊かさだというわけではないのだと気づかされた。ここで、農村の中学校を訪れた時に現地の中学生が歌ってくれた、高橋優の「福笑い」の一節を紹介する。

きっとこの世界の共通言語は　英語じゃなくて笑顔だと思う

孤児院の子供たち、フリースクールの子供たち、町や農村、病院の人、現地のガイドさん、

みな本当にいい笑顔をしていた。
それにつられて、私も自然と笑顔があふれ出た。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【子どもたちの未来】

関西大学　政策創造学部　3 年生

このツアーで一番印象的だったものは子どもたちの笑顔だった。もともと子供と関わることが好きで今回も孤児院や農村での触れ合いを楽しみにしていたがただ遊んで楽しかったということ以上のものを感じた。

まず訪問してすぐに初めて見る私たちに対して臆することなく駆け寄ってきて遊ぼうと手を引いて歌ったりダンスをしたりすることが日本ではあまり見かけない光景だった。日本では遊びたくても恥ずかしがって言えなかったりもじもじしていたりする子が多いがそんな表情は一切見せず皆楽しそうにしていた。そんな中驚いたことは院長さんから話を聞いていると、子どもたちは英語や数字などの一般的な教養だけでなくコンピューターや芸術といった職業訓練に繋がることも学べるということだ。また、ここを卒業した生徒の中には日本の大学で勉強している子や、他国の大学を卒業してからカンボジアに帰って来て孤児院を支えている子もおり、学習する環境が整っているのと同時に子どもたちの意識の高さにも感心した。しかし環境が整っているとは言えず、教師不足や保護する孤児の数に限界があり、もう来年以降はこれ以上受け入れられないという現状がある。今でも数え切れないほどの子供がゴミ山や路上で生活していると思うとどうにかならないものかと胸が痛くなった。お昼ご飯の時間になり、手を洗うために女の子と洗い場に行くと、蛇口のところに桶があり、そこにはご飯で使うお皿が入っていて水でさらっとそれを流す程度でそのままご飯に使っていた。それを見て衛生的に大丈夫なのか、洗剤はいらないのかと自分にとっての当たり前は全く当たり前なんかじゃないんだと改めて感じた。最後、子どもたちと別れるときにずっと一緒に遊んでいた女の子に「good luck」と言われ思わず泣いてしまった。私なんかよりずっとつらい思いをしてきたはずなのに常に笑って最後には元気でねと声をかけられて可能ならもっとそこにいたかった。帰りのバスで孤児院ビジネスの話を聞き、日本で聞く話とは全く違う現実がそこにはあって、もう一度子どもの環境について考えなおそうと思った。

今のカンボジアに何が一番必要かと聞かれると私は迷わず「教育」だと答える。しかし学校はあってもお金がなくて中退してしまったり働かなくてはならなかったり。カンボジアの教育制度を充実させるには時間がかかるだろう。それでも今のカンボジアの人口の大半を占める若者たちが将来を支えるのだから、彼らがしっかり教育を受けていないと発展は見込めないと思う。そしてこのツアーで出会った子どもたちの笑顔を壊したくない。今の私にできることはほぼないかもしれない。就活を控えている私はこのツアーを機に何かヒントを得られればと思っていたが逆に今は見失ってしまった。私が働く意味を、今は見失ってしまった。だけどあの子たちの笑顔をどうにかして守る、恵まれない子供たちが少しでも子どもらしく生活できるような環境を提供したいと考えている。まさに「百聞は一

見に如かず」だということを肌で感じることができた実りあるツアーだった。この学びを忘れず今後も勉強していきたい。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【カンボジアの現状と希望】

同志社大学 法学部　3 年生

今回のツアーでは、それぞれの研修先でカンボジアの現状と課題が見えた一方、将来に対する希望も垣間見ることができた。

Sui-jho の浅野さんの話では、「貧困への依存」という、なかなか気付きにくい現状を知ることができた。政府高官が他国から資金を多くとるためにわざと貧困を強調したり、支援が目的であるはずの NGO がその支援を達成すると、その後の仕事・行動に困ったりと、「貧しくないと困る」というのはリアルな課題だと感じた。しかし、浅野さんの「「哀れ」から国を発展させるのではなく「魅力」で国を発展させる」という言葉は印象的で、これは他の研修先でも共通したものを感じとれた。

カンボジアでは、日本と比べて医師が 10 分の 1 しかいなかったり、カンボジア人がカンボジア人医師を信頼していないという深刻な課題があるが、サンライズジャパンホスピタルでは、理想的な支援の在り方が実践されていた。例えば、日本では休憩中に救急患者が運ばれると、休憩をきりあげ、すぐに対応するのが当たり前に感じられるが、カンボジアではそうではなかった。しかし、サンライズジャパンホスピタルでは、この当たり前を一方的に無理矢理に押し付けてはいなかった。彼らは、カンボジア人特有の考え方を理解し、週 3 回のディスカッションを交え、医療において大切なものを、あるべき姿を根付かせようと努力していた。また、医師間だけでなく市民との信頼も築き、いずれは、カンボジア医師、看護師だけで自立できるようにゴールセッティングできている点も理想的であった。施設や医療機器を整えればなんとかなるんじゃないかと思っていた自分の考えが一変され、多様な観点を持つことの必要性を痛感した。いずれ、この病院で学んだカンボジア医師たちが国全土に医療のあるべき姿を根付かせてくれるのでははないかと感じた。

カンボジアの現状の中で一番無力感を感じたのはゴミ問題である。初めは、ゴミ焼却場を作ればいいんじゃないかとか、ゴミ収集車を増やしたり、ゴミ箱を作れば改善するのではないかと考えたが、この問題はそんなにも単純なことではなかった。カンボジアでは、雇用の供給がまだまだ足りておらず、ゴミ山でゴミを漁って生計を立てていかなければいけない人達が多くいたのだ。ゴミ山がなくなればみんな happy なんじゃないかと思っていた自分が恥ずかしく、改めて自分の視野の狭さを感じた。ゴミ問題に対する直接的な解決法は思い浮かばなかったが、カンボジアには、いずれこの問題を解消しうる潜在的な力を感じた。それは、次世代を担う子供たちである。孤児院、バイヨン中学校、プノンペン王立大学を訪れて感じた、生徒たちの知的好奇心や高い勉強意識、能力はポル・ポト政権時に失われた教育・勉強に対する価値観を回復するに十分であった。ただ、カンボジア全体で見ると、依然として、教育施設は足りず、教師の待遇も十分なものではない。また、親たちの学校・教育に対する意識を変えていく必要もある。この点に関しては、我々にも支

援できることは多いと思う。そしていずれは、教育をしっかり受けたカンボジアの子供たちが主体となり、労働、ゴミ問題に対する改善意識を徐々に国に根付かせ、ゴミ山で生計をたてなくても生きていける社会を作っていけるのではないかと感じた。

今回のツアーでは、現状だけでなく歴史を知ることの大切さにも気づけた。よく、短期留学では何も変わらないなどと聞くが、自分はこの 8 日間で、いろんな人、場所から社会で生きていく上で大切なことや物事を多面的に先入観にとらわれずに考えることの重要性を学び、大きく成長するきっかけを得ることができた。そして、学んだだけで終わらず、なんでもいいから、小さくてもいいからアクションを起こしていきたい。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【カンボジアを知るということ】

同志社大学　商学部 1 年生

今回のカンボジアのスタディツアーにおいて多くのことを学習することができた。その中でも私はゴミ山と観光面が印象に残り、新たな学びを得た。

1 つ目のゴミ山についてである。ゴミ山を実際に訪れてみると私が思っていた以上にゴミが捨てられていた。また、子供たちが裸足でゴミ山に登っていた光景は私にとっては衝撃的であり、子供に与える健康被害は計り知れないものなのであろう。このようなゴミ山を無くそうとも、焼却炉を設置しなければならなかったり、そこで瓶やペットボトルなどのゴミを回収して売却して生活の足しにしている人々に向けて新たな雇用を生み出したり賃金を上げなければならなかったりすると考えられる。また、カンボジアファッションブランド「Sui-Joh」の代表、浅野祐介氏によると、カンボジアは貧困であることに甘んじている面があるようである。貧困のため助成金がもらえるなど補助が出るからである。この現状が続けばゴミ山に付随する多くの課題を解決することはできないであろう。一つの課題を解決しようとするとそれに付随して更に多くのことを解決しなければならなくなる。実際に訪れ、そこでの生活を見なければ本当に問題を解決することは難しいということを学べた。

2 つ目の観光面についてである。ダークツーリズムとして挙げられるトゥールスレン収容所では血の跡がそのまま残っていたり、足枷など収容時に使われていた道具が保管されていたりした。負の遺産であるにもかかわらず隠さずそのまま保存してあることが驚きであった。またキリングフィールドでは頭蓋骨がそのまま供養されているなど、日本の負の遺産とは違った見せ方にも驚いた。世界史の授業だけでは知ることがなかった拷問の中身や処刑のされ方、当時の様子といった説明を受け、現場を見て、非常に勉強になった。ダークツーリズムは観光庁としては観光地として推していない。観光客に対してマイナスイメージを与えかねないという懸念があるからだ。しかしこのような場所に訪れることで次の世代へ同じ負の歴史を繰り返さないという教訓を与えることができるだろう。そのため、今回の参加者のように実際に訪れた人々がダークツーリズムで学んだことや見たこと、そして聞いたことを実際に周りに発信していくことが大切なのであると考える。

今回のツアーで筆者は実際に訪れて学ぶ大切さを再認識することができた。今回のツアーで学んだことを私達は様々な人に発信していき、カンボジアの現状を正しく理解してもらわなければならないであろう。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【想像と現実】

同志社大学　政策学部　3 年生

今回のカンボジアスタディツアーにおいて、主に二点の課題を発見した。

第一に、偏見が生み出す援助論の存在である。今日、日本でもテレビ番組などを通して、カンボジアを含める開発途上国や地域（以下、「途上国」と略記）について伝えられる機会は増えてきた。そうしたメディアを通して人々の関心を途上国へ寄せ、貧困や教育支援の向上が促されているのは一見すると良いことのように思う。また、メディアではしばしば「貧しく生活は困窮しているが、必死に生きて、未来を見つめる子ども達や明るく生きる人々」といった感動話を提供する。そして、私自身も 10 歳の頃はテレビ番組で映し出されていた、インフラ整備が不十分なカンボジアの現状や子ども達の姿を見て、「貧しい＝お金が無い＝可哀想」といったことや解決しなくてはならない問題をカンボジアは抱えているという印象を強く持っていた。しかし、こうした二次媒体を通して解釈していたカンボジア像と、今回のツアーを通して目視したカンボジアには少しギャップが生じており、それを知らずして途上国への支援について考えるのは失策だと感じた。具体的には、カンボジアの教育現場において上記の課題について考えさせられた。まず、ツアー前に考えていたのは、カンボジアの教育は読み書き程度だろうと予想していたため、教育の質向上や教員の育成が主な課題だと考えていた。しかし、実際に訪れて CCH 孤児院では年長であれば年下の子の面倒を見たり、語学力を駆使して案内してくれたり片付け等のお手伝いを率先していたりしており、私の想像以上に良い教育が施されていることを目の当たりにした。この施設における最大の課題は、現在行っている良い教育を持続的にするための運営資金を調達できるか、ということだと感じた。今は個人からの投資で賄っているとは言っても、持続的かつ安定的に運営することを理想とすると現在の運営状況は少し不安がよぎるものであると考えられる。また、道端で出逢った物売りの子ども達は語学力に長けており、語学習得に関しては学校の授業以外で学べる機会を彼らは既に持っていることを実感した。従って、二次媒体で形成された偏見により立てた課題と実見により立てた課題には差異があり、偏見が生み出す援助論はしばしば現地で無効な働きかけとなる可能性があることに改めて気付かされた。

第二に、あらゆる業界のパワーバランスを調整することである。教育、医療、インフラ、観光など、カンボジアに関わらず、大きな組織になるほど課題を抱える分野は多岐に渡る。こうした多数の課題に優先順位をつけ解決を試みる際、行政の立場から具現化していくには２つの方法があると考える。第一に、法制化や政策立案といった規制や文章化することである。例えば、人々の安全を考えるとバイクの免許制度を導入し、バイクの使用を制限することが必要だと感じた。第二に、予算案を作成及び調整することである。カンボジアが自立するには、他国からの投資になるべく減らす必要があると考える。予算案を見直す

ことで、どの分野を最優先に施策したいか、またそれはどれ程の本気度か（具体的に考えられているか）を数値として単純化することが求められるだろう。

最後に、カンボジアでの 8 日間は自身の将来の展望について整理するきっかけの一つになった。ツアー前は次世代を養成する教育業界や文化活動の保護に携わりたいため、文部科学省に入省したいと漠然な希望を抱いていた。しかし、カンボジアを多面的に視察し「何を豊かであると考えるか」について改めて考えさせられたことや、上記した第二の課題とお金の流れの関係性について考えていく中で、長期的にこれからの国の在り方について考察する際、どんな国費の運用をするのか、を考えていきたいため財務省へ入省したいという希望を持つようになった。まだ見ぬ将来世代にどんな社会を用意したいか、を日本の在り方を軸としてこれから考えていきたい。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【カンボジアの現状】

上智大学　経済学部　2 年生

私は、この研修を通してカンボジアの経済、観光、教育、歴史、医療、孤児、貧困、格差、文化を学んだ。これらを通して一番感じたのは、なぜ生まれた国によって生活がこんなにも変わるのかということだ。この視点から感じた私が感じたことや考えを、格差、経済、教育という面から論じていく。

まず、格差であるが、これはどこでも顕著に現れていたと思う。街の中を見ていても一番目に付いた。特にゴミ山ではそこで生活する人達の姿を実際に目の当たりにした。近くにいるだけでも悪臭で気分が悪くなりそうな場所で生きるために生活をしている人たちがいた。これは健康被害などの影響があるので、無くすという考えもあるが、焼却施設を作る予算の問題や現存するゴミ山の土地の問題、ゴミ山で生活している人の今後の生活の問題といった様々な問題があるのも現実である。また、孤児院では子供達は靴も履いていないのが現状であった。だが、反して子供たちはとても笑顔でとても楽しそうであった。あまり豊かではないが、幸せを感じているというということを感じた。

次に、経済の面である。カンボジアは周辺の東南アジア諸国とは異なり、経済よりも観光業が先に先に発展した国だ。カンボジアにはアンコールワットや綺麗なビーチがある中で、キリングフィールドやトゥールスレン収容所などの負の遺産が存在する。観光省は、これから観光業をさらに推し進めるにあたって、ダークな部分ではなく、ビーチのような万人が見て綺麗だと思えるようなところを推していくそうだ。確かに、ダークな部分を見せると観光客に悪いイメージが付いてしまうという問題が懸念される。実際に、日本にも同じく原爆ドームなどダークな遺産があるが、カンボジアと日本を比較してみると、日本は資料館を作り、そこに行くと学べるという施設作りが行われているように感じる。それに比べて、カンボジアは負の遺産の見せ方がとても直接的であった。キリングフィールドやトゥールスレン収容所は、ダイレクトに写真や遺産を展示してあった。主に推さない遺産であっても、観光客が何かを学べる場所として、少し見せ方を工夫すると良いのではないかと思う。

最後に教育という面である。農村では、教師不足と親の教育に対しての考え方という問題に直面していた。教師は、都市部には沢山いるのだが、農村にはとても少なく、学校運営がとても大変そうであった。そもそも、教師という職業はカンボジアではあまり給料の高い仕事ではないらしい。だから、教師の人数はとても少ないのだ。私は、教育というものは重要なことであると感じる。例えば、カンボジアの街の中には電線が張りめぐらされていた。それが街の景観に悪影響を与えるというということを考えた時、どうすれば改善されるのか。私は、この問題提起を考える上で知識というものが必要になると考える。知識があれば、地下に埋める方法を編み出すことが可能である。もし、知識がなかったとし

たら、たとえ地下に埋めるということを思いついても、その方法を考えることができない。やはり新たなものを作る、生み出す、現状を変化させることに必要なのは知識であるのだ。だが、カンボジアでは、親が教育の重要性にあまり気づいていないので、学校を中退してしまう子供が大勢いる。都心部の子供と農村の子供、関係なく教育を受ける仕組み作りが課題であると感じた。

カンボジアに現存する様々な問題は、ポル・ポト時代の影響を受けているものが多かった。たった 30 年前にこんなことが起こっていたことを考えると、とても複雑な気持ちになった。これから自分が出来ることは、常にカンボジアに対して興味を持ち続けることであると思う。常にアンテナを張り、もっと学びを深める必要がある。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【「幸せ」と「過去」】

同志社大学　グローバル地域文化学部　2 年生

私はこのツアーに参加すると決めたとき、このツアーの目標を「現地の様々な人々と積極的に交流をし、カンボジアに溶け込むことによって、内側からでしか見ることのできないカンボジアを知る」ということにした。その交流の中で私は、出会った多くのカンボジアの住人たちに共通点があることに気付いた。

それはカンボジア人が自分自身のためではなく、他人のために行動することである。それが頻繁に見られたのは、私がカンボジアの子どもと交流していた時である。私は CCH 孤児院である男の子と仲良くなった。するとその男の子が自分の好きなお菓子を私にたくさんくれたのだ。自分もお菓子を食べたいのにもかかわらず、彼は自分の分まで私にプレゼントしてくれた。そして私が笑顔で「オークン」というと、彼がその日一番の笑顔を見せてくれたことが非常に印象的であった。

他人のために行動することは他の場面でも垣間見えた。アンコール遺跡群で出会った４人女の子たちが、私にキャンディーかお金を頂戴とアピールしてきた。あまりにもしつこかったことに加え、丁度キャンディーを持っていたため渡した。すると２人はすぐに食べたのに対し、もう２人は食べないでいた。彼女らは、後で下の兄弟と食べるから今は食べないと言っていた。

他にも似たような体験を沢山したことため、カンボジアの人々にとって自分の「幸せ」とは他人の「幸せ」を「作る」ことではないかと考えた。それは彼らが、自分の「幸せ」と他人の「幸せ」を結び付けていて、「自分」と「他人」の境界そのものを無くしているようにも感じた。つまり、他人のことも自分のことのように嬉しがったり、悲しがったりし合うということが当たり前のようにできるのである。また、見たものを素直に取り込んでしまう子どもたちの行動に、その傾向が強いことから、カンボジアの全体がそういう国民性を持っていると考えることもできる。

しかし、これまでの歴史を見てみると、それと真逆とも言えるポル・ポト政権の時代がある。今のカンボジア人らは、これまでに「幸せ」を奪われることをされてきたけれども、なぜ前述のような「幸せ」を与えることを実行できるのであろうかを、私なりに帰国後深く考え、次のような結論に至った。それはポル・ポト政権のような過去の失敗があったからこそ、彼らはヒトの「幸せ」を奪われることのつらさや悲しさを感じ取ることができたのである。加えて、他人に対して「幸せ」を配ることの素晴らしさを理解することができたとも考える。

これらのことも踏まえ、私は「過去」を知るということや伝えるということの大切さをカンボジアで学んだ。今の私たちには過去をないものにはできないし、同じ過ちを繰り返さないように過去の人々の生きた証を次世代にも継承していかなければならない。それと

同時に過去や歴史に興味のない、知る機会のない人に知ろうとする「意欲」を与えるべきだ。だが、単純に伝えるということはナンセンスである。「過去」の中には今でもなお、その被害者や遺族たちを苦しめてしまうものも含まれている。例えば、日本の原爆や大災害の歴史を、心の傷が癒えていない被害者たちに話してしまうことは控えるべきである。そのようなことに配慮を心掛けながら、私たちは「幸せ」を作るために伝えられるべき、途絶えさせてはいけない「過去」を残していくことが非常に重要であるとまとめる。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【カンボジア 1 か国研修を終えて】

大阪大学　外国語学部　2 年生

私がこの研修に参加を決めた理由は何かというと、行ったことがない東南アジアの国に行ってみたいという旅行欲と世界遺産のアンコールワットを生で見たいという好奇心で、お世辞にも自己啓発や、発展途上国支援に興味があるなどの明確なものではありませんでした。しかし、たったの 7 日間を通して私のカンボジアに対するイメージは大きく変わりました。様々な場所に行って、様々な人に出会うことが出来ましたが、特に印象に残っていることがあります。

まず一つめは、Sui-joh のアサノさんのお話で上がった、「やる気格差」という言葉です。カンボジア内でも、大学に通うことが出来る子どもがいる一方、小学校を卒業することもできない貧しい田舎の子どももいるという現状を伺いました。確かに、日本と比較すればかなり教育の浸透具合や生活の平均水準が低く、先進国と発展途上国の差が存在するとは思います。私は両親がいて、生活にも困ったことはないし、大学にも通うことができているのですが、高校時代まで目指していた「大学生になる」という目標を達成したのち、明確な目標を設定することが出来ず、日々を流されるままに過ごしている自分がいます。何かしなければならないと漠然と考えてはいるのですが、モチベーションが持てず、なかなか行動に移せません。対照的に、自分と同世代のカンボジアの学生たちからは、学びたい、世界を見てみたいという熱意を感じました。マーケットで話しかけてきた店員や、お土産を売る小さな子どもさえ日本語を使っていて、それが自分の中でショックだった出来事の一つです。日本人である私とも、コミュニケーションに困らないほど上手な日本語で、習得するのにたいへん努力したはずです。ただ、なぜ彼らがそれを成し遂げることが出来たのかと考えると、それは生きていくために他ならないと思います。今やグローバル社会で、英語の需要はこの上ないほど高まっています。日本で暮らしていくのに英語が使えないとしても、はっきり言って困らないと思いますが、それは間違いなく日本という国が経済的に豊かで、海外からの支援に依存することなく自立しているからではないでしょうか。明らかに恵まれた環境で育った私たちの中には、自分のなりたい目標をなかなか発見できず、周りの環境に甘えている人も少なくないと思います。実際にカンボジアに行って、いろいろな話を聞くことで、ゴールセッティングを行わなければと考えさせられました。

もう一つは、「豊かさとは何か」という題で行った最終ディスカッションです。私たちのグループは、人生の豊かさの構成要素として経済的豊かさ、身体的豊かさ、精神的豊かさの大きく三つあると考えました。そのなかでも、経済的豊かさは人生の豊かさに大きく影響してくると思います。日本は経済的に豊かに見えるかもしれませんが、精神的に豊かであるといえるのでしょうか。いじめやハラスメント等、日本では人間関係のトラブルで精神を病んでしまったり、自ら命を絶ってしまう人が少なくありません。しかし、カンボジ

アの人びとは、最低限度の生活を送ることも難しい家庭が多く、ストレスはあるかもしれませんが、出会う人々はみな生き生きとしているように見えました。日本にはあってカンボジアには足りない豊かさがあるように、日本には足りない豊かさがカンボジアにはあると思いました。カンボジアにはまだまだ課題も多く、早期解決が迫られますが、確実に必要性を感じたのは、教育システムの整備です。政府が改革を目指して、ある政策を掲げても、知識がなければ、その必要性を国民は理解できず、納得して協力しようとはしないでしょう。知識がなければ、水質の悪い水を避けようとしないし、病院へ行こうともしないでしょう。でも、知識があれば、国民が自ら選択して最悪の状況を回避する機会も増えるのではないかと思います。問題は、カンボジア政府が教育費にそれほど投資していないという点です。教育を受けることが難しい子どもを支援する、海外の団体も増えてきているそうですが、もちろんそれですべての子どもたちに教育を受けさせることが出来るほどの額ではありません。教育に投資することで、現在カンボジアが抱える問題も長期的に改善につながると考えます。

書ききれないほど、カンボジアで過ごした７日間は学習することも多く、歴史的な場所に行くこともできて濃いものでした。日本ではできないような経験をさせていただいた、現地の方々や、ツアーガイドのお二方、引率のお二人、一緒に過ごしたグループのみんな、そしてこのような機会を与えてくれた両親に感謝します。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【カンボジア研修を通して感じたこと】

宇都宮大学　農学部　2 年生

私は今回このカンボジアスタディーツアーに参加して、当たり前と思っていることが実は当たり前ではないということ、そして逆に当たり前ではないことが当たり前に起こることがあるということを意識することが大切であること、また先入観で物事を考えてはいけないということを学んだ。その理由を感じたのは主に三つの事柄によってだ。

まず一つ目はカンボジアの歩んできた歴史だ。1975 年から 1979 年のポルポト政権下で百万人以上の犠牲者を出したわけだが、教師や医者と言った知識があるという理由だけで、もしくはメガネをかけていて博識高く見えるというだけで殺されてしまったというのは日本ではありえないことだがカンボジアでは当たり前のように行われていたのである。トゥールスレン収容所やキリングフィールド、アキラー博物館の見学を通して、日本はとても平和であり、それが当たり前ではなく、理由なしに拷問されたり殺されてしまったりする国があるということを学んだし、教育を受けることや医療を受けることもカンボジアではポルポト政権下で沢山の知識人が亡くなったことで医師や教師不足により難しい状態であり、それを受けることができていることに感謝しなければいけないことだと感じた。

２つ目は農村の暮らしである。私は裕福とはお金で不自由なく生活できることだとカンボジアに来るまで思っていたが、農村の人たち特に子供たちは靴を履けない子もいるなかみんな笑顔でそしてとても楽しそうに見えた。孤児院の子供達は特に親が刑務所に拘束されている、もしくは亡くなってしまっている人が多く、日本では間客観的に見て貧しいと感じられると思うが実際は全くそんな事は現地で子供達を見ると感じなかった。豊かさとは経済的な事だけではなく心の豊かさであると感じ、豊かさ＝お金持ちという間違った先入観を持っていたと強く感じた。

３つめはゴミ山である。まずカンボジアにはゴミが溢れているがゴミ処理場がないのは事前学習で知っておりそこで私はゴミ処理場を日本からお金援助することで作れば解決すると思っていたが、それは先入観で実際はゴミを片付けることを仕事にしている人やゴミからビンや缶集めて生活をしのいでいる人がいるためゴミ処理場を単純に作ればよいというわけではないということがわかった。また問題が起きた際は解決策をただ考えるだけでなく変更後に起きうることも想定して考えなければいけないと思った。

今回のツアーを通して見たことのない情景や考えたことのないような世界がカンボジアにはありとても刺激を受けた。日本に帰ってきて平和で今までと変わりのない生活に戻ったわけだがそれが当然ではないということを意識して物事を捉え、自分が世界にとって少しでもできることは何か考えながら生活していかなければいけないし、今回の研修をカンボジアにいた 8 日間だけで終わりにしてはいけないと思った。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【当たり前と肌で感じること】

宇都宮大学　農学部　2 年生

僕は、今回 JAPF のカンボジアスタディーツアーに参加して、目で見て肌で感じることの重要さと、当たり前とは何なのかについて深く考えさせられた。僕たちは、日本という金銭的、衛生的にもかなり恵まれた国に生まれて育ってきた。日本にいるときに、ニュースや新聞のコラムなどで、発展途上国の貧しい国々に住み、暮らしている人々の貧しく、不幸せそうな描写をみたり、読んだりすることがあるけど、それを実際目で見て肌で感じている人はどのくらいいるのか？と思ったときにそれほど多くはない、のだと思う。その情報を人から聞いたり、情報媒体で見たりして知っているのと、実際にその場所に行って、目で見て、知っているのでは、全然違うものであり、自分が送るこれからの価値観も変わってくるものであると感じた。

例えば、孤児院に行った際は、親に捨てられたりしたより過酷な環境で育った子供が預けられる場所なので、心を閉ざした子たちがたくさんいるのではと思っていたが、裸足でサッカーを一緒にやったときは、僕たちも子供たちも純粋に楽しんでいるように感じたし、明るい印象を受けた。王宮の広場や、いろいろな場所でたくさんのカンボジアの人を見たり、話したりしたが、みんな笑顔だった。もちろん、それは一部の人だけだったかもしれないけれど、自分が感じたものはそのような印象であった。また、トイレや電気の明るさなどは日本で暮らしていると当たり前の水準からは低いため、不自由に感じてしまう時もあるけれど、現地の人からしたらそれが普通であり、むしろ少し前までは今よりインフラが整っていない状態で最近徐々に整ってきている、うれしみ、喜びの感情の方が大きいのではないかと思えた。早朝のアンコール・ワットを見たときは、その荘厳な美しさに感動した。アンコール・ワットはよくテレビや本などでその光景は、何回も見てきたが、早朝の暗い時から空が明るくなっていき、徐々にその全貌が見えてきた時の神秘感やあの現場にいたからこそ味わえた空気は、言葉では言い表せないほどのものであった。

そして、アキ・ラー地雷博物館では、元ポルポト兵であったアキ・ラーさんの貴重な話を聞き、当たり前とは何なのかについて考えさせられた。話をきく前まで、私はどんな罪悪感やひどい感情で地雷を埋めたり、戦っていたりしていたのだろうと疑問に思っていたが、それは、ポルポト政権が行っていた残忍さや、戦争は悪いことを知っていたから出た疑問であったことを、話をきいて思った。アキ・ラーさんは幼少期からポルポト政権下で育てられ、食べ物を得るには戦わなければならないようなことが当たり前の環境で育ったため、ポルポトに逆らうものと戦うことが正義だったのではないかと思った。

このように、自分の思っている当たり前は、他の人にとっての当たり前ではないことを学んだ。これは、特に文化や時代が違うと顕著である。だから、これから自分とは異なる文化、時代の中で生きてきたたくさんの方々と話し、自分の当たり前を超え柔軟に物事

を考える力を養っていきたいと思った。僕たちは、世界を変えることができないという本があるのだが、（僕はまだ読んでいないので今度読もうと思う。）その本のタイトルを見たときの僕は、単純にお金さえあれば世界を変えられるのではないかと思っていた。しかし、現地に行って肌で感じてからは、お金だけでは根本的な解決にならないことを知った。現地に行ったからこそ学ぶことはたくさんある。そう感じることができた 8 日間だった。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【ツアーを通して感じたこと】

愛知大学　短期大学部　1 年生

私にとってこのツアーに参加したきっかけは、就職に強いと思われる修了証がもらえるから、将来の夢が決まってない自分にとっての一つの経験になれば、という軽い気持ちで参加した。しかし、実際に行ってみると毎日様々な研修先へ行き、夜には各グループに分かれその日のことについてのディスカッション、とても濃い毎日を過ごすことができた。

私はこのツアーに参加して、行く前にカンボジアについてしっかり予習していくべきだったと深く後悔している。予習として、自分の身になったことを実際現地へ行き、それを見て感じて人に発信するということをすることがとても大事なことが分かった。また、語学力をこれからもっと身に着けたいと感じた。孤児院へ行ったとき、一緒に遊んだ子どもたちが英語を喋れることに深く驚いた。私が小学生だったころ、英語をまともに話すことができなかったのにカンボジアの小学生は英語で話せること、またカンボジアでの小中学校は日本語が必修科目になっていること、それがすごいことだと思った。私たちが英語を学んでいてもそれを発信することがあまりなく英語を話せないというのを聞いたことがあるが、カンボジアでは読んで書いて話すそれをたくさんしていること、もしカンボジアの教育が遅れているのであっても日本の外国語の学びは少し遅れているのでは？と素直に思った。

また、一番驚いたことはポルポト政権の歴史を今の小学生や中学生に深く教えていないことだ。日本では広島の原爆や戦争のことを教科書で学び修学旅行などでその場所に訪れ見学するということをやるが、カンボジアではポルポト政権のことについて教えず、またそれを教えようとしないことに驚きを感じた。ガイドさんも質問には答えられないものがある、キリングフィールドでみた映像は見れない、と言っていたことに今までやっていたことがカンボジアの人たちを苦しめていたということも深く感じ取れた。

ゴミ山への視察へ行ったとき、人もゴミを探してはいたが、犬や牛たちもそこで食べられる食料を探していたり、またそこで育てられた牛が自分たちの口の中に入っていく食料になるとも聞いた。また、視察で見た約 20m もの穴に半年間でゴミが埋まること、そこをキレイにして家を建てたりしているということに驚いた。匂いもする中で、ゴミ山付近で生計を立てたりしている人がカンボジアにはいること、日本ではとても考えられないと思った。また、トラックでゴミが大量に運ばれてきたとき、ゴミ山で生計を立てている人はゴミが運ばれてきたことにとても喜んでいて、普段私たちはゴミを臭いだの言ってマイナスなイメージでしかなかったのにゴミが来て喜ぶ姿をみて考えさせられた。でも、ディスカッションで話した際、ゴミ山がなくなったら職業難になる人も増えたり、ゴミ山の人に仕事を紹介すること、それはゴミ山の人にとって果たしていいことなのか、答えがでてもそれを実行させること、自分たちには何ができるのか、私にはとても難しかった。で

も、ディスカッションを通して、仲間の考えや思いを素直に聞き入れ、みんなが感じていることを共有することは私にとってとても良い経験になった。

カンボジアへ行き、私は人々の温かさに触れることができた。目が合うだけでにこってしてくれたり、ありがとうといえばありがとうと返してくれて、私にとってとても温かい場所だと感じた。またねっていえばまたねって返してくれて、自分もこれからの生活カンボジアでの生活を忘れずに行動していきたいと思った。

初めてのカンボジアで初めての仲間たちとの経験は自分にとってとても良い経験となった。このツアーに参加することができて心から良かったと感じた。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【私がカンボジアで得たもの】

埼玉大学　教育学部　2 年生

私はこの研修の 8 日間を通して、これからの大学生活を自分の人生において最も充実した期間にしたいと強く感じている。まず、私がなぜこの研修に申し込んだかというと、大学２年生になり大学生活が慣れてしまい、つまらないと感じてきている中で、私はこれから何をしたいのか、自分と同じ年代の他者はどのようなことを考えているの か、などの考えを持ちはじめ、何か行動に移したいと思ったからである。そしてこの研修を通し、私はこの大学生活に対して抱くつまらないという想いをなくしていきたいと強く決心することができた。

なぜ決心できたかというと、まず１つ目に他大学や他学部の同世代の意見を多く聞いたり、多くの場面で見たりすることができたからである。この研修でいくつかのテーマについてのディスカッションを行なった事は他者の意見を良く聞くことができ、私が考えもしなかったことを同じ世代の人が考えていると言うことを知る内に自分が知らないところで同世代の人たちは学んでいたり活躍していたりするのだと思い、自分は学生生活を無駄にしているのではないかと改めて感じた。

２つ目に初めてカンボジアという発展途上国に行った事で、自分の暮らしている日本がどのような支援をしているのかや、自分が日本人としてどのように他国と関わっていくべきなのかを考えることができたからである。まず、実際に sui-joh や sunrise japan hospital の方の話を聞いたり、そのお店や場所を訪問したりすると、日本で使われている技術がこんな離れた所で誰かのためになっているのかという事にとても感動した。中でもカンボジアは医療の進歩が遅れていると聞いた。それを奪回しようと日本の医療技術を利用したり、日本人がカンボジアで医師を務めたりと様々な所で日本人が活躍しているという事を知った。このような事から、例えば自分なりに実際にそのような国に足を運び、そこで得た情報を日本で発信するような小さな事から始めたいと思っている。

３つ目にプノンペン王立大学や、孤児院、農村などのカンボジアの教育現場を見て、教育学部に所属しており、教育について学んでいる自分はまだまだ学ばなければならないことがあると思ったからである。この教育現場の中で最も印象に残っている事は、カンボジアには「いじめがない」という話である。日本の教育現場において、いじめは大きな問題となっている。いじめによる児童の自殺のニュースは後を絶たないのが今の日本の現状である。実際にカンボジアの農村の中学校教員であるチハノルさんから話を聞くことができた。チハノルさんは、カンボジアから日本に行き、学生生活を送ったがその際にいじめに遭ったそうだ。日本とカンボジアを比べると、日本の方が進学率は高かったり、知識獲得がしやすかったりと教育を受けやすい現状であると思う。しかし、いじめが存在する日本の方がカンボジアより長けているとは思えない。いじめをなくすのはとても難しいこと

であると思うが、私はもう一度このカンボジアでの子どもたちの笑顔を思い出し、日本とカンボジアの子どもたちや、教育の在り方の差は何なのか、考えて教育を学んでいきたい。

この 8 日間は自分の人生の中のたった一瞬に過ぎないかもしれない。しかしたった一瞬されど一瞬だと思えるようにするにはこれからの自分の行動次第だと思っている。大学生活は一度きり、そして人生は一度きり、このカンボジアで自分が得たものを忘れずに日々を過ごしていきたい。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【カンボジアに行って感じたこと】

下関市立大学　経済学部　1 年生

私は今回のカンボジアのスタディーツアーで明確な答えが出ないような問題に直面し、多くのことを感じた。

まず 1 つ目に、カンボジアの教育の現状についてである。カンボジアの教育の現状は、まだ子供たち全員が望むような教育を受けられていない、という印象を受けた。プノンペン王立大学の学生から大学まで進学する人が少ないことや、農村で教師の数が不足していること、親の教育への理解が少ないことを聞くと、満足に教育を受けることが出来ている生徒は少ないと思った。また、カンボジアでは音楽、体育、美術の授業がないことも驚きだった。しかし、カンボジアではそのような子供のために多くの支援が行われていることもわかった。私たちが研修先で出会った、チア・ノルさんやアキラーさんは学校の運営や建設に大きく携わっていた。また、日本の大学生などがインターンで音楽、体育、美術を教えていることも知った。バイヨン中学校で生徒たちが披露してくれた歌はその成果だったのだろう。カンボジアでの研修では、自分一人ではカンボジアの現状を変えることが出来ないという無力さを感じたが、カンボジアの子供のために力を尽くしている日本人がいることも知り、微力ながらも自分にも出来ることがあるかもしれないと思った。また、教育が受けられることは当たり前ではないのだと実感させられた。日本では親の教育への理解があり、大学まで進学する人は少なくないがそれは実はとても恵まれたことなのだと感じた。私は教育を受けられる幸せをつい忘れてしまっていたが、カンボジアに行って勉強や大学に対する思いが変わった。

2 つ目にカンボジアは日本より心が豊かだということだ。これは最後のディスカッションのテーマである「幸せとはなにか」について考えているときに思ったことだ。カンボジアの研修を通して、カンボジアでは人と人との心の距離が近いように感じた。日本は経済的に豊かであり、ゴミ山の人たちのように健康被害に脅かされながら生活する人や、生活のために働く子供はいない。日本に比べれば、貧しい生活を送っている人はカンボジアの方が多いだろう。しかし、みんな幸せそうだった。貧しいだろうと思っていた農村の生活も実際に訪れるとそうでもなかった。そこで生活している人々はその人たちなりの幸せを実現しているように感じた。対して、日本は経済的に豊かでもいじめや自殺が問題になっている。「幸せとはなにか」をテーマにディスカッションをしたが結局答えははっきりと出せなかった。しかし、発展途上国に対する「貧しい＝不幸、可哀想」というイメージは完全になくなった。

今回の研修では毎日想像以上の経験をした。そして、実際に現地に行って学ぶことがどれだけ大切かを実感した。今回の研修でカンボジアが抱える問題や、それに直面している人々に出会った。どれも深い学びで自分に出来ることはまだ見つけられていないけど、も

っともっと世界に興味を向けていきたい。そして、またもう一度カンボジアに行きたい。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【実際に目で見る事の大切さとは何か】

関西大学　政策創造学部　3 年生

私は、今回カンボジアスタディーツアーに参加し、実際に現地に行き自分の目で学ぶ事の大切さ・勝手に偏見などで物事を決めつけてはいけないことの大切さを学んだ。なので、このタイトルに決めたのである。私がカンボジアに行く前のカンボジアに対するイメージは、貧しい国・清潔感がないなど良い印象では無かったのである。しかし、実際に訪れてみるとそうではない部分が沢山見る事が出来た。

一つ目は、カンボジア人の温かさ・優しさである。カンボジア人がどんな人なのだろうと不安であったが、日本のソーラン節を踊ってくれたり、日本の歌を歌ってくれたりと、とても優しく出迎えてくれてそのおもてなしにとても感動したのである。これは、実際に行ってみないと分からないことだと考える。ＣＣＨ孤児院や農村の子供たちと遊ぶ機会があったがＣＣＨ孤児院の子達の親は、お金が無くて育てられない親や刑務所に親がいるなどといった子供が多いのである。それにも関わらず、とても人懐っこくて元気がある子達ばかりで、私の方が元気やパワーをもらうばかりであった。ここでは、貧しいがそれだけではないことを学んだ。

二つ目は、私がゴミ山で感じたことである。ゴミ山で暮らす人はおらず、ゴミを拾いそれをお金に換えて生活をする人を目の当たりにしてきたのである。異臭がすごいため、捨てても良い靴を履いて行った。捨てるものだと思っていた靴をゴミ山にいた子供達がとても欲しがり子供たちのものとなった。自分にとってはいらないものがカンボジアの子供達にとってはとても欲しいものなどだと感じ、私がどれだけ物に恵まれていて、欲しいものが手に入る状況にいるのかを感じた。支援とは何かをとても考えさせられる出来事になった。そして、カンボジア王国観光省を訪れた際には、ダークツーリズムというキリングフィールドやトゥールスレン収容所などの戦争跡地を巡るものは、観光マップに載せておらず、観光省は、ダークツーリズムを押していないことを知った。私は、悲しい気持ちになった、自国の歴史を隠してはいけないし他国の人に知ってもらい、そこからアンコールワット遺跡群なども知って貰うべきである。ここでは、他国の歴史を学ぶ意義は何かと考えさせられる経験になった。

三つ目は、アキラー地雷博物館で、実際に聞いたお話で、ポルポトが悪い人ではないという意見もあったと聞いた。私は、ポルポト政権が悪いと思っていたので驚いた。新しい知識が増えた瞬間であった。戦争の時代では、武器はおもちゃみたいに扱っていたり、少年兵として働かされたり、働かないと上の人に叩かれていたり、上からの圧力で殺し合いが行われていたのである。戦争の経験がない私にとっては想像することしか出来なかった。他にも、サンライズジャパンホスピタルやプノンペン王立大学などを訪れ、カンボジアの都市部と農村の格差や現状と課題を目の当たりにした。

最後に、私はカンボジアでの八日間でカンボジアに対する考え方が変わった。様々なことを知り、それをこの先どうするかが大切であると考える。私には何ができるのか、カンボジアの事だけでなく自分自身のことも考えさせられる八日間になった。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【カンボジアを訪れてみて】

武庫川女子大学　短期大学部　１年生

私は今回のカンボジアスタディーツアーに参加し、沢山のことを考え、学んだのである。このツアーに参加しようと思ったきっかけは、2 つある。

それは自分の知らない世界を見たいという好奇心と人を助け、自立できるようになりたいという思いからであった。

ツアーで学んだ中で最も印象的だったことは、日本人にとっての当たり前はカンボジアの人にとって当たり前ではないということである。現在の日本人は誰でも普通に義務教育を受け、自分の志望している大学へ進学する人が多い。日本で暮らしていると何も思わなかった。

しかし、カンボジアを訪れると日本人はとても贅沢に暮らしていると思った。カンボジアの都市には綺麗な建物など並んでいたが、少し都市を離れると道にゴミが散乱していたのである。ゴミ山、農村、孤児院にいって、なお、そう感じたのであった。特にゴミ山では日本では見られない衝撃的な光景ばかりであった。子供から大人までゴミを積んだトラックを待ち構えて必死にお金になるものを探している姿。今を必死に生きようと頑張っているのが伝わったのである。

それから孤児院や農村にも訪れた。訪れる前は発展途上国というのもあり、きっと貧しい生活をしているのだろう。と思っていた。だが、実際訪れてみて、子供たちと遊ぶと日本の子供たちとは違い、ゲームもせず折り紙やボール遊び、ダンスなど遊ぶ物は数少なくてもこんなに充実して遊び、笑顔で溢れていて、純粋な心を持つ子供たちばかりで私の想像と違っていたのである。現地の人々はとても親切で笑顔がキラキラしていたのであった。言葉は通じなくても一緒に遊んでいると本当の幸せとは何なのかをとても考えさせられたのであった。

比較してはいけないけれど、日本人は衛生面も綺麗で医療も学習面も充実している。だけどカンボジアでは医師が少ないから医療も発達しない、教師も少ないから教育も発達しないのであった。なにかの形で支援していく必要があると思った。しかし、支援していくためにはお金が必要である。学生の私たちにできることはなにがあるのだろうか。この 8 日間私はずっと考えながら過ごしていた。私たちができることはすごい限られているが、カンボジアの現状を沢山の人に知ってもらうこと。これだと思ったのであった。観光省の方達は過去のことである内戦のことはカンボジアにダークなイメージがつくからあまり見せたくないと言っていた。私は逆に見せるべきではないかと思ったのである。過去にあった内戦がもう二度と起こらないように。まだ知らない人に伝えていくべきであると思ったのである。私の想像をはるかに超える、言葉を失うようなキリングフィールドやトゥールスレン収容所、写真や実際に使われていた道具、頭蓋骨が一面にびっしり並べられていた

博物館、言葉を失うような見せ方でとても鳥肌が立った。

カンボジアで過ごした 8 日間は私にとって人生で最も濃い時間であった。このツアーにただ参加して終わりではなく、自分もなにか一歩を踏み出すことが大切である。と感じた。今後、学生委員会や勉強会に参加し、知識を深め活動していきたいと思ったのであった。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【ツアーで学んだこと】

茨城大学　人文社会科学部　2 年生

私は今、大学で国際関係について学んでいる。2 年生になって医療や教育、農業などの国際協力について学んだとき、これまで自分が考えていたものと実情があまりにもかけ離れていて、とても衝撃を受けた。その時から、実際に途上国に行って現地の状況を知りたいと思い、このスタディーツアーに参加した。そして、教育を受けることができないようなことをたくさん学ぶことができた。

まず、カンボジアの人について。彼らはとても幸せそうだった。これは現地でないと感じられないものだったと思う。特に孤児院や農村で子供たちと触れ合ったときにそう感じた。悲しいバックグラウンドを持っているから心を閉ざしている子が多いのかと思っていたけど、全くそんなことなく、むしろ向こうからコミュニケーションをとってくれた。私たちは途上国というワードからかわいそう、大変そうというイメージを持ってしまうけど、今回のツアーに参加して、現地の人たちの当たり前を外側から勝手に決めつけないことが重要だと改めて感じられた。

次に、支援について。もし教育について何を支援するかと聞かれたら、きっと私は施設の建設、または教育物資の提供と答えると思う。しかし、ツアー後の今なら教育制度と答える。カンボジアは学校数も増加してきており、学校内の物資も比較的充実しているように感じた。バイヨン中学校に訪れたとき、子供たちを通わせるのに親を説得しているという言葉が印象に残っている。日本では義務教育制度もあり、親が子供を学校に行かせないというケースは非常に稀なので、子供教育を受けることができない要因に親の反対があるとはあまり考えたことがなかったからだ。きちんとカンボジアの実情を知って支援している方なのだと思った。バイヨン中学校だけでなく、Sunrise Japan Hospital も会員制をとるなど、日本は発展している国だからといってやり方を押し付けるのではなく、その国にあっているやり方をとっているということを知れて、すごく素敵だと思った。支援する上で相手の国のニーズを理解し、柔軟に制度を整えることが大切だとわかった。また、国レベルの事業だと、対応が遅かったり、簡単に動かせなかったりするため、民間企業の重要さも考えさせられた。

最後に、豊かさについて。最終ディスカッションのテーマであり、一番回答が難しかった。これまで豊かさとは何かと考えたこともなかったが、今回様々な研修先を回って、発想力が豊かさにつながるのではないかと思うようになった。現状よりもっと便利な暮らしがしたい、お金が欲しいなどといった欲求はきっと誰にでも存在する。そこで、現実はどうにもならないからといって諦めて生活するのではなく、今あるものをどう使ったらよいかといった発想をし、工夫することが豊かな暮らしの第一歩なのではないか。きっとカンボジア人にはそういう精神を持っている人が多いから、私たちからしたら貧しいと思うよ

うな地域でも幸せそうに暮らしているのではないかと考えた。私も日常生活に不満を持つだけではなく、いかに今あるもので充実した生活にするか考えながら生活していきたい。

スタディーツアーでの 8 日間はたくさん学べて、考えてすごく濃いものだった。このツアーをきっかけに、これからどんどん世界に行って、そこでの学びを自分の糧にしていきたいと思う。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【知らない世界を知ること】

早稲田大学　文化構想学部　3 年生

今回、私は大学生活を過ごす中で自分の人生や過去の選択について悩むことがあったため、新しい価値観に触れたいと思って JAPF の 1 カ国ツアーに参加した。大学でインフラや都市について学んでおり、もともと発展途上国の水道やガス、電気の整備がどうなっているかについて興味があったため、先進国の日本との違いを学ぶ上でも意義があったが、それ以上に日本はもちろん世界には多くの人がいて、それぞれの環境の中でそれぞれの人生を生きていると感じられたことは私に大きな変化をもたらした。

人は、何を軸として生きるかや自分の人生の受け止め方、価値観はそれぞれ個人で異なるのではないだろうか。東京で生まれ育ち、なんとなく大学に入って受け身で生きてきた私にとって JAPF のツアーで出会った仲間たちはもちろん、カンボジアにいた人々は今まで自分のコミュニティにはいなかったためとても刺激的だった。特に印象的だったのはアンコール・クラウ村で出会った女の子である。彼女とは一緒に折り紙を折ったり写真を撮ったりした。アルファベットでお互いの名前も教えあった。短い時間であったがとても楽しくまたそれゆえ彼女が毎日を過ごす村の現状や将来、価値観について深く考えるようになったと思う。アンコール・クラウ村は世界遺産で観光地となっているアンコール・ワットの近くにあるとは言ってもその外れに位置し、私たちが普段使っているインフラはほとんど通っていない。また衛生設備も十分でないため、バケツに溜まった雨水を日常的に使用する。ろ過設備がないため鉄分が浮いてきてバケツの内側に赤い線がついていること、また村の男性はそのために尿道結石にかかりやすいことを聞いた時は衝撃的だった。村の子どもたちが通える学校には音楽や体育などの副教科の教員が不足し、トイレも整備されていない。中学校に進学しても卒業まで全員が通えるわけではなく、高校は作られてさえいない。そのような中で彼女のような子どもたちはこれからどのような人生を歩むのかということがとても気になった。村の中で生活していくのか、それとも違う場所で生きていくのか。家業を継ぐのか、全く異なる職業に就くのか。そもそもどんな選択肢があるのかということも考えた。その一方で自分がいかに必要なものを用意されてきたかということも感じた。それを当たり前のように享受してきたという事実に気づき、自分を客観視するきっかけとなった。

自分が歩んできた人生とは異なる人生を送る人間に会った時、彼や彼女が何を感じて考えているかがわからず、どう接すれば良いのか迷うことがあった。今まで自分は十分とは言えずとも人並みに様々なことを経験し、知識を得てきたつもりだったが、それらが役に立たない場面に初めて向き合った。今回の経験を通し、もっと多くのことを知りたいという気持ちが自分の中で大きくなった。以前お世話になった恩師が自分の知らない世界を知る方が絶対に楽しいと言っていたが、このツアーでその意味を理解することができた気が

する。自分の足りないところ、こうして振り返ってみてもまだ整理仕切れていないところもあるが、もっと知りたいという気持ちになれたことは大きな前進だと思う。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【カンボジアでの日々を通して】

大阪大学　医学部　2 年生

相手の立場に立つということ。このツアーで学んだ大事なことの一つだ。

私は今回初めてカンボジアを訪れた。初めての長旅、初めてのカンボジア。空港に降り立ってから私の目に飛び込んで来るのは、日本とは全く違う、初めて見る世界だった。内戦の爪痕を見たり、孤児院を訪れたり、病院に行ったり、農村に行ったり。これまで会うことのなかった沢山の出会いの中で私が強烈に感じたのは、個人の考え方の違いだった。

さて、カンボジアの学校ではポルポト時代の虐殺を詳しく教えることは少ない。それはなぜか。私は最初、カンボジア政府が都合の悪い情報を隠蔽しようとしているのだと考えた。負の歴史は語り継ぐことで繰り返さないようにするべきだと教わってきた私には遺憾だった。しかし、研修先で人々の口から聞く言葉は違った。家族が殺されて辛い思い出を思い出したくない。旧人民と新人民の争いが、歴史を語ることで再発するかもしれない。

夜にはグループのメンバーと、私たちがカンボジアの歴史を学ぶ意義について話し合った。カンボジアの歴史を学ばなければどうなるかという問いに、相手の歴史を学ばなければ、相手にどういう支援が必要か分からないと 1 人が答える。一方で、部外者は何が起こったか知りたくてニュースを見るが、被害を受けた当事者は自分の傷をえぐるニュースなんて見たくないと、東日本大震災を経験した 1 人が言う。

その日は 1 日の間に沢山の視点からの意見を知った。全ての意見は確かにその通りで、私の考えは、日本に生まれ平和な環境で育ってきた部外者のそれだった。当事者と部外者で、育ってきた環境で、受けてきた教育で、人の考えは全く違ってくる。当たり前のようで今まで実感しなかったことを、やっと理解できた瞬間だった。そして、相手を理解するには相手の立場に立って考えねばならず、相手が何を求めるのかは、相手を知ることで理解できるのだと気づいた。

では、私たち日本人がカンボジアへの支援を行う際に、何が必要なのか。金銭的、物質的な支援だけが本当にカンボジアにとって良い結果をもたらすのか。カンボジアとしての立場で考える。きっと違う。カンボジアという国が、不幸な人を生み出さないために必要なのはそういう支援ではなく、他国の支援なく自立した国となれるような支援だ。自国で人材を育て、次の世代に受け継ぐことができるような支援だ。私はこのことを、カンボジアを訪れなければ知ることはなかったであろう。

自分の「何か」を変えたくて参加したこのツアー。今回の学びは私の人生でどう生きるのだろうか。個人の考え方の違い、相手の立場で考えること。これ以外にも沢山の大事なことを学んだこのツアーは、将来の夢も定かではない私にとって、私の生き方を支える土台のようなものになるのだと思う。この土台を盤石なものにするために、これからの日々でこの学びを忘れず、沢山の人と意見を交わすことを心がけたい。そして、同じツアーに

参加した仲間、ツアーの引率、カンボジアの人々、家族や友人。大事なことに気づくきっかけをくれた皆に誇れるような自分になりたい。このツアー以降、私の中の「何か」は確実に変わり始めている。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【豊かさとは何か】

北九州市立大学　外国語学部　2 年生

私は、このスタディツアーを通して、普段観光では行くことがない孤児院や病院、観光省などに行くことができ、様々な方からお話を聞き、刺激的な 8 日間を過ごした。研修を通して、カンボジアの過去と現在の状況について知り、さらに、カンボジアがこれからより発展して行くためには、どのようなことが私たちにできるかについても考えることができた。また、このスタディツアーでの最後のディスカッションでもテーマとなった豊かさとは何かということについて、改めて考えてみた。

過去については、トゥールスレン収容所やキリングフィールド、アキラー地雷博物館での研修を通して学ぶことができた。ポルポト時代に行われた拷問や虐殺の様子を聞き、あまりの悲惨さに、本当にこんなことがたった 40 年前に行われていたことが信じられないと思った。キリングフィールドでは、骸骨をそのまま展示していて、日本にはない展示のされ方で、より恐怖を感じた。この恐怖をあおるような展示の仕方には、もう二度とこのようなことが起こらないようにという意味もあるのかなと感じた。

また、カンボジアの現在の状況について、私がイメージしていたより都会で、きれいに整備がされていて驚いた。Sui-Joh の浅野さんに出題された最初のクイズではっとさせられた。カンボジアはまだまだ教育が届いてなくて発展していなくてというイメージが私の中で固定されていたのである。しかし今回のツアーでその考えは払拭された。ただ、問題はまだまだ山積みだなと感じる部分もあった。都市部では、車もたくさん通っているし、街もきれいに整備されているが、農村のような場所に行くと、みんな裸足で歩いていて、健康に良くない水を飲んでいたり、ゴミ山で私たちが脱いだ靴を取り合っていたり、都市部と農村部での格差をかなり感じた。

では一体、私たちにできることは、何があるのだろうか。私は、今回自分が見たり聞いたりしたことを、伝えることがもっとも大切なことだと感じた。カンボジアは貧しいとか危険というようなイメージを持っている人が多いと思う。それは、知らないからであって、観光省で見せていただいたプロモーションビデオのような場所もあることをもっと伝えていけたら良いと思った。

そして、豊かさとは何かを私はあらためて考えてみた。日本は、欲しいものはすぐ買うことができるし、おいしいものを食べることができるし、住みやすい国で、豊かな国であると思う。一方で、カンボジアは貧しい国で豊かではなく、漠然と苦しい思いをしながら生活している人がたくさんいると思っていた。しかし、カンボジアを実際訪れてみて、教育面や医療面、衛生面などまだまだ未発達な部分もあるけど、豊かではないかと聞かれたら、答えはノーなのかなと思う。これは、私が感じたことで現地の方がどう思っているかは分からないけれど、日本では毎日がせわしなく動いて、ただ何となく生きていて、でも、カ

ンボジアのひとたちからは、今を生きるという強い思いが感じられた。今の状況をつらいと感じている人は少ないのかなと感じた。豊かさとは何かという問いにこれという答えは出せなかったが、豊かさの基準はそれぞれが持っているもので、それは同じ日本人の中でも異なると思うし、何事にも、自分の基準だけではっかてはいけないことを学ぶことができた。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【世界はジレンマで溢れている】

岩手大学　人文社会科学部　1 年生

今回のツアーがわたしにとっての初めての海外であった。しかも行先はカンボジア。出発前はイメージさえもはっきりと浮かばず、カンボジアを題材にした映画を直前になって鑑賞し、研修の予習をした気になっていた。しかし研修先を訪問し、現地の方々からお話を伺うにつれ、現地に行ってみないとわからないことが数多くあることに気づかされた。

そのなかでも最も衝撃的だったのは、ポルポトがもたらした影響である。ポルポトは原始共産主義を掲げ、1976 年から 1979 年の三年間にわたり大量虐殺を行い、カンボジアの国としての基盤を崩壊させてしまった人物である。彼は教師や医者などの知識人を重点的に処刑したことで、国内の医療従事者は激減し、カンボジアの医療そのものがゼロからのスタートを余儀なくされ、現在も国民の生活に支障をきたしている。日本では医者は絶対的な信頼を得ているが、カンボジアにおいて自国の医者の信頼度は低く、より良い治療を求めて国境を越えて通院することもあるという。また、学校の歴史教育においても、あまりに悲惨すぎるポルポト時代の事実を後世に伝えるべきか否か国民の間でも意見が分かれており、いまだカンボジア国民の気持ちの整理はついていない。研修先に含まれていたキリングフィールドやトゥールスレーン収容所などにカンボジア人が行くことはあまりなく、むしろ行きたくないという話を現地のガイドの方が仰っていた。このような、残酷な歴史を後世に継承すべきという立場と、当事者側の悲惨すぎる事実を伝えるにはまだ辛いという立場のジレンマめいた状況は、東日本大震災を経験した者として他人事としては受け止めることができない問題だと感じた。しかし実際にポルポトの生い立ちを聞くと、ポルポトはただただ残酷なことを行った人ではないことも今回知った。農民出身であり、貧富の差のない平等な社会形成を目指して勉学に励み、様々な思想を学んだうえで原子共産主義を選択し実行した。彼の根本にあるのは自国をより良い国にしたいという思いだったのではないのか。一口にポルポトを語ることもできないと感じた。さらに、カンボジアの大きな問題の一つがゴミ問題である。町の通りにはゴミがそのまま散らかっており、都市から離れていくにつれゴミの実情はますます顕著に表れていた。日本と異なりゴミは一つの場所に集められ、溜まっていき、ゴミ山なっていく。そのゴミ山では生きるため、ゴミを拾って、生活を成り立たせている人々もいる。研修先の中に含まれていたのだが、入り口のところで酷いにおいで私は具合が悪くなりゴミ山の中には行くことができなかった。気分が悪くなった私にガイドの方がこう言った。ここで生活している人たちはゴミ山のにおいに慣れてしまいました、と。慣れとは怖いものだ、とその時強く思った。ゴミ山で働く子どもや大人に雇用の場を設けるために活動している団体も存在するが、特に女性は育児との両立を考えると、遠くに出稼ぎへ行くよりも家から近いゴミ山で子どもを育てながら生活するほうが良いという結論に至るそうだ。ゴミ山にゴミを溜める以外の処理を模索すべ

きであるが、今までそこで生計を立てていた人々からすると、仕事の場を奪われてしまうことになる、というジレンマがここにおいても発生する。いずれにせよ、今のままではカンボジアは将来的なゴミ処理問題から目を背けることはできないし、関連する雇用の問題の解決も急務を要する。国の大問題になる前に適正な処理方法、それに伴う新たな雇用の場の提供を我々他国側が持続可能なアシストをしていく必要があると考える。

結論として、世界はジレンマであふれている、こう痛感させられた研修だった。研修期間のほとんどの夜に同じグループの参加者と研修先での感情を共有し、そこでの問題を話し合い、自分とは違うフィールドにいるからこそ持つ他の人の意見を聞く機会があったことは自分の成長につながったと思う。初めての海外が旅行ではなくインターンシップ研修という形で体験できたことの良さの一つであった。今回の研修から、複雑に絡み合う問題にどう取り組むべきか、正解はわからないし、そもそもの応えなるものは初めから存在するのか分からないが、今日より明日といった、よりよい世界の実現を目指して何かを始めてみることが一番大切なのではないのかと考えるのだ。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【当たり前と本当の幸せ】

関西外国語大学　外国語学部 1 年生

朝起きてご飯を食べて学校に行って勉強してアルバイトをして家に帰る。カンボジアに行く前はこれが私にとって日常と思っていました。それが当たり前と思っていた私にとってカンボジアの研修先での経験はたくさんの事を学ぶことができました。特に私が学んだことが多かった研修先は孤児院とごみ山です。

私は孤児院に行く前は孤児院に対して両親を亡くしたり虐待を受けた子供達がいて悲しいイメージを持っていました。しかし、実際訪れてみると子供達が笑顔で楽しく遊んで幸せそうにご飯を食べている姿がそこにはありました。そして孤児院では子供達は裸足で外を走り回って遊んだりご飯の準備と片付けを自分達で行ったり私にとって当たり前ではない光景を目にしました。私はこの時当たり前と本当の幸せについて考えさせられました。当たり前と感じていた日常はごくわずかな世界の中での話でこの孤児院での研修で大きく当たり前という考え方が変わりました。私が今まで当たり前と思っていたことはもしかしたら孤児院にいる子供達にとったらすごく幸せなことなのかもしれないと考えました。

次にごみ山では凄まじい想像を越える量のごみを目の前にして驚きました。カンボジアは急激に成長している裏で凄まじいスピードでごみの増加しています。もちろんもし焼却場などを作ればごみの量は減るかもしれませんがごみ山にはごみを分別することで生計をたてている人もいます。一般的に考えればこの状況なら焼却場を作るということが一番の解決策に見えそうですが実際研修先のごみ山に行ったからこそ生計をたてている人がいることを知ったり現状を見たからこそ一概に焼却場を設置してごみの量を減らすのはいい政策かどうかはわからないと私は感じました。そして私がごみ山で一番衝撃を受けた光景があります。それはごみ収集車がごみ山に到着した時にごみ山にいる人々が集まって歓声をあげてたことです。私からしたらただのごみなのですがごみ山の人にとっては生活費を稼ぐための大事な資源です。ここでも私は当たり前にごみは分別するものだと考えていましたが違うことに気づきました。

このことから私が学んだことは大きく分けて二つあります。まず一つ目は私が日常生活で感じている当たり前というのはごく一部の範囲だけでのことで見る世界を広げると当たり前とは人・地域・国単位で異なるということを見に染みて感じることができました。そして二つ目に本当の幸せについて考えさせられました。カンボジアは発展途上国や貧富の差が激しいといったイメージを持っている人も多くテレビでは悲しいメロディーとともにご飯とおかず 1 品だけしかない光景を放送している場面もありますが実際現地で生活を見てみるとみんな幸せそうに暮らしていました。私たちからしたら物足りないと感じる生活かもしれません。しかしカンボジアの人にとってはそれが当たり前でむしろ幸せであるのだろうと感じました。このことから本当の幸せというのは個々に異なり何が幸せで何が幸

せではないというのは本人つまり個人個人が決めるのだろうと感じました。私はこのカンボジアで学んだことを活かして見る範囲を広くし多様な考え方ができるようになろうと思いました。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【カンボジア研修を終えて】

同志社大学　政策学部　1 年生

私は、この研修を通して、カンボジアという国に実際に訪れ、直接現地の人々やものに触れて様々な刺激を受けた。その中で得た大きな学びが３つある。

一つ目は歴史の概念である。研修でカンボジアの過去について触れ、歴史とは何のためにあるのか、なぜ学校で勉強するのか、そもそも歴史とは何なのかを考え直す機会ができた。今までは、歴史とは過去の出来事から学び、現在に生かすものだとただ思っていたが、トゥールスレン収容所やキリングフィールドに実際に足を運んだり、ガイドの方やチアノルさんのお話を聞いたりして、クメールルージュの悲惨さを目の当たりにし、伝えてはいけない過去があることを初めて知った。まだ浅い歴史であるため、加害者側がまだこの世に生きているということから、これからのカンボジアの未来のためにあえて過去に蓋をするという選択があること自体知らなかったが、問題の責任者を処罰するだけでは解決しないカンボジアの人々の辛さや苦しさを感じ、消したい記憶になるのも理解できた。

二つ目は、教育の大切さである。カンボジア研修を通して、様々な問題についてグループの皆と話していくうちに、根本的な原因として教育という分野が大きく関係していると気づいた。道端に落ちている大量のゴミ、下水設備、医療や衛生問題、地域格差、政府のあり方などの問題の基盤には国民の意識や秩序の欠如があると考え、それらはクメールルージュの大量虐殺によって、教育の基盤が失われたことと繋がった。日本には当たり前に義務教育が備わっており、高校、大学にも比較的進学できやすい環境が整っているため教育の必要性を改めて考えることはなかったが、カンボジアをあらゆる分野から見つめて問題の根本を探ることができた。しかし、教育の基盤が無いカンボジアにとって海外からの支援や技術援助は必要ではあるが、教育はその国を創る大きな要素であり、カンボジアの国民性が失われる心配もあり、これからさらに考察を深めていく必要があると考えた。

三つ目は価値観の多様さである。研修中、様々なカンボジアの姿を眺めて問題が浮かび上がってくる反面、カンボジアの人々の素敵な人間性にも触れた。目が合うと笑ってくれる人々、店の前でお昼寝している人々、水上でハンモックに揺られる人々、目を輝かせて駆け寄ってくる子供たち、みんな幸せに見えた。そもそも自分たちが考えた問題は日本と比較したときに浮かび上がってきた問題であり、カンボジアの人々にとっても問題であるかは彼らの価値観による。また、人々にとっての幸せ、当たり前、常識は彼らの置かれている環境によって変わる。このことは日本の問題、そして世界中の問題を考えるにあたってとても大事だと研修を通して改めて感じた。

今回の研修において、共に過ごしてきたグループのメンバーの存在がとても大きかった。日本各地違った土地で様々な異なる人生を歩んできた人が同じ問題について向き合うことで自分が考えることができなかった視点に気づかされたり、彼ら自身の価値ある経験

を知ったりできた。この経験を活かし、これからもいろいろな土地に足を運び、たくさんの人々と交流していきたい。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【当たり前とは 】

京都市立芸術大学　音楽学部　1 年生

私が今回このカンボジアスタディーツアーに参加したのは日本と何がどのように違うか学ぶためである。そして参加して、私が日本に住んでいて当たり前だと思っていたことはこの国では当たり前ではないということに衝撃をうけた。具体的には 4 つある。

1 つ目は、交通についてである。道路整備が整っておらずバイクやトゥクトゥク、車があらゆる方から向かって来る。そしてヘルメットを被っていなかったり、大人 2 人 2 こども 2 人が 1 台のバイクに乗っている光景も何度か目にした。現地の方とお話した時に、やはり事故は多いと聞いた。日本では法律によって厳しく整備されており、処罰も受けるはずである。

2 つ目は、衛生面である。ツアーでは五日目にシェムリアップのゴミ山へ行った。想像とは比較できないほどのゴミの量と異臭を経験した。ゴミは 1 日に 300 トンも運ばれてくるという。ゴミを拾う人達は最初は 20 人程度だったのだが、稼ぐ方法がない人がだんだん集まり今では 500 人にものぼる。また私は裸足で歩いている子供を見かけた。ゴミ山には HIV の注射器や、粉々になったガラスが落ちている。踏んでしまえば大変なことになる。私はその時、ゴミの量と異臭に驚くことしか出来なかったのだが、後から日本ではありえない実態であると思った。ゴミ山というものが存在している事、ゴミ山で働くしか稼ぐ方法がない人がいる事、そこで裸足でいる人がいるという事。これは必ずなにか対策を取らなければならない。しかしゴミ山を無くし焼却炉を作ってしまうとそこでゴミを集めている人の仕事が無くなるという新たな問題が生じる。

3 つ目は、教育である。農村のバイヨン中学校でお話を伺った。なんとその中学校は学費は全額無料だった。しかし、生徒は学年が上がるにつれて減少している。その理由は親が教育に関心がなく生活が苦しいと、子供は学校を辞め働くからであった。プノンペン王立大学の在学生と交流をした時に、大学に進学する人は約５％だということを教えて貰った。日本では中学校までは義務教育である上に高等学校の進学率は 80%、大学の進学率は 57%である。私がここで思ったのは、教育を受ける人の数が多いほど国の可能性・視野も広がるということだ。カンボジアでも上の立場の人が国の現状を知り、政治についての知識をたくさん持ったならば今の環境は全く変わると思う。

４つ目は人々の温かさである。カンボジアでは見ず知らずの人でも手が会うと微笑んでくれたり、挨拶をしてくれた。また、家族関係もとても大切にされており、祖父母、親、兄弟、それぞれ違った挨拶の方法により尊敬を表しているという。日本では知らない人は言うまでもなく家族であっても挨拶をあまりしない。

この 4 つを踏まえて私はこの日本とカンボジアの「当たり前」の差を無くすべきだと考えた。SUI-JOH で浅野さんのお話を伺った際に、「カンボジアは発展途上国から抜け出して

いる」と仰っていたのだが、私にはどうしてもそうは思えなかった。

この状況を変えるために自分には何が出来るのかと考えた。しかし、子供達に靴や服をあげることくらいで、根本的に問題を解決する方法が思いつかなかった。だから、自分ができることを 1 つずつ実行して今の日本で「当たり前」だとされていることを「当たり前」だと思わずに感謝して、意思さえあれば好きなことが好きな時にできる環境を最大限利用して有意義な時間を過ごしていこうと思う。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【“豊かさ”とは？】

同志社大学　文学部　1 年生

私がこのツアーに参加するきっかけは高校 3 年の時にお世話になった塾のチューターさんの話だった。“カンボジアっていい国だよ”何度もカンボジアに行っているというそのチューターさんの言葉が当時の自分には印象的だった。高校 3 年の自分にとって、カンボジアのイメージは“貧しい”“発展途上国”“地雷”などとあまりいいものではなかった。“なぜカンボジア？”この気持ちが強かった。その疑問が自分の中にどこかずっと残っているまま大学生になってこのツアーに出会った。自分の目で、“カンボジア”という国を見てみたいと思った。“いい国”の言葉にはどんな意味があるのかを知りたかった。そんな理由で特に大きな目的もなくこのツアーに参加した。

８日間の様々な体験を通して実際に自分の目で見たカンボジアは私にいろんなものを与えてくれた。たくさんの人から聞いた話、現地の子供たちと触れ合った時間、自分の目で見て初めて知った過去、実際に足を運んだからこそ見れた景色、同じ景色をみてきた仲間とのディスカッション。一つ一つが私にとって今までにはない体験であり、様々なことを考えさせられた、大きな影響を与えてくれた。

その中でもとくに自分の中に大きく残っているのは、“豊かさ”について考えさせられた経験だ。

プノンペンなどの都市部は自分の想像をはるかに超えるほど、発達していた。しかし、農村部の発達は決して進んでいるとはいえなかった。銀が浮いてきてしまうような水を生活用水として使っている現実、ゴミ山でゴミを拾って生活する人々、下水が流れる湖で水遊びをしている子供達の姿。衝撃的な現実がたくさんあった。それと同時にこの現実に対して、様々な国によって支援が行なわれていることも知った。

様々な現状を知った後、グループで“豊かさとは”という議題でディスカッションを行なった。その中で、“私たちの支援は、本当にカンボジアの人々にとって幸せなのか”という意見が出た。支援をする上で、私たちは何を大事にしなければならないのか、そもそも“豊かさ”とは何なのか、考えさせられた。ツアーの中で現地の人たちと触れ合う機会がたくさんあった。その中で、何よりも印象的だったのは、彼等の笑顔だった。私はこのツアーの中で幸せそうな笑顔をたくさんみた。確かに医療、ライフラインの充実は大切なことだ。でもそれは、私たちが考える“豊かさ”の押し付けでは無いのか。その国によって文化が違うように価値観も違う。なにを“豊か”であるとするか、“幸せ”であるとするか、難しい問題だった。結局、今の自分には答えは見つけることができなかった。しかし、だからこそ、私はカンボジアでの体験をあの８日間で終わらせることがないようにしたい、と思わされた。この問題について、カンボジアの現状に対して、自分がまず考えることそして自分自身で考えたことを行動に移すこと挑戦すること。これはカンボジアで出会った

人たちに教えてもらったことだ。カンボジアでの 8 日間は全てが刺激的だった。この世界にはまだまだ自分の知らない、見たことがない現実がたくさんある。カンボジアの 8 日間で気付かされた。ここで終わらせない、終わらせたくない、この自分の気持ちを大切にしたい。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【豊かさとは何か】

関西外国語大学　外国語学部　1 年生

私は、今回このカンボジアスタディーツアーに参加して、“豊かさ”とは何であるのかということをカンボジアの様々な面を通して考えさせられた。

私がこのツアーに参加したのは、貧困というものの現実を自分の目で見てみたいと思ったからだ。もちろん日本にも貧困問題などは多少あるが、国全体で見てみるとやはり発展国なのだ。そんな私のカンボジアのイメージは、たくさんの人が貧困に苦しみ、高層ビルなどはなく、緑に囲まれて生活しているというものだった。しかし実際に初めて見たカンボジアのプノンペンは高層ビルがたち、高級車も走っているという想像とはかけ離れた街並みで、自分の想像以上の“物の豊かさ”を感じた。

しかしシェムリアップの農村部でみたのは、私が想像していたカンボジアの姿そのものだった。崩れかけた家で生活している人、ゴミ山に捨てられたゴミによって生計を立てている人、お金がないことで十分な教育が受けられない子どもや、親に捨てられてしまった子どももいた。テレビなどで知った気になっていた貧困による様々な問題の深刻さを感じた。しかし農村のフリースクールや孤児院に訪れ、子どもたちと交流した際にふと思ったことがあった。この子達と幼少期の私たちと何が違うのだろうということだ。むしろカンボジアにいる子どもたちの方が笑顔が多く元気な気すらした。プノンペンの王立大学や農村の学校に訪れた際も、みんな英語を普通に話していて、さらには流暢な日本語まで聞くことができた。日本では私のように外国語を主に学ぶ学校に行っていても満足に話せない人も多く、さらにいってしまえば学ぶ意欲すらあまりない人もよく見かける。それに比べてカンボジアの人たちは学ぶ意欲がすごく、またその言語能力にも驚かされ、自分のことが恥ずかしいと思うほど圧倒された。ここで私は今まであまり感じたことのないような“心の豊かさ”を感じた気がした。

確かに私が住んでいる日本という国は先進国であり、世界の中でもきっと優れた技術やたくさんのものを持っている“豊か”な国だと思う。しかし日本には“いじめ”は常にどこかにあるが、カンボジアにはないことや、教育制度は十分すぎるほどに整っているのに世界から見ると言語能力が乏しかったりすることが不思議で仕方ない。国としての豊かさは持っているが、人としての豊かさみたいなものが私たちには足りていないのかなと思った。SuiJoh の浅野さんが言った「いつか君たちが社会に出たときにライバルになるのはカンボジア人だと思う。」という言葉に、聞いたときはまさかと思ってしまったが、一週間カンボジアのたくさんの場所に行き、物を見て、人とふれあってみて、本当にその通りだと深くうなずける気がした。しかしカンボジアにはまだまだ深刻な問題が根強く残っていて、他国からの支援が必要なところも多い。日本に帰ってきてから、さらに強くそう実

感し、私はこれから自分がなにをできるのか、私自身にも足りないと感じた“心の豊かさ”をどう身につけていくのかを考えていきたいと思う。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【自分の目で見ること】

北九州市立大学 文学部 2 年生

今回のツアーに参加したのは、海外に行ってみたいという思いと、メディアが提供するものには、提供する側の意図が大きく関わっているということを知り、何が現実であるのか。メディアからの情報のどういった部分が‘加工’されたものなのか。を自分の目でカンボジアをみて知りたいと思ったからだ。

カンボジアに行く前は、カンボジアは発展途上国であり、「路上で生活している人がたくさんいる。あまり綺麗ではない。」といったイメージであった。でも、実際に行ってみると、イメージのように発展していないとこもあったけれど、高層ビルは至る所に建っているし、高級車もたくさん走っているといった感じで、想像していなかった部分も多くあった。だから、はじめての数日間は、カンボジアという国の人々の暮らしについて驚きの連続であった。そして、メディアが提供するものがあくまでカンボジアという国のある一部分であり、その国の全てではないから、メディアからの情報だけで、物事の多方を分かった気になってしまうことがあるが、それだけで判断するべきではないと改めて感じた。そのように、感じられたのも自分の目で実際にカンボジアを見ることができたから分かったことだと思う。

カンボジアで訪れた複数の研修先では、「当たり前とは？」という疑問に多くぶつかった。特に印象的であったのが、孤児院である。孤児院では手を洗う水とこれから食事を乗せる食器を同じため水で洗っていた。これは、健康の為取り払った汚れを再び自ら取り入れようとしていることを意味する。日本ではこのことは良くないことだと皆が分かっているからやろうとする人はいないし、当たり前だと思う人はいない。でも、彼らにとっては、それが汚い事だとは分かっていないし、いつもやっている事だから当たり前のことだと思っている。これは、衛生面に対する考え方の違いが起因する違いであり、根本からの当たり前が違うのだと感じられた出来事であった。その他にも、人々の暮らしの中では、まだ 10 代前半の子どもが運転するバイクにヘルメットなしに複数人乗っていたり、交通マナーを守らない、スリなどの犯罪が多発する、目が合うと知らない人でも笑顔を向けてくれるといったように日本ではあまり考えられないような現状があり、当たり前の違いを考えされられた。

今回上記していないことも多くあるが、自分が常日頃当たり前だとなんとなく感じている多くのものが、今回訪れたカンボジアという国では、当たり前ではなかった。「自分が当たり前だと感じるものが他人には当たり前ではない。」これを頭ではなんとなく理解していたが、実際には理解できていなかったのだと痛感させられた。でも、これはカンボジアという異国の地に行かなくても身近な人との関わりでも分かることであると思うから、自分がこれまでどれだけ自分の当たり前を当たり前としている人と多く関わってきた

のか。ということを知り、狭い世界で生きてきすぎたと感じた。同じ価値観の人といるのもいいけど、今回のツアーを通して違う価値観の人と関わるのは発見があって楽しいと感じたから、これからは、もっと自分の当たり前とはかけ離れた価値観を持った人と関わっていきたいと思う。しかし、以上のように感じれたのも自分が実際にカンボジアに行って、見て感じ考えたからであって、カンボジアに行っていなかったら考えることもなかったであろうから、SNS やインターネットなど情報は溢れかえる現代でも、人づての情報だけを大事にするのではなく、自分の体験を大事にするということが大事であると思った。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【発展途上国の可能性と日本の可能性】

奈良女子大学　生活環境学部　3 年生

私はこのツアーを通して、カンボジア、そして発展途上国のイメージががらりと変わりました。カンボジアの都市部は思っていたよりも発展していて、高級車が走っていたり、規模が大きくきれいなイオンモールがあったりと驚きました。人々もとても優しく明るくて、意外でした。今まで先進国がカンボジアを、発展途上国を支援しているという印象があったのですが、今回、sunrise japan hospital やその他の研修先を通して、発展途上国だからできることがあって、発展途上国はマイナスではなく、これからますます発展していく可能性にあふれた国だと捉えることもできるのだと気づかされました。また、単に日本が支援しているのではなく、ともにお互いの課題を協力して解決に向けて取り組んでいたりして、本当の意味でのボランティアのありかたについても考えさせられました。日本も戦後は他国に援助してもらって今の発展をとげているように、ボランティアというと、一見、こちら側が一見与えているよだが、過去に自分たちも助けてもらったかもしれないし、逆にこれから助けてもらうときがくるかもしれないし、周り回って自分たち自身を助けることにもつながりうるのかなとも思いました。

そして、ツアー中の生活では、日本では味わえない経験がたくさんできました。様々な分野で色々な視点で考えることができ、それらの相互関係も捉えることで、学びが深まることを実感しました。カンボジアから見た日本や、日本との違いを知ることで、日本のことがもっとよくわかり、日本のことがもっと大好きになりました。今まで、日本製は高くて外国製は安いから、外国製を選んでいたりしていましたが、ハイクオリティで安全性の高い製品をつくる日本の技術はすごいと思い、メイドインジャパンの価値を知りました。そのうえ、とくに衛生面では、日本の水道水が飲めることや、様々な公共施設やレストランの衛生管理の素晴らしさに改めて感動しました。日本の空気環境も昔よりもだいぶ改善されていて、こうした日本の衛生環境改善の技術は誇れるもので、もっと世界に発信していくべきで、日本の強みになるのではないかと感じました。

そして、孤児院やプノンペン王立大学、農村の学校で教育の現場を見て、自分で自由に選んで勉強できることの有難さを知り、スイジョーで大学生は強い！というお話を聞き、今だからできる、今しかできないことを考えさせられました。また、カンボジア人と比較して、日本人は英語が本当にできないなと思わされ、これからのグローバル社会で日本人が生き残るためにも、英語の大切さも知りました。このツアーを通して、日本に生きる自分がこれからしていきたいこと、自分の強みや長所、それらの伸ばし方、方向性、など自分の成長につながるいい経験ができました。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【優先すべき最良の改善策とは】

北九州市立大学　外国語学部　2 年生

私は小学生の頃から、カンボジアに行き、ボランティアとして活動することを一つの目標としている。その目標を実現するには、カンボジアについてもっとたくさんの知識が必要だと思い、今回のスタディーツアーに参加した。実際に行くことで学ぶことのできたカンボジアの現状につて特に気がかりな点が二つあった。

一つ目は都市部の交通マナーの悪さだ。カンボジアの都市部の発展については大学でも学ぶ機会があったが、移動中はずっと外を見てしまうほど交通マナーの悪さには喫驚した。乳児を抱いている女性が、車やバイクに当たるのではないかと思うほどのすれすれの距離を、全く動じる様子もなく歩いていたのは私にはショッキングな光景だった。車間距離が安全を確保できるほど取られてなく、信号が少ない為、歩行者が安心して横断できる場所がない。実際に道路を横断するとき、ガイドさんがいたから渡れたが、自分たちだけでは怖くて到底渡れないだろうと思った。何より驚いたのは、バイクの運転に免許がいらないということだ。四人乗りをしていたり、バイクの数倍の大きさの荷物を積んで運転していたり、日本では考えられない乗り方をしている人を何人も見た。事故が多発しているという事実を改善するには、免許を取得しなければ運転できないようにするしかないだろう。また、車やバイクが多い通りでも、信号がないのが気になった。まずは、信号を作ることを最優先するべきだが、今の様子を見ていると信号ができたところで全員がマナーを守るのだろうかとも思ってしまう。約一週間しか滞在できなかったが、何度も冷や汗をかくような場面を見た。優先するべきなのは本当に高層ビルの建設だろうか。

二つ目は、ゴミ問題だ。カンボジアのゴミ問題というと、ゴミ山のイメージしかなかった為、都市部、農村部関係なくあらゆる所にゴミが散乱しているのは衝撃だった。何故ゴミ箱にゴミを入れないのだろうかと単純に思ってしまったが、親の世代も、子供達も、それが当たり前だと思って生活しているから、何とも思わないのだろう。また、ゴミ山はカンボジアに一箇所だと思っていたが、10 箇所くらいあると聞き、そこまで深刻な問題だったのかと胸を衝かれた。

このスタディーツアーで、カンボジアの素敵なところはもちろん、おかしいと感じるような悪いところもたくさんのことを学ぶことができた。多大な情報を今はまだ処理しきれていない為、最良の改善策を問われてもはっきりと答えることはできないが、国民の安全や健康より、発展を優先している現状は正直理解しがたい。しかし、今回学んだ全てのことには繋がりがあるように感じる。その為、交通面、ゴミ問題の面でいえば、ヘルメットを全員着用する、街中にゴミ箱を設置するといった些細なことで、多方面にいい影響を与え、現状は少しずつ改善されていくだろう。ボランティアとして訪れる日までに、もっとカンボジアについて理解を深めたいと思う。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【第三世界に対する支援】

同志社大学　グローバル地域学部　2 年生

私は子供からずっとボランティア活動を参加している。いつか第三世界にボランティア活動を参加したいために、私は今回のスタディツアーに参加した。カンボジアを行く前に、この国に対する印象は非常に貧困と思った。しかし、このツアーと共に色々な場所を行ったり、見学したり、カンボジアに対する印象も大分変わった。そして、先進国と発展途上国からの支援方法について、幾つの感想がある。

そもそも、一般的には、支援はお金を持ち国から貧困の国に支援金を出すこと。政府、企業と民間この３つがある。例えば、日本の株式会社 Sunrise Healthcare Service から資金を出して、カンボジアで Sunrise Japan Hospital を設立した。その一方、中国みたいの国も毎年多くの支援金を出して、たくさんの資金を注入して、カンボジアの発展について多くの力を入れた。しかし、今回孤児院の責任者と観光省の職員を話す限り、これらの支援方法のデメリットを理解した。

まずはお金だけの支援から起こす問題について、問題を解析する。多くな国たちは第三世界や発展途上国を支援する時、そのまま多くなお金を出して、それで終わる。こういうやり方はお金が確実に支援を必要人々の手で到着できるかどうか保証できない。孤児院の責任者から：毎年外国からの支援金は半分以上賄賂した。確実に孤児の手で到着できるお金は本当に少ない。そのため、支援した後の後続観察は非常に大切だ。自分のお金は悪用されることをはきり確認することは重要だ。そうしないと、第三世界の貧困問題や社会問題は根本的に解決できない。

香港出身の私は支援金が悪用されることはとっても分かる。なぜなら、2008 年四川の汶川で大地震が発生した。当時、全国で約 650 億元（9880 億円くらい）の寄金が四川省政府に届いた。しかし、その中には約 510 億元の寄金は政府官員を悪用され、支援は中々進めなかった。その後、悪用された資金を調査したい新聞記者たちは当地政府から逮捕され、この事件はそのまま解決しなかった。勿論、寄金を悪用されないため、支援した後の後続観察は大切と思う。しかし、寄金の利用を一々調査することはかなり大変し、時間もかかる。そのため、支援国から直接寄金を使って、被支援国たちが必要な物資を購入することも１つの解決策と思う。もう１つの解決策は教育からだ。例えば、日本の株式会社 Sunrise Healthcare Service は病院の設立だけではなく、彼らは日本の医療人材、技術、産業など、カンボジアに輸出、当地の人々に知識を伝え、まさに根本から問題を解決するだ。

この八日間、私はカンボジアで色々素敵な人を出会った。さらに、色々な問題について意見を交換して、将来の人生に対して絶対いい影響を与えると思う。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【歴史と現在】

大阪大学　文学部　2 年生

歴史をなぜ学ぶのか。どう伝えていけばよいのか。今回のツアーではこの 2 点について深く考えさせられた。

私たちが訪れた研修先は、それぞれカンボジアの「産業・教育・文化・医療・環境」など様々な分野の現状を知り、その課題を考えることができるところだった。現状は分野によっても研修先によってもバラバラであったが、その抱える課題はほとんどがポルポトの大量虐殺の時代に起因しているように感じられた。

例えば、「Sui-Joh」を立ち上げた浅野氏はこの事業を立ち上げた理由として、ポルポト時代に型紙を作る技術が失われてしまったせいで、シャツの袖の長さがそろっていなかったり、穴が開いていたりなどの不備のある服が生産されていることを挙げられた。観光省では、ポルポト時代のことを知ることができる施設や場所を訪れる、いわゆるダークツーリズムを積極的に推進しているわけではないものの、頼らざる得ない状況にあることがわかった。Sunrise Japan Hospital では、ポルポト時代に 40 人までに減少した医師を増やすため、極端な医師育成制度をとり知識・技術ともに未熟な医師を大量に生み出してしまったせいで、今でもカンボジアの医療技術が低い水準でありカンボジア人自身がカンボジア人医師を信用していないという現状が見えた。

このように、すべての研修先において「ポルポト」の 4 文字を聞かないことはなかったと言い切れる。そのくらいにポルポトがカンボジアに与えた影響は大きいのだろう。つまり、カンボジアの現状と課題を知るためには、なぜこのような現状に至ったのか、その歴史の流れをはっきりと理解することがとても重要である。歴史を学ぶことは、現代を理解することなのである。

しかし残念なことに、のカンボジア国内においてこのポルポトに関する教育はほとんどされていない。バイヨン中学校を創設したチア氏によると、まずは国内統一が最初にされるべきことであるので、わざわざ国内で対立を生むようなことはまだできないのが理由だという。この説明には納得してしまった。ポルポトの大量虐殺が行われてからまだ 40 年ほどしか経っていない。祖父母・両親を殺された子どもも、逆に殺した側の子どもも多くいることだろう。カンボジアにルーツを持たない私でさえ、ポルポトに対して恐ろしいと思う気持ちや責める気持ちが強くある。子どもたちが歴史を知ったことで対立がうまれるのを危惧する気持ちも理解できる。

これらを考えると、歴史はどのように伝えていくべきなのだろうか。よく言われることだが、歴史を伝えていく目的は「同じ過ちを繰り返さない」ということにあると思う。これを達成するためには、歴史を「ポルポトがこんなひどいことをした」「恐ろしい、ひどい、理解できない」といった、単なる「事実」や「感情」だけで止めてしまってはならないの

ではないか。なぜポルポトはなぜこのような国家をつくろうとしたのか、どうすればポルポトはこのような大量虐殺を行わずにすんだのかといった、過ちの原因や繰り返さないための方策を考えるべきなのではないか。

歴史の積み重ねで現在がある。この現在を理解するため、よりよくするためにも、歴史を事実や感情だけでとらえるのではなく、現在に生かすことのできる手法を探る手掛かりとしてとらえるべきだと思う。